

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第10集

松田掛畠遺跡 岩本下内遺跡

福岡県みやま市・大牟田市所在遺跡の調査

2008

福岡県教育委員会

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第10集

松田掛畠遺跡 岩本下内遺跡

福岡県みやま市・大牟田市所在遺跡の調査



上. 松田掛畑遺跡遠景 空中写真（南から）



下. 松田掛畑遺跡 1区・2区 空中写真（上から）



上. 岩本下内遺跡遠景 空中写真（北から）



下. 岩本下内遺跡全景 空中写真（南から）

序

福岡県教育委員会では、平成13年度から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局の委託を受けて、九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本報告書は平成17年度に調査を実施したみやま市瀬高町松田に所在する松田掛畠遺跡と、平成18年度に調査を実施した大牟田市大字岩本に所在する岩本下内遺跡の記録です。

松田掛畠遺跡は、中世末から近世初頭の集落跡を発見し、隣接する松延城跡の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。

岩本下内遺跡では、古墳時代の住居跡や飛鳥・奈良時代の掘立柱建物跡を発見しました。特に大型の掘立柱建物跡については、この時代のものとしては市域で初めての発見で、地域の歴史を知る上で貴重な成果を得ることができました。

本書が文化財愛護思想の普及及び学術研究、生涯学習への一助となれば幸いです。

なお、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、関係諸機関や多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成20年3月31日

福岡県教育委員会教育長 森山良一

例言

- 1 本書は平成17・18(2005・2006)年度に九州新幹線建設に伴い発掘調査を実施した、福岡県みやま市瀬高町松田に所在する松田掛畠遺跡と、大牟田市大字岩本に所在する岩本下内遺跡の記録で、九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告の第10集となる。
- 2 当遺跡の発掘調査・整理報告は、独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 3 当遺跡は九州新幹線船小屋～大牟田間の埋蔵文化財調査第4-C・16地点にあたる。
- 4 本書に掲載した遺構写真は小川泰樹・一瀬智が、遺物写真は文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影した。なお、空中写真は(株)東亜航空技研に委託した。
- 5 本書に掲載した遺構図は小川・一瀬・坂本真一・大庭孝夫・秦憲二が作成した。なお、掲載した遺構図の方位は全て座標北(G. N.)である。
- 6 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において、濱田信也の指導の下に実施した。出土遺物の実測は小川・一瀬の他に、城門義廣・棚町陽子・久富美智子・田中典子・坂田順子・橋之口雅子・若松三枝子・寺岡和子・中川真理子・中川陽子・中村洋子・栗林明美が行った。製図は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓美・安永啓子・辻清子が補助した。
- 7 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管している。
- 8 本書の執筆はⅢ-1(松田掛畠遺跡)を一瀬、Ⅲ-1-6)を(株)パレオ・ラボ、その他を小川が行い、編集は小川・一瀬が行った。

本文目次

I.	はじめに	
1.	調査の経緯	1
2.	調査の組織	3
II.	位置と環境	5
III.	発掘調査の記録	7
1.	松田掛畠遺跡	7
1)	遺跡の概要と基本層序	7
2)	1区の検出遺構と出土遺物	9
(1)	1区の概要	9
(2)	柱穴列	9
(3)	井戸跡	10
(4)	土坑	21
(5)	溝	24
(6)	1区その他の出土遺物	30
(7)	小結	30
3)	2区の検出遺構と出土遺物	30
(1)	2区の概要	30
(2)	井戸跡	30
(3)	土坑	38
(4)	溝	39
(5)	2区その他の出土遺物	42
(6)	小結	46
4)	3区の検出遺構と出土遺物	46
(1)	3区の概要	46
(2)	掘立柱建物跡	46
(3)	井戸跡	47
(4)	土坑	48
(5)	溝	51
(6)	3区その他の出土遺物	58
(7)	小結	60
5)	まとめ	60
6)	松田掛畠遺跡出土木製品の樹種同定	62
2.	岩本下内遺跡	65
1)	遺構と遺物	67
(1)	掘立柱建物跡	67

(2) 壇穴住居跡	70
(3) 溝状遺構	72
(4) 土坑	74
2)まとめ	75

図版目次

巻頭図版 1

巻頭図版 2

図版 1 上 1区北側空中写真（上が北）
下 2区空中写真（上が北）

図版 2 上 3区全景（南から）
下 1区南側全景（北から）

図版 3 上 1区1号井戸跡（南から）
下 1号井戸跡木製品出土状況（東から）

図版 4 上 1区2号井戸跡（西から）
下 1区3号井戸跡（東から）

図版 5 上 1区4号井戸跡（南北から）
中 1区5号井戸跡（南から）
下 5号井戸跡木製品出土状況（南東から）

図版 6 上 1区6号井戸跡（北東から）
中 1区7号井戸跡（南西から）
下 1区8号井戸跡（南西から）

図版 7 上 1区2・3号土坑（北から）
中 1区5-1・5-2号土坑（南東から）
下 1区10号土坑（北西から）

図版 8 上 1区2号溝（北から）
下 1区5号溝（北から）

図版 9 上 1区10号溝（東から）
下 2区11号井戸跡（南西から）

図版10 上 2区14・15号土坑（西から）
下 2区16号土坑・14号溝（南から）

図版11 上 2区8号溝（西から）
下 2区9号溝（南から）

図版12 上 2区13号溝（北から）
下 3区1号掘立柱建物跡（南から）

- 図版13 上 3区13号井戸跡（南から）
下 3区14号井戸跡（北西から）
- 図版14 上 3区20号土坑（南から）
下 3区22・23号土坑（西から）
- 図版15 上 3区15-1・15-2・16号溝（北から）
下 3区30号土坑（南西から）
- 図版16 1区出土遺物
- 図版17 1区出土遺物
- 図版18 1・2区出土遺物
- 図版19 2区出土遺物
- 図版20 2・3区出土遺物
- 図版21 3区出土遺物
- 図版22 3区出土遺物
- 図版23 上 岩本下内遺跡遠景 空中写真（南西から）
下 調査区全景 空中写真
- 図版24 上 1号掘立柱建物跡（南から）
下 1号掘立柱建物跡柱掘形断面土層
- 図版25 上 1号掘立柱建物跡柱掘形断面土層
中 2号掘立柱建物跡（南から）
下 2号掘立柱建物跡柱掘形断面土層
- 図版26 2号掘立柱建物跡柱掘形断面土層
- 図版27 2号掘立柱建物跡柱掘形断面土層
- 図版28 上 2号掘立柱建物跡柱掘形断面土層
中 1号竪穴住居跡（南から）
下 1号竪穴住居跡土器出土状況（北から）
- 図版29 上 2号竪穴住居跡（南から）
中 4号土坑（東から）
下 1号溝状遺構（西から）
- 図版30 各遺構出土石器・土器

挿図目次

第1図	九州新幹線船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点 (1/100,000)	2
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6
第3図	1～3区土層実測図	8
第4図	松田掛畠遺跡調査区配置図 (1/2,000)、遺構配置図 (1/200)	折込
第5図	1号柱穴列実測図 (1/60)	10
第6図	1・2号井戸跡実測図 (1/60)	11
第7図	1・2号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、4・5は1/4)	12
第8図	1号井戸跡出土木製品実測図 (1/3)	13
第9図	3・4号井戸跡実測図 (1/60)	14
第10図	3号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、16～21は1/4)	15
第11図	4号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、25は1/4)	16
第12図	5・6号井戸跡実測図 (1/60)	17
第13図	5号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、34は1/4)	18
第14図	5号井戸跡出土木製品実測図 (1/3)	19
第15図	6号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、39・40は1/4)	20
第16図	7・8号井戸跡実測図 (1/60)	21
第17図	7・8・9号井戸跡・2・3・5-1号土坑出土遺物実測図 (1/3)	22
第18図	2・3・5-1・5-2・10号土坑実測図 (1/30)	23
第19図	2・3・5・6・10号溝実測図 (1/60)	24
第20図	2号溝出土遺物実測図① (1/3)	25
第21図	2号溝出土遺物実測図② (1/3、90・98・102・107・108は1/4)	27
第22図	2号溝出土遺物実測図③ (1/3、112・113は1/4)	28
第23図	3・5・10号溝・1区その他の出土遺物①実測図 (1/3)	29
第24図	1区その他の出土遺物実測図② (1/4)	31
第25図	10・11・12号井戸跡実測図 (1/60)	32
第26図	10号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、145は1/4)	33
第27図	11号井戸跡出土遺物実測図① (1/3、150・158・159は1/4)	34
第28図	11号井戸跡出土遺物実測図② (1/3)	35
第29図	11号井戸跡出土遺物実測図③ (1/3、188は1/4)	36
第30図	11号井戸跡出土遺物実測図④ (1/4)	37
第31図	14・15・16号土坑実測図 (1/30)	38
第32図	14・16号土坑出土遺物実測図 (1/3)	39
第33図	8・9・13・14号溝実測図 (1/60、13号溝は1/120)	40
第34図	8・9号溝出土遺物実測図 (1/3、213は1/4)	41
第35図	13号溝出土遺物実測図① (1/3、232～237は1/4)	43

第36図	13号溝出土遺物実測図② (1/3)	44
第37図	2区包含層出土遺物実測図 (1/3)	45
第38図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	46
第39図	1号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3)	47
第40図	13・14号井戸跡実測図 (1/60)	48
第41図	13・14号井戸跡・20・22・23・30号土坑出土遺物実測図 (1/3)	49
第42図	20・22・23・30号土坑実測図 (1/30)	50
第43図	15-1・15-2・16号溝実測図 (1/120、土層図は1/60)	52
第44図	15-1号溝出土遺物実測図① (1/3)	53
第45図	15-1号溝出土遺物実測図② (1/3)	54
第46図	15-1号溝出土遺物実測図③ (1/3)	55
第47図	15-1号溝出土遺物実測図④ (1/3、410は1/8)	56
第48図	15-2・16号溝出土遺物実測図 (1/3)	58
第49図	3区その他の出土遺物実測図 (1/3)	59
第50図	松田掛畠遺跡出土木製品の樹種顕微鏡写真 (a:横断面、b:接線断面、c:放射断面) ..	64
第51図	岩本下内遺跡周辺地形図(1/2,500)	65
第52図	岩本下内遺跡遺構配置図(1/200)	66
第53図	1号掘立柱建物跡実測図(1/80)	67
第54図	1号掘立柱建物跡出土土器・石器実測図(1/3・2/3)	68
第55図	2号掘立柱建物跡実測図(1/80)	69
第56図	2号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/3)	70
第57図	1号竪穴住居跡実測図(1/60)	70
第58図	2号竪穴住居跡実測図(1/60)	71
第59図	1・2号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	72
第60図	1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3)	73
第61図	1～4号土坑実測図(1/30)	74
第62図	4号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)	75

表目次

第1表	九州新幹線鹿児島ルート船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点一覧	1
第2表	松田掛畠遺跡出土木製品とその樹種	62

I はじめに

1 調査の経緯

九州新幹線(鹿児島ルート)は整備新幹線計画の一つであり、国民生活領域の拡大及び地域の振興を図るため、「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設され、主たる区間を列車が時速200km以上の高速度で走行できる幹線鉄道であり、博多から熊本、新八代を経由して鹿児島中央に至る総延長257kmの路線である。このうち新八代～鹿児島中央間については既に平成16年3月13日に部分開業しているが、全線開業すれば博多～鹿児島中央間が最速約1時間20分で、さらに平成19年10月17日のJR九州とJR西日本との合意で、九州新幹線と山陽新幹線の相互直通運転が決定したことによって鹿児島中央～新大阪間が約4時間で結ばれることとなり、新たな産業の立地や観光産業の振興等に寄与するものとして期待されている。

鹿児島ルートのうち船小屋～新八代間については、平成10年3月12日に工事実施計画が認可され、同年3月21日に建設工事が起工されている。

福岡県は平成10年4月8日に企画振興部交通対策課のもと、関係部局で「九州新幹線鹿児島ルート情報連絡会議」を設置し、九州新幹線鹿児島ルートに関する情報等についての連絡調整を行うこととした。

直接的な埋蔵文化財の対応については、平成10年6月18日付けで日本鉄道建設公団九州新幹線建設局(現独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局)から福岡県教育委員会教育長あてに「九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財の有無及び取扱いについて(船小屋～

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積(m ²)	調査面積(m ²)	調査年度	報告年度	備考
1	瀬高北	郡領ノ一遺跡	みやま市瀬高町坂田	4480	1107	H16	H17	調査終了
2	瀬高中	小川柳ノ内遺跡	みやま市瀬高町小川・下坂田	5600	5300	H16・17	H18・19	調査終了
3	瀬高南	藤ノ尾垣添遺跡	みやま市瀬高町山門	3360	5500	H15・16	H19～21	調査終了
4-A	瀬高南	山門北池遺跡	みやま市瀬高町山門	6340	1700	H15	H18	調査終了
4-B	瀬高南	山門前田遺跡	みやま市瀬高町山門・松田		1175	H14・15	H17	調査終了
4-C	瀬高南	松田掛畠遺跡	みやま市瀬高町松田		800	H17	H19	調査終了
5	高田田尻	海津横馬場遺跡	みやま市高田町海津	4200	2050	H13～15	H16・17	調査終了
6	高田田尻	飯田遺跡	みやま市高田町田尻	0				遺跡なし
7	高田T		みやま市高田町上楠田	3300				遺跡なし
8	楠田T	上楠田松浦遺跡	みやま市高田町上楠田	3520	560	H16	H17	高田町調査
9	楠田T	上楠田垣田遺跡	みやま市高田町上楠田	6000	870	H16	H17	高田町調査
10	楠田T		みやま市高田町上楠田	3300				遺跡なし
11	楠田T		大牟田市大字宮崎	5200				遺跡なし
12	楠田T	积迦堂古墳群	大牟田市大字岩本	4000				遺跡なし
13	楠田T	积迦堂古墳群	大牟田市大字岩本	8400				遺跡なし
14	楠田T	コノシロ塚遺跡	大牟田市大字岩本	2576				遺跡なし
15	大牟田S T	白銀川条里	大牟田市大字岩本	3360				遺跡なし
16	岩本	岩本下内遺跡	大牟田市大字岩本	1344	770	H18	H19	調査終了
17	岩本	岩本土定原遺跡・貝殻塚古墳	大牟田市大字岩本	2240				遺跡なし
18	岩本		大牟田市大字岩本	896				遺跡なし
19	岩本	出口古墳群	大牟田市大字宮部	5000				遺跡なし
20	岩本		大牟田市大字宮部	5400				遺跡なし
21	三池T		大牟田市大字教来木	896				遺跡なし

第1表 九州新幹線鹿児島ルート船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点一覧



第1図 九州新幹線船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点(1/100,000)

大牟田市間)」との照会に対して、平成10年7月13日付けで、計21か所、122,800m²の埋蔵文化財調査予定地(第1表)とともに、その他の予定地外についても、用地買収完了後に順次、現地踏査および試掘調査が必要であるとの回答を行った。これに基づき、福岡県教育庁総務部文化財保護課及び地元自治体教育委員会は、平成13年11月から始まった三池郡高田町(現みやま市)の海津横馬場遺跡以来、順次試掘・確認調査と本調査を行ってきた。

今回報告する松田掛畠遺跡は、平成14・15年度に福岡県教育委員会によって本調査が行われた山門前田遺跡の隣接地にあたり、平成17年7月21日に試掘調査を実施した結果、土坑状の遺構や土器片を確認したため調査を行うこととなった。平成17年8月25日よりバックホーによる表土剥ぎを開始し、9月5日より人力での掘削に入った。その後、10月19日にラジコンヘリによる1・2区の空中写真撮影を行った。3区は10月25日より表土剥ぎを、10月27日より人力での掘削を開始し、11月7日に全体写真を撮影した。11月15日には埋め戻しを終えて、11月18日に機材を撤収して、松田掛畠遺跡の調査を終了した。

大牟田市域については、九州新幹線の計画路線が稻荷山北西麓に広がる釧迎堂古墳群の西端部を掠めて通るため、この部分(12・13地点)からは未確認の古墳が複数検出されることを予想していた。しかしながら、平成18年7月10・31日に実施した試掘調査の結果では、古墳を含めた埋蔵文化財の存在を確認することができなかった。

岩本下内遺跡は、周知の埋蔵文化財ではなかったが、丘陵上に位置することから文化財の存在が予想された。平成18年5月11日に実施した試掘調査の結果、幅100m程の東西に延びる丘陵の北半部で土坑状の遺構と土師器片を検出し、文化財の存在が認められたため、市道から北側の路線部分と工事用道路によって掘削される部分の合計710m²について、本調査を実施することとした。調査は、用地内の住宅の撤去を待って、平成18年7月13日からバックホーによる表土剥ぎ作業を開始し、8月2日からは人力での掘削作業を行いながら順次記録を作成していく。現地での作業がほぼ終了した10月27日にラジコンヘリによる全体写真撮影、10月31日に機材を撤収して、岩本下内遺跡の調査を終了した。

2 調査の組織

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 九州新幹線建設局

	平成17年度	平成18年度	平成19年度
局長	北川 隆	元木 洋	元木 洋
次長	関根 茂	関根 茂	関根 茂
用地第一課長	田中 等	高橋秀幸	高橋秀幸
用地第一課補佐	木佐一正和		
用地第一課担当係長	入江万久	入江万久	入江万久
		房野和清	房野和清
工事第三課長	北原太一	北原太一	北原太一
工事第三課補佐	上野 登	弓削伸二	三輪龍四郎
工事第三課担当係長	馬渕善男	林 孝治	林 孝治

大牟田鉄道建設所長	長谷川正明	長谷川正明	長谷川正明
担当副所長(瀬高南工区)	福田 聰	福田 聰	江口義次
		石津範彦	
担当副所長(岩本工区)	宮越雄幸	江藤正則	江藤正則
	江藤正則		
工事第一課長	三浦正宣	佐々木幸一	佐々木幸一
工事第一課長補佐	松原鉄雄	松原鉄雄	三好省三
		三好省三	
工事第一課担当係長	後藤敏之	後藤敏之	長野利幸

福岡県教育庁総務部文化財保護課

	平成17年度	平成18年度	平成19年度
総括			
教育長	森山良一	森山良一	森山良一
教育次長	清水圭輔	清水圭輔	植崎洋二郎
総務部長	中原一憲	大島和寛	大島和寛
文化財保護課長	久芳昭文	磯村幸男 (本副理事)	磯村幸男 (本副理事)
副課長	川述昭人	佐々木隆彦	佐々木隆彦
課長技術補佐	木下 修 (本参事)	小池史哲 (本参事)	小池史哲 (本参事)
課長補佐	安川正郷 (本参事)	安川正郷 (本参事)	中薗 宏 (本参事)
庶務			
管理係長	稻尾 茂 (本参事補佐)	井手優二	井手優二
管理係	石橋伸二 末竹 元 渕上大輔	渕上大輔 柏村正央 小宮辰之	柏村正央 小宮辰之 野田 雅
調査・報告			
調査第二係長	飛野博文 (本参事補佐)	飛野博文 (本参事補佐)	飛野博文 (本参事補佐)
参事補佐		濱田信也	濱田信也
調査第二係	一瀬 智	小川泰樹	小川泰樹 一瀬 智

II. 位置と環境

今回報告する松田掛畠遺跡と岩本下内遺跡のうち、松田掛畠遺跡の所在する みやま市(旧瀬高町・高田町・山川町)周辺については、これまで繰り返し述べてきているので(九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 第1～4・6・7集)、ここでは岩本下内遺跡の所在する大牟田市周辺について述べたい。

大牟田市は福岡県の南端に位置し、三井三池炭鉱の石炭鉱工業で全国的に知られていたが、平成9(1997)年の炭鉱閉山から既に10年以上が経過している。大牟田市は、旧産炭地としては例外的に閉山後の人口の減少が緩やかであることが特長で、今後も魅力ある新たな街づくりが問われている。明治時代以来の石炭産業遺産を、日本の近代化を支えた「近代化遺産」として、世界遺産への登録に向けての活動など、地域の核として位置づけようとする取り組みは、最近注目されているところである。また大牟田市は、北はみやま市、東は熊本県玉名郡南関町、南は熊本県荒尾市と接し、ことに荒尾市とは県境を超えて一連の市街地が構成されており、経済的にも文化的にも結びつきが強い。面積81.55 km²、人口13万人。

ここは福岡・熊本両県にまたがる筑肥山地の西麓にあたり、市の東部には三池山(387m)、大間山(225m)、上徳山(258m)など、低山地が南北に連なっている。また、九州最大の平野である筑紫平野の南東端部とは甘木山(123m)で画し、大牟田市西部には白銀川・諏訪川等によつて比較的小さな沖積地が形成されている。市の西端は干満差の激しい有明海に面するが、現在の海岸は近世以来の干拓や埋め立てによって造られたもので、本来の海岸線は見られない。

歴史的には、旧石器時代の遺跡は現在のところ市域では確認されていない。縄文時代では、甘木山北西斜面上の荒田比貝塚(永井ほか1970)、毛無貝塚(平島1983)が名高い。

弥生時代・古墳時代の集落跡は吉野台地周辺に集中するよう、弥生中期の甕棺墓・土壙墓からなる羽山台遺跡(三島ほか1968、石田ほか1975、平島ほか1982、平島1991)を代表とする。古墳時代になると上内・高頭遺跡にも集落がつくられている(山田1991)。古墳は甘木山をはじめ周辺の丘陵上に立地する。2基の組合せ式箱形石棺が出土した潜塚古墳(国指定史跡)は径約30mの円墳とされていたが、平成12年度の調査では本来前方後円墳であった可能性を指摘されている(渡辺ほか1975、坂井2002)。甘木山から西に突出する黒崎山最高所に占地する黒崎觀世音塚古墳も、平成6～10年度の調査で全長約100mの前方後円墳であることが新たに判明した(坂井ほか1999)。また、この黒崎山から石神山古墳(みやま市上楠田、国指定史跡、猿渡2006)にかけて、石櫃山古墳(秀嶋1983)、倉永茶臼塚古墳(中間ほか1981)など合計10基の舟形石棺が発見されており、舟形石棺密集地といえる。

律令時代になると、三毛郡に米生、十市、砥上、日奉の4郷があったとされる。この時代の調査はまだ充分とは言えないが、須恵器窯跡が片平窯跡(坂井ほか2004)、勝立ヒバリヶ丘窯跡など、高取山南麓から荒尾市にかけて分布する。近辺では墓地と考えられる風蓮遺跡(平島1980)、掘立柱建物跡11棟を検出した上内・上寺嶋遺跡(山田ほか1993)などがあり、岩本丘陵上からは経塚が発見されている(坂井ほか1994)。

引用・参考文献

- 永井昌文ほか 1970 『荒田比貝塚』 大牟田市文化財調査報告書第2集 大牟田市教育委員会
 平島勇夫 1983 『毛無貝塚』 大牟田市文化財調査報告書第17集 大牟田市教育委員会
 三島格・高島忠平・佐藤伸二・永井昌文 1968 「羽山台遺跡調査概報」『九州考古学』35
 石田広美ほか 1975 『羽山台遺跡』 大牟田市文化財調査報告書第6集 大牟田市教育委員会
 平島勇夫・秀嶋龍男 1982 『羽山台遺跡IV』 大牟田市文化財調査報告書第16集 大牟田市教育委員会
 平島勇夫 1991 『羽山台遺跡IV』 大牟田市文化財調査報告書第39集 大牟田市教育委員会
 山田元樹 1991 『上内・高頭遺跡』 大牟田市文化財調査報告書第38集 大牟田市教育委員会
 渡辺正気ほか 1975 『潜塚古墳』 大牟田市文化財調査報告書第5集 大牟田市教育委員会
 坂井義哉 2002 『潜塚古墳II』 大牟田市文化財調査報告書第56集 大牟田市教育委員会
 坂井義哉ほか 1999 『黒崎觀世音塚古墳』 大牟田市文化財調査報告書第52集 大牟田市教育委員会
 猿渡真弓 2006 『石神山古墳』 高田町文化財調査報告書第9集 高田町教育委員会
 秀嶋龍男 1983 『石櫃山古墳』 大牟田市文化財調査報告書第19集 大牟田市教育委員会
 中間研志・平島勇夫ほか 1981 『倉永茶臼塚』 大牟田市文化財調査報告書第15集 大牟田市教育委員会
 坂井義哉ほか 2004 『片平窯跡』 大牟田市文化財調査報告書第58集 大牟田市教育委員会
 平島勇夫 1980 『風蓮遺跡』 大牟田市文化財調査報告書第12集 大牟田市教育委員会
 山田元樹・坂井義哉 1993 『上内地区遺跡群II』 大牟田市文化財調査報告書第43集 大牟田市教育委員会
 坂井義哉ほか 1994 『稻荷山の文化財』 大牟田市教育委員会



- | | | | | |
|-------------|-----------|-----------|---------------|-------------|
| 1. 岩本下内遺跡 | 6. 茂登山遺跡 | 11. 上ノ畠遺跡 | 16. 大久保古墳群 | 21. 田隈・石佛遺跡 |
| 2. 鍛冶屋遺跡 | 7. 釈迦堂古墳群 | 12. 古城山古墳 | 17. 宮部遺跡 | 22. 田隈・柿添遺跡 |
| 3. 上内・高頭遺跡 | 8. 宮ノ西遺跡 | 13. 吉野遺跡 | 18. 久福木・立山遺跡 | 23. 羽山台遺跡 |
| 4. 岩本経塚 | 9. 風蓮遺跡 | 14. 吉野十三塚 | 19. 廃ノ浦古墳群 | |
| 5. 上内・上寺嶋遺跡 | 10. 七ツ家遺跡 | 15. 平塚古墳群 | 20. 銀水小学校校庭遺跡 | |

III 発掘調査の記録

1 松田掛畠遺跡

1) 遺跡の概要と基本層序

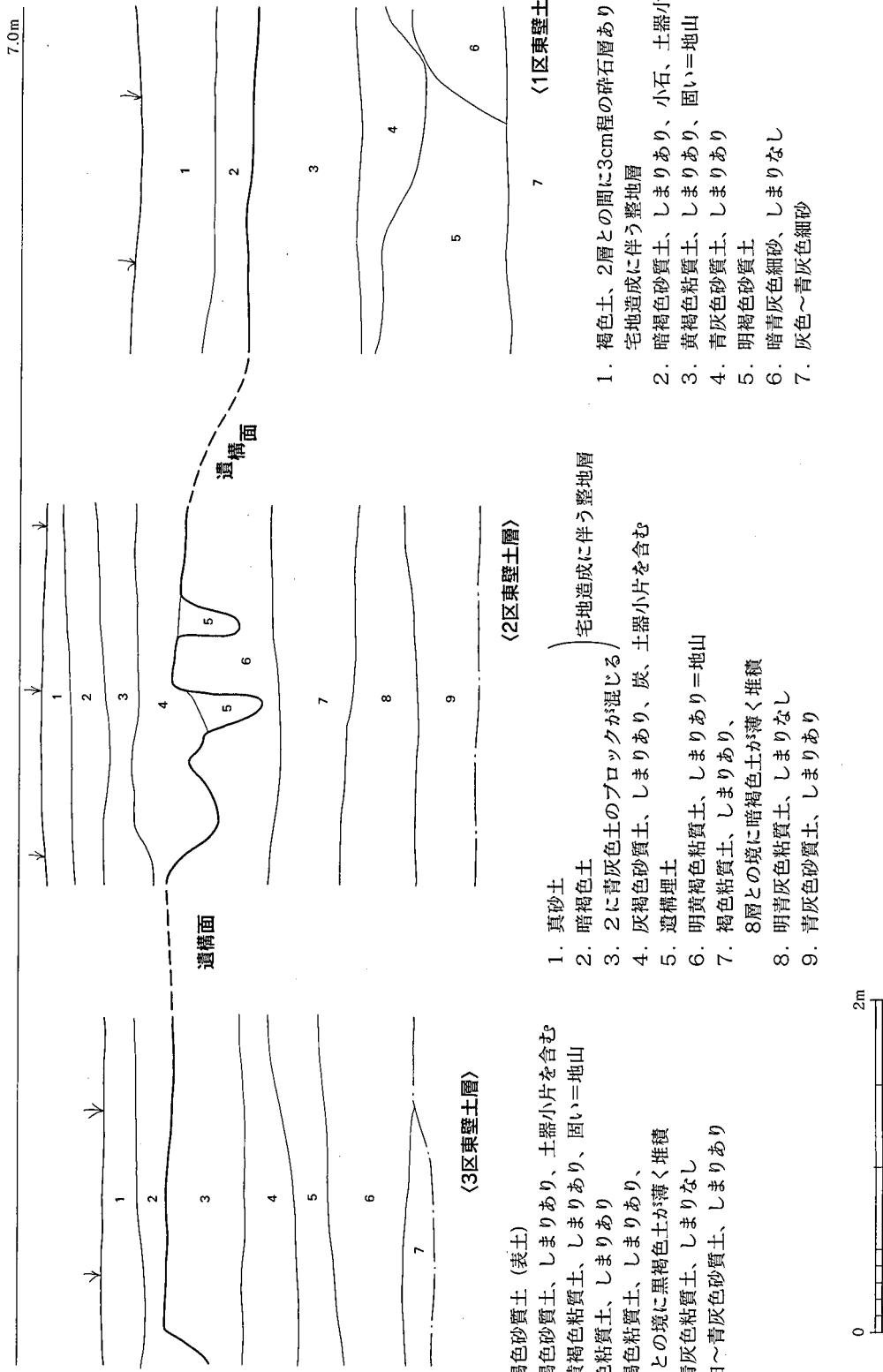
遺跡の概要 松田掛畠遺跡は矢部川・飯江川の本・支流により形成された標高約6mの沖積地上に位置する。所在地はみやま市瀬高町大字松田で、小字名を掛畠といい、これを遺跡名としている。今回大字・小字から遺跡名を付けたが、大道端遺跡報告書では松延二ノ丸遺跡（関晴彦編1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIV』福岡県教育委員会）、『福岡県遺跡等分布地図』では松延宮東遺跡（福岡県教育委員会1977）、藤の尾垣添遺跡報告書では山門遺跡（群）松延遺跡（田中康信編1988『藤の尾垣添遺跡』瀬高町文化財調査報告書第5集 瀬高町教育委員会）、また山門前田遺跡（大庭孝夫編2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会）とされ、複数の遺跡名が存在する。今後周辺の調査成果やみやま市内遺跡等分布地図の作成により、遺跡名の再考が行われればそれに従いたい。

本遺跡の周辺には、北に溝と市道を挟んで山門前田遺跡が隣接し、北西約250mに戦国～近世初期の城郭とされる松延城跡が所在する。松延城跡の東に隣接する山門前田遺跡では中世後期の遺構群が確認され、周辺の字名や圃場整備前の地形から縄張りが復元されて、松延城跡の二ノ丸に位置することが推定されている（前掲大庭2006）。さらに復元図では本遺跡は三ノ丸に位置する。また小字掛畠は、地元では「キタンヤシキ（北屋敷）」とも呼ばれている。住民の話では本調査地は宅地を造成する以前は立花藩時代に松延村を含む竹井組の大庄屋を務めた権島家の屋敷があったという。

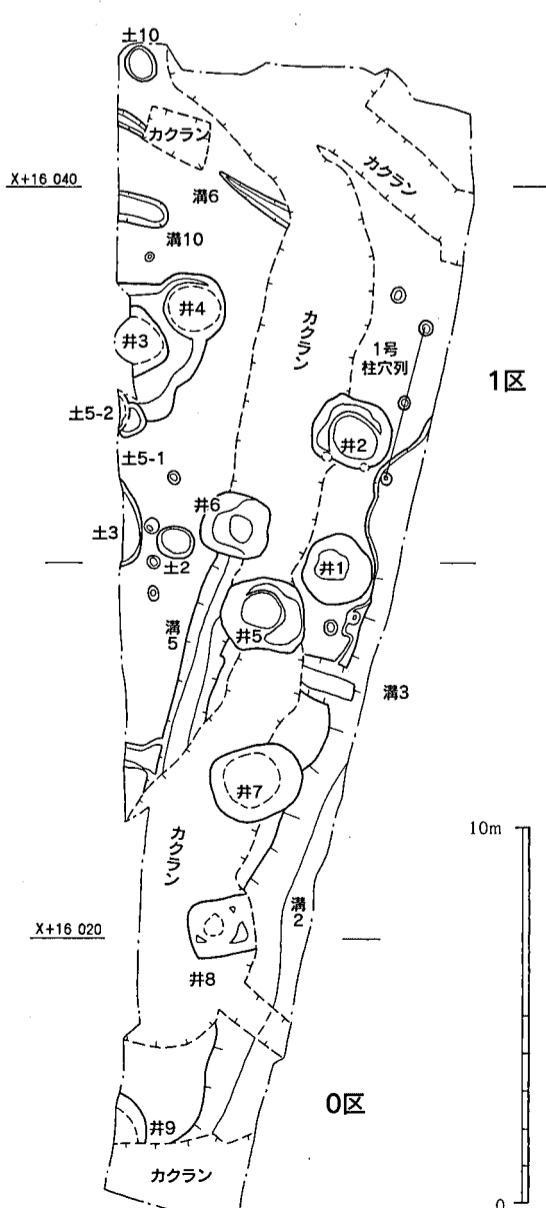
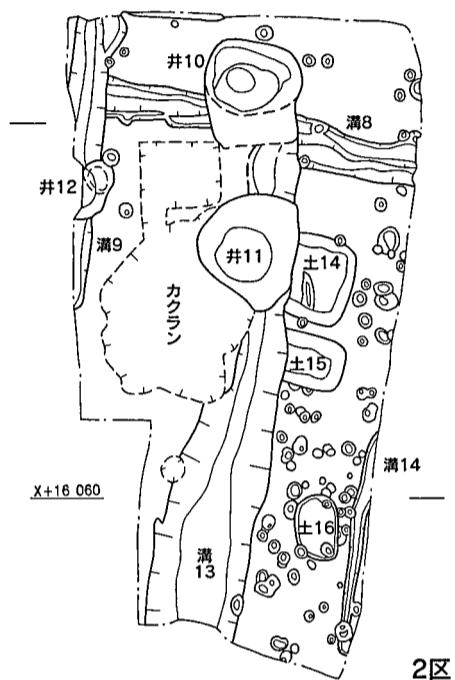
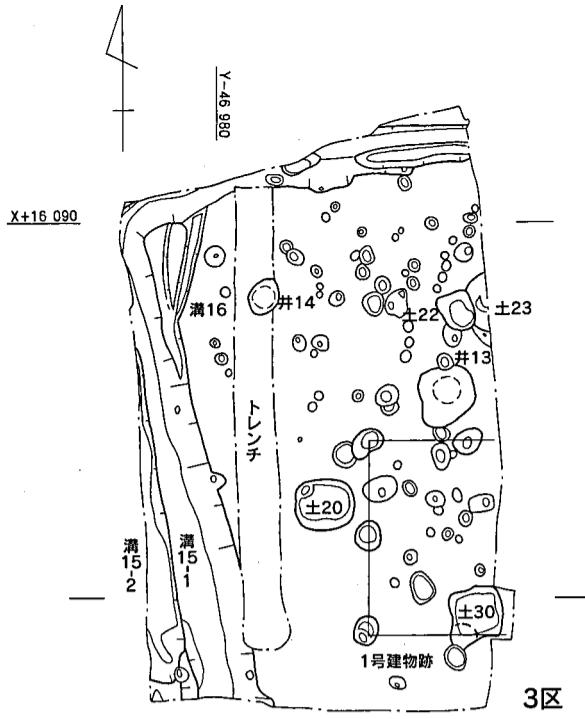
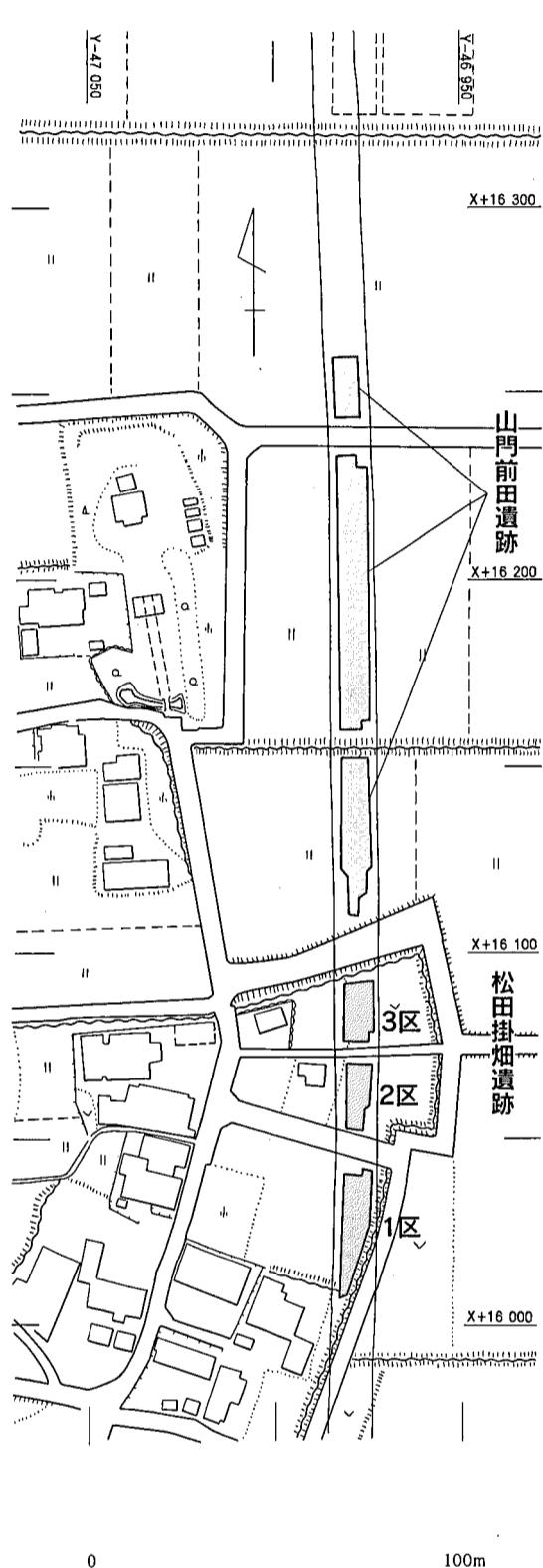
調査では遺跡の南北幅が約80mと判明したが、遺跡の東西幅は新幹線の線路幅が11.2mであることから南北に長いトレンチを入れたような調査となり、遺跡の広がりや状況を把握できたとは言い難い。調査対象地は松田東集落の北東縁部にあたり、東西約11m・南北約80mと縦長の形状である。調査地を横切る市道で3つの区画に分かれており、便宜上その区画をそのまま用いて南から1～3区として調査を行った。遺構は調査区全域に高い密度で分布し、掘立柱建物跡1棟、柱穴列1基、井戸跡14基、土坑11基、溝11条、その他ピット多数が確認された。出土遺物から概ね中世後期～近世に属する。遺物は土師質・瓦質土器や陶磁器のほか石製品・木製品などが出土した。

基本層序 本遺跡は調査前には1区北側・2区は宅地、1区南側と3区は畠地として利用されていた。標高は1区南側で6.1～6.2m、1区北側で6.3m、2区で6.8～6.9m、3区で6.5m。なお本遺跡西の松田天満神社に続く道路は標高6.3m、東に広がる水田の田面標高は6.0m、北側の山門前田遺跡0区の田面標高は5.9mで、遺跡周辺は東あるいは北に向けて下がる地形となる。

南の1区から基本層序を確認すると、表土は現代の宅地整備に伴う整地層で、厚さは40cm程度、その下に暗褐色砂質土の包含層（2層）が20～30cmあり、黄褐色粘質土（3層）からなる遺構面になる。遺構面の検出レベルは5.6～5.7mで、南に緩やかに下がる。3層は60～70



第3図 1～3区土層実測図



第4図 松田掛畠遺跡調査区配置図 (1/2000) 遺構配置図 (1/200)

cmの厚さで水平に堆積し、さらに下層は4～6層が複雑に堆積して灰白色～青灰色の細砂層に至る。

2区は1～3層が現代の整地層で厚さ55cm。その下に厚さ20～30cmの包含層（4層）があり、明黄褐色土の遺構面に至る。遺構面の標高は6.0～6.1m。5層は厚さ50～60cmで、さらに下層は6～8層がやや厚く水平に堆積する。

3区は表土が耕作土からなり（1層）厚さは20～30cm、その下に包含層（2層）が10～20cmあり、明黄褐色砂質土（3層）の遺構面になる。遺構面の標高は6.1m前後。3層は40cm程の厚さで、さらに下層は4～7層がやや北に下がりながら堆積している。

調査の経過 松田掛畠遺跡は平成17年8月25日に発掘調査に着手した。8月26日には1区北側で重機による表土剥ぎを開始、8月31日には引き続き2区の表土剥ぎに入り、9月2日に2区の表土剥ぎを終えた。週末を挟んで9月5日には人力による掘削を開始する予定だったが、台風が接近していたために中止した。9月6日は台風のため作業中止。9月7日は調査区に溜まった水抜きを行い、ようやく9月8日に1区北側から人力による掘削を開始し、9月21日には2区の人力による掘削作業に入った。9月中は残暑が厳しく、暑さや水分補給に留意しながらの作業が続いた。また1区北側で検出した多くの井戸跡で湧水と深さのため掘削が難航し、1区の調査に時間を要した。10月19日に1区北側・2区の空中写真撮影を行った。

10月25日から重機による1区北側・2区の埋め戻しと3区の表土剥ぎを開始し、10月27日に人力による掘削に入った。10月31日には重機で1区南側の表土剥ぎを行い、11月2日に人力による掘削を開始した。11月7日に3区、11月10日に1区南側の全体写真撮影を行った。その後11月15日に埋め戻しを終え、11月18日に現場機材の撤収を含め発掘調査を完全に終了することができた。

2) 1区の検出遺構と出土遺物

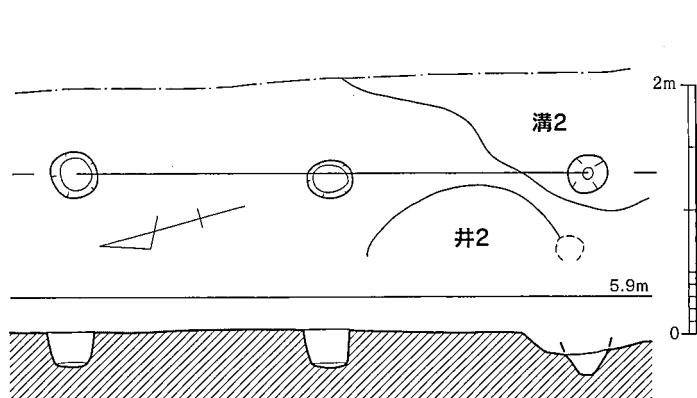
(1) 1区の概要

1区は、市道を挟んで2区の南に位置する。東西最大9.5m、南北31mの調査区で南に向けて次第に細くなる。工事の行程上、調査区の北2/3程度を先に調査する必要があり、北側の調査・埋め戻し後に南側の調査を行った。1区の中央を近現代の池・溝が遺構を切って縦断するが、井戸跡9基、土坑4基、溝4条の遺構が検出された。各井戸跡からの湧水が激しく調査は難航したが、木製品の残りは良く、3基の井戸跡で結桶組の井戸側が確認され、別の2基では釣瓶と思われる木製品が出土している。また南端部に9号井戸跡と2号溝を切って東西に走る搅乱溝を検出した。

(2) 柱穴列

1号柱穴列（第5図）

1区北東部で検出した。3つのピットが真北から東にやや振れるラインで直線上に並ぶ。ピットはいずれも深さ約30cm。最も南のピットは上部が2号溝で切られるが同じ深さに復元できる。2つの柱間はいずれも心々距離で2mである。南北の延長線上に、これに続くようなピットは



第5図 1号柱穴列実測図 (1/60)

確認できなかったが、東側の調査区外、または西側の搅乱で失われた部分に、対となる柱穴が存在した可能性がある。遺物は出土していない。

(3) 井戸跡

1号井戸跡 (第6図、図版3)

1区中央部の東側で検出した。上部の西半分が搅乱と試掘トレンチで欠損する。素掘りの井戸。平面は南北約1.8m×東西約1.8mの円形プラ

ン。深さ1.5～1.8mでテラスを作り、さらに中央が一段下がって検出面から2.2mで底の青灰色砂層に達する。下層(10層)から柄の付いたバケツ状の桶が出土した。釣瓶に使用された物か。湧水が激しく掘削作業は難航した。出土遺物から16世紀末～17世紀前半に属する。

出土遺物 (第7・8図、図版16)

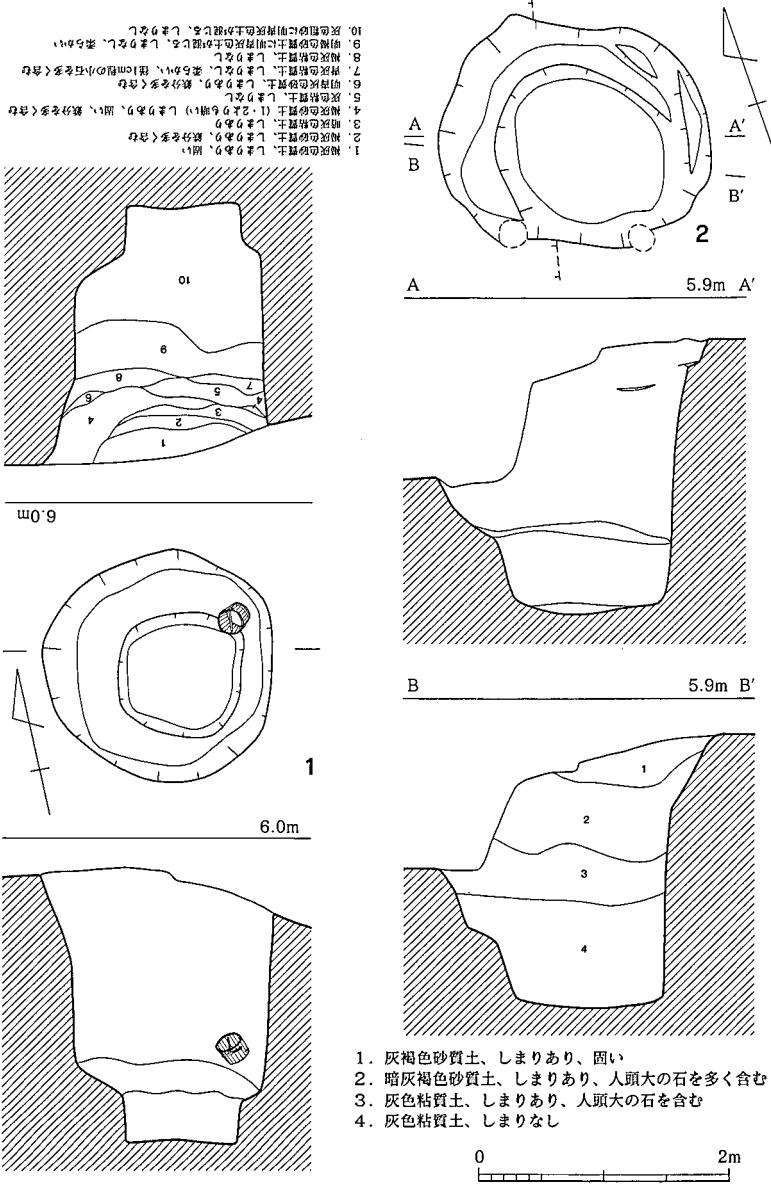
1は土師質土器の小皿。糸切り痕。2～4は瓦質土器の鍋。2・3は外反する口縁部の破片で外面にススが付く。内面ヨコハケ。2は外面にもハケメが残る。4は復元口径45cm。口縁部は外反し、全体形は皿形となる。内面ヨコハケ、外面はハケメのち部分的にナデで整える。5は挽き臼の下臼。残存1/8程の破片である。厚さ9.8cm、重さ2.1kg。摺目の幅は4mm程、その間隔は1.2～1.4cmで、分画数は不明である。凝灰岩製。8は埋土下層(10層)から出土した桶である。検出した時点ではバケツ状の原形を止めていたが、すでに竹製のタガは腐食が進み、取り上げ時には部材がバラバラになってしまった。柄も原形を留めないほど痛んでおり、図化できなかった。一方で側板と底板は状態が良く、特に側板は全22枚取り上げることができた。幅は最大4.7～最小1.8cmと様々である。いずれも内外・左右側面が丁寧に平滑に整えられ、外面の上下2ヶ所にタガの痕跡が残る。このうち柄が取り付く2枚を含む8枚を底板とともに図化して報告する。側板は大きさや木取りなど多様であったため、特徴的かつできるだけ多くの情報を持つものを選んでいる。8-1は長さ18cm・幅3.7～4.6cm・厚さ0.8cm。右下部に底板を固定するための木釘の孔が残る。柾目材。8-2は長さ17.9cm・幅4.1～4.7cm・厚さ0.9cm。上部のやや右寄りに柄を固定するための方形の孔が空く。孔の大きさは縦1.4cm×横0.9cm。追い柾。8-3は長さ17.8cm・幅3.7～4.1cm・厚さ0.9cm。8-2の対となる板で上部のやや左よりに柄を固定する方形の孔を持つ。孔は縦1.6cm×横1.0cm。追い柾。8-4は長さ17.8cm・幅4.2～4.5cm・厚さ0.7cm。下端部が風化する。8-1のように左下部に底板を固定するための木釘の孔が残る。柾目材。8-5は長さ17.5cm・幅3.0～3.4cm・厚さ0.9cm。板目材。8-6は長さ17.5cm・幅2.9～3.9cm・厚さ0.9cm。板目材。8-7は長さ17.3cm・幅1.9～2.1cm・厚さ0.9cm。下端部が風化する。左側面の下部に人為的なものと思われる横方向の凹みがある。木釘の孔か。柾目材。8-8は長さ17.7cm・幅1.5～1.8cm・厚さ0.8cm。板目材。8-9は底板。径19.3～19.6cm、厚さ2.0cm。裏面は風化が進み凹凸が激しい。2枚の半月形の板を接合しており、接合面に2ヶ所の木釘の孔がある。木目の観察から2枚は元来別々の材である。どちらも板目材。

2号井戸跡 (第6図、図版4)

調査区中央部の東側、1号柱穴列の西、1号井戸跡の北4mで検出した。素掘りの井戸。上部の西半分が搅乱と試掘トレンチで欠損する。また南側の上端ライン上に住宅建設に伴う地盤安定用の基礎杭が2本、地中深くまで打ち込まれていた。平面プランは南北約1.8m×東西2.2mの楕円形。深さ1.5~1.7mで北側半分にテラスが付き、さらに一段下がって検出面から約2.2mで底の青灰色砂層に達する。埋土には人頭大の石が多く含まれていた。湧水が激しく掘削作業は難航した。出土遺物から16世紀末~17世紀前半に属する。

出土遺物 (第7図)

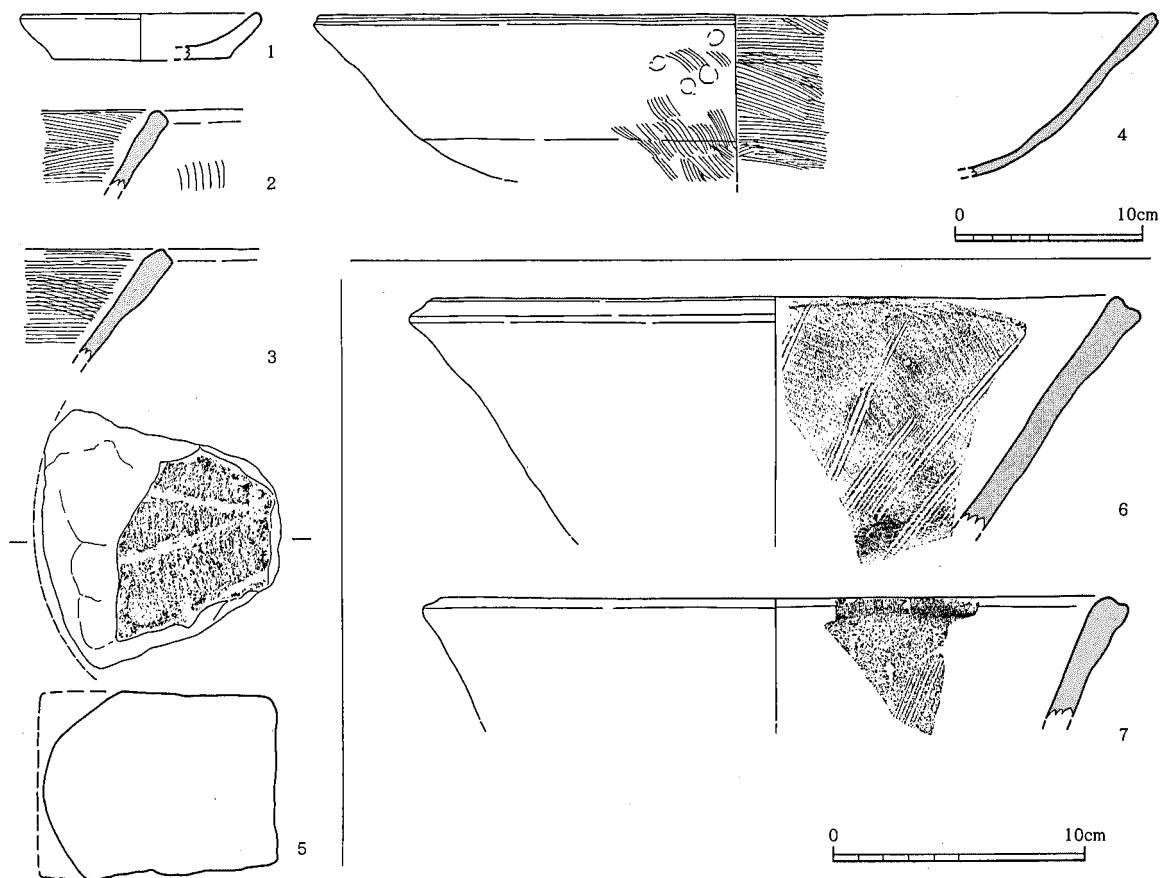
6・7は瓦質土器の摺鉢。6は体部が直線的に伸び、口縁上面が外を向く。端部は少し凹む。7は口縁部の破片で、6と同じく上面が外を向き、端部が凹む。



第6図 1・2号井戸跡実測図 (1/60)

3号井戸跡 (第9図、図版4)

調査区中央部やや北の西側調査区境で検出した。4号井戸跡を切り、5-1・5-2号土坑に切られる。当初4号井戸跡と一体の遺構として掘削を進めたため、西側の上端ラインを大きく欠損してしまった。平面プランは西側半分が調査区外となるため不明だが、残る部分でも南北3.8m、東西2mを測り、大きな掘り方となる。検出面から深さ約1.7mで広いテラスを作り、さらにテラスの中央を深く掘り下げている。そこに結桶組の井戸側が据えられていた。井戸側は最大で幅13cm、長さ144cm、厚さ2~3cmの側板からなり、径は約65~75cm、ほぼ垂直に3段重なって検出した。最上段の先端は検出面近くまで残存する。3段目は検出面から深さ2.6mまで確認できたが、湧水が激しいことや安全上の理由からさらに下部は掘削しておらず、井



第7図 1・2号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、4・5は1/4)

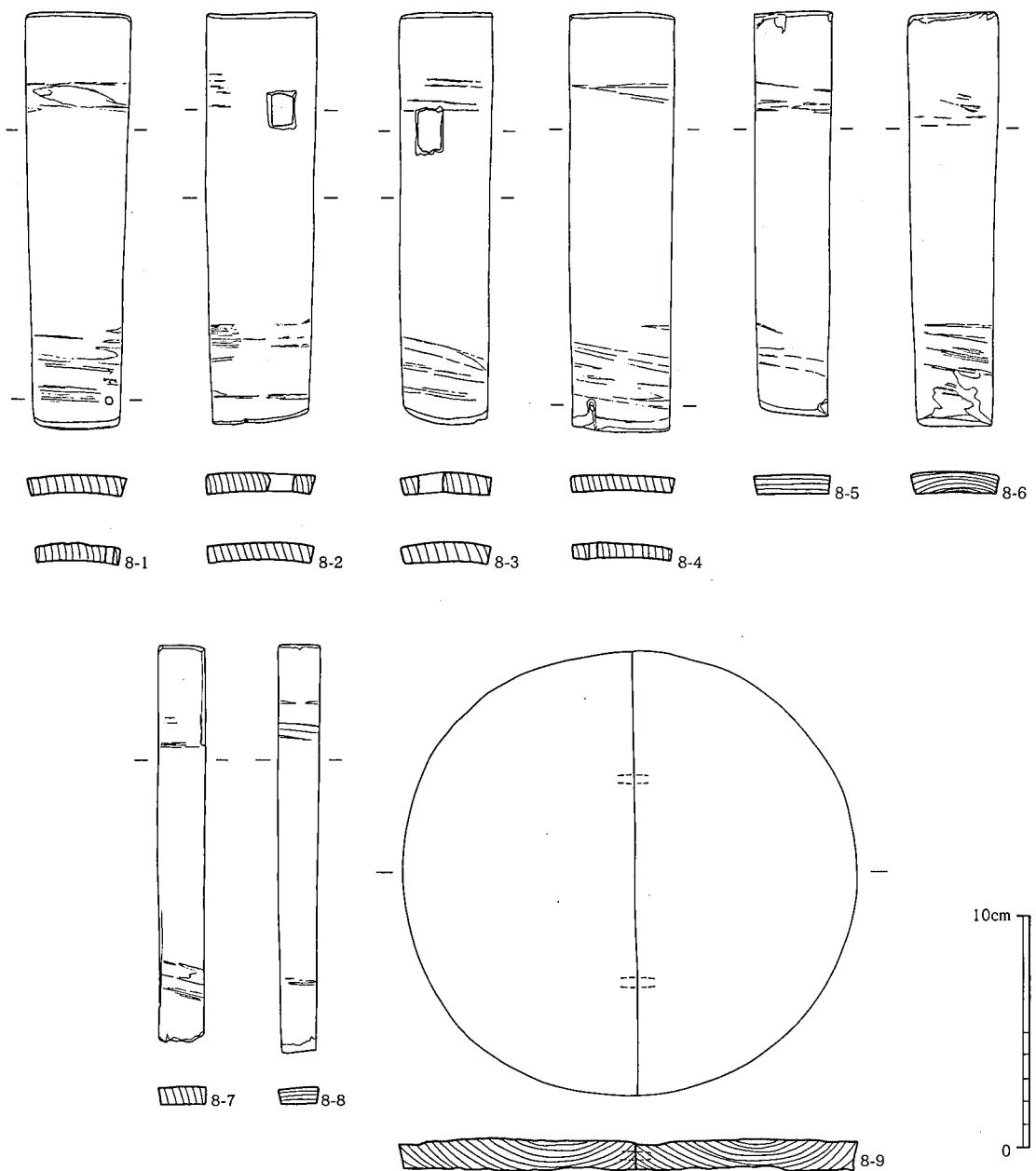
戸跡の底面も確認していない。出土遺物から近世後期の18世紀後半～19世紀に属する。

出土遺物 (第10図、図版16)

9～12は掘り方から出土した。9は肥前系磁器の青磁碗口縁部。10は唐津系陶器の摺鉢。口縁部は肥厚して外反する。内外面全面に鉄釉が施される。11は弥生土器の甕底部。平底で厚くならない。混入品。12は板状の不明土製品。

13～22は井戸側内から出土した。13・14は肥前系磁器の皿。いずれも蛇の目凹型高台を持つ。18世紀後半～19世紀。15は陶器の摺鉢。10同様口縁部が肥厚して外反し、全面に鉄釉が施される。16は弥生時代終末～古墳時代初頭の大甕口縁部。口縁部は外反して伸び、端部は肥厚して外向きに面を作る。端部に刺突文が廻る。内面ヨコハケ、外面タテハケ調整。混入品。17は木製品で漆器椀。復元口径12.4cm、器高6.85cm。内面赤漆、外面黒漆で外面の2ヶ所に赤漆で「丸に杏葉紋」が描かれる。2ヶ所は対になる箇所からややすれており、紋の描かれ方も粗雑である。18～22は瓦。18・19は丸瓦。18は残存長20cm、残存幅11.6cm。凸面は縦方向のヘラナデ、凹面は粗い布目痕を残す。19は広端部の破片である。凸面は縦方向にヘラナデされるが、わずかにタタキ痕を残す。凹面には布目痕。端部近くは横方向のヘラナデで整える。20は隅瓦・21は平瓦の破片。22は棟瓦の破片

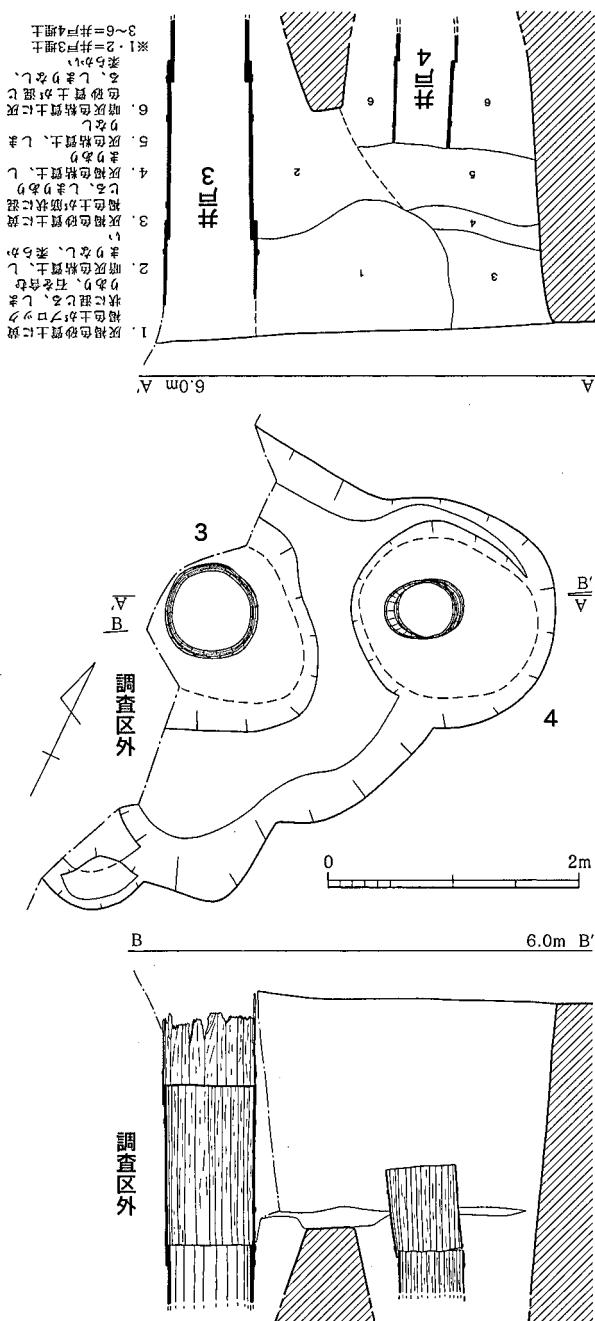
4号井戸跡 (第9図、図版5)



第8図 1号井戸跡出土木製品実測図 (1/3)

調査区中央部やや北の西側、3号井戸跡の東側で検出した。西側半分が3号井戸跡に切られて欠損する。平面形は南北約1.8m、東西は推定約1.7mの円形に復元できる。検出面から深さ約1.7mで北側にテラスが取り付き、さらに深く下がる。また、検出面から深さ約1.6mで結桶組の井戸側2段を検出した。3号井戸跡で出土した物よりも一回り小振りで、側板は最大で幅7cm、長さ70cm、厚さ約1cm、井戸側の径は45～50cmである。作りもやや粗雑である。井戸側は検出面から深さ2.5mまで確認できたが、湧水と安全上理由のからそれより下部は掘削しておらず、井戸跡の底面も確認していない。井戸側上半は失われており、井戸を廃棄する際に引き抜かれたと考えられる。出土遺物から16世紀末～17世紀前半に属する。

出土遺物（第11図）



第9図 3・4号井戸跡実測図 (1/60)

口縁部下に「×」字形のスタンプとその下に縦の櫛目文が廻る。埋土下層(16層)からの出土。31は外面の口縁部下に花弁状のスタンプが廻り部分的にボタン状に貼り付けられた粘土が配される。さらに突帯を挟んだ下に櫛目文が廻る。32・33は弥生土器。混入品である。32は甕底部。柱状の底部でやや上げ底となる。33は支脚。天井部に孔が空けられている。34は挽き臼の下臼。残存1/6程の破片である。厚さ7.8cm、重さ2.1kg。櫛目の幅は6mm程、その間隔は1.2~2.2cmで、分画数は不明である。凝灰岩製。35は埋土下層(16層)から出土した桶である。側板は全11枚取り上げた。幅は約4~5cmとほぼ一定である。いずれも内外・左右側面が平滑に整えられ、

いずれも井戸側内から出土した。23は土師質土器の坏底部。糸切り痕を残す。24は瓦質土器の摺鉢口縁部。25は挽き臼の上臼。残存1/4程の破片である。厚さ9.0cm、重さ0.8kg。摺目の幅は2mm程、その間隔は1.0~1.4cmで、分画数は不明である。凝灰岩製。

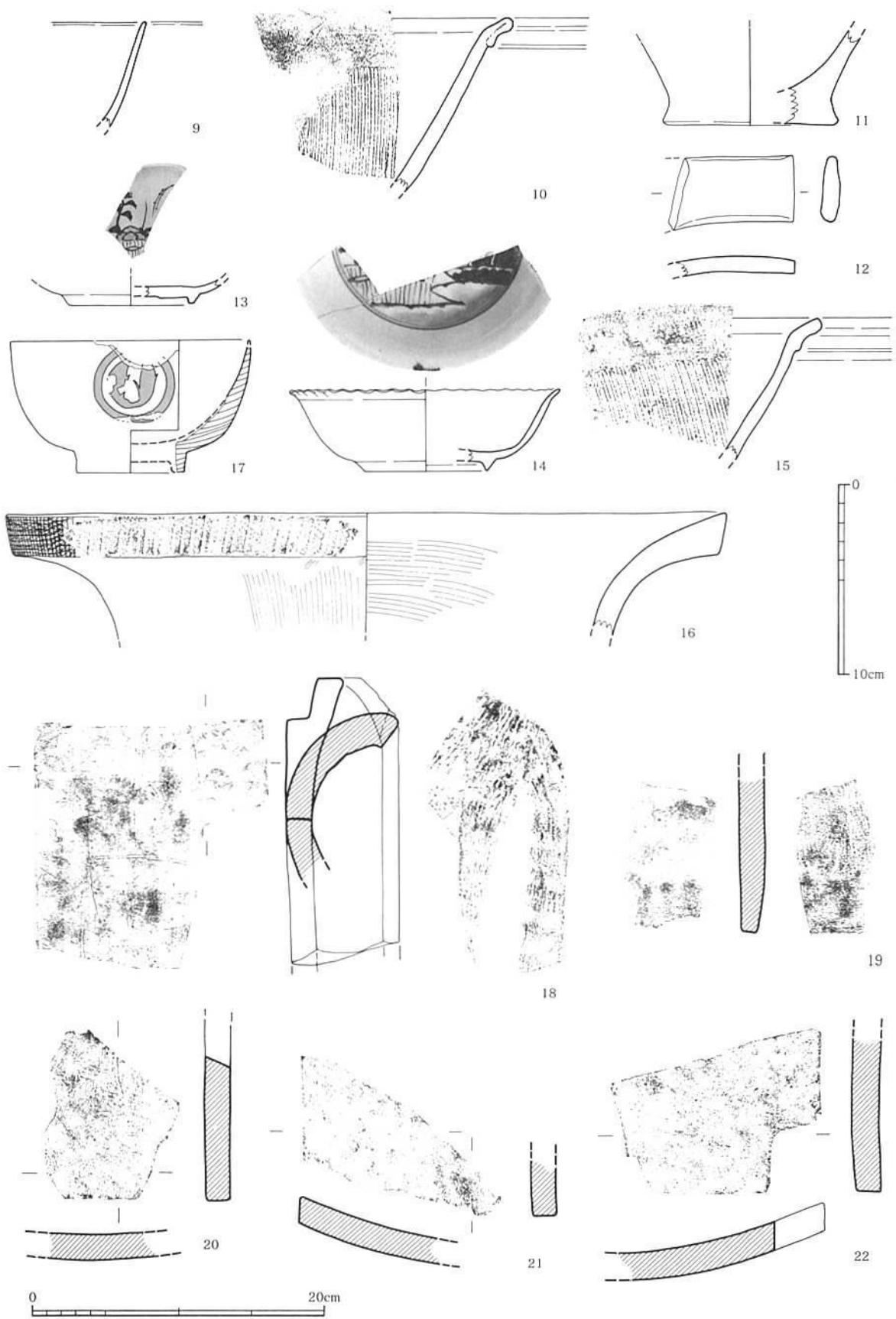
5号井戸跡 (第12図、図版5)

1区のほぼ中央、1号井戸跡の南西隣に検出した。5号溝を切る。素掘りの井戸。井戸跡の真上を南北方向に搅乱の溝が走り、上部の大半が失われる。南北長は推定で2.2m程、残存する東西は2.2mを測り、平面円形プランに復元できる。深さ1.3~1.6mで北~東側にテラスが付き、底部はさらに一段下がって検出面から約2.2mで青灰色砂層に達する。埋土下層(16層)から柄が付いたバケツ状の桶が潰れた状態で出土した。釣瓶に使用されたと考えられる。湧水が激しく掘削作業は難航した。出土遺物から17世紀前半に属する。

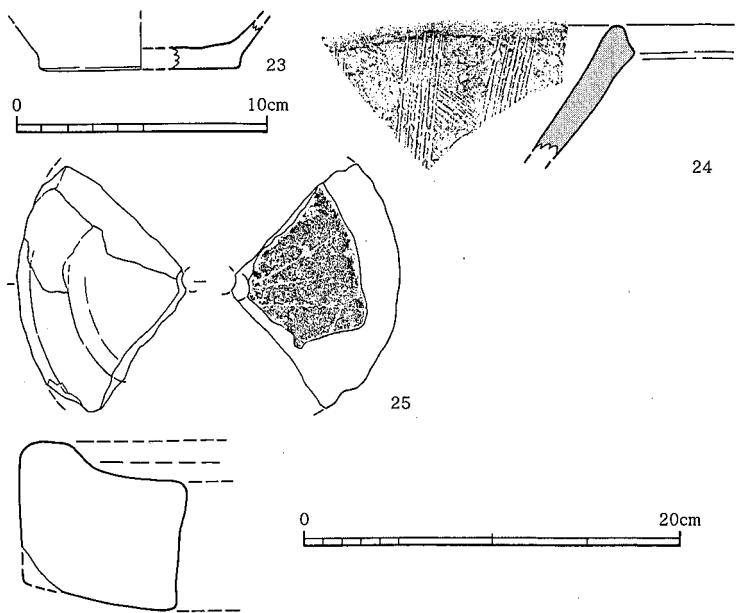
出土遺物 (第13・14図、図版16)

26は土師質土器の坏。糸切り痕を残す。27は青磁碗。厚い底部を持つ。全面施釉後に外底を輪状に削る。体部外面にヘラ書きの細線蓮弁文、見込みに印花文を施す。龍泉窯系。28は唐津系の陶器の皿。全体的に扁平な形状で、見込みと高台に砂目の跡が残る。埋土下層(16層)から出土した。29は唐津系陶器の蓋破片。6層から出土した。30・31は瓦質土器の火鉢口縁部。30は外面の

— 14 —



第10図 3号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、16～21は1/4)



第11図 4号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、25は1/4)

に貫通する木釘の孔が空けられる。追い柾。35-2は長さ22.6cm・幅4.7～5.2cm・厚さ0.9cm。上部の中央に柄を固定するための方形の孔が空けられるが、孔の上部が欠損する。孔の大きさは横1.5cm。表面の孔の左右に柄を固定した木釘の痕跡が残る。板目材。35-3は長さ17.1cm・幅4.6～5.2cm・厚さ0.7～0.9cm。下端部が風化する。柾目材。35-4は長さ17.3cm・幅4.5～4.7cm・厚さ0.6～0.8cm。下端部が風化する。板目材。35-5は長さ17.6cm・幅4.0～4.5cm・厚さ0.7～0.8cm。追い柾。35-6は長さ17.6cm・幅3.8～4.2cm・厚さ0.8cm。板目～追い柾。35-7は35-2の対になる側板。左上半部が破損する。長さ22.2cm・幅4.4～4.7cm・厚さ0.6～0.8cm。上部の中央に柄を固定するための方形の孔が空けられる。孔の大きさは縦1.5cm。横も推定で1.5cmに復元できる。表面の孔の左右に柄を固定した木釘の痕跡が残る。板目材。35-8は長さ17.8cm・幅3.7～4.2cm・厚さ0.8cm。板目～追い柾。35-9は長さ17.6cm・幅3.8～4.2cm・厚さ0.9cm。板目材。35-10は底板。1/3を欠損する。径は18.0cm、厚さ1.0cm。裏面は風化が進み凹凸が激しい。2枚の半月形の板を接合しており、接合面に2ヶ所の木釘の孔がある。木目の観察から2枚は元来別々の材である。どちらも追い柾材。

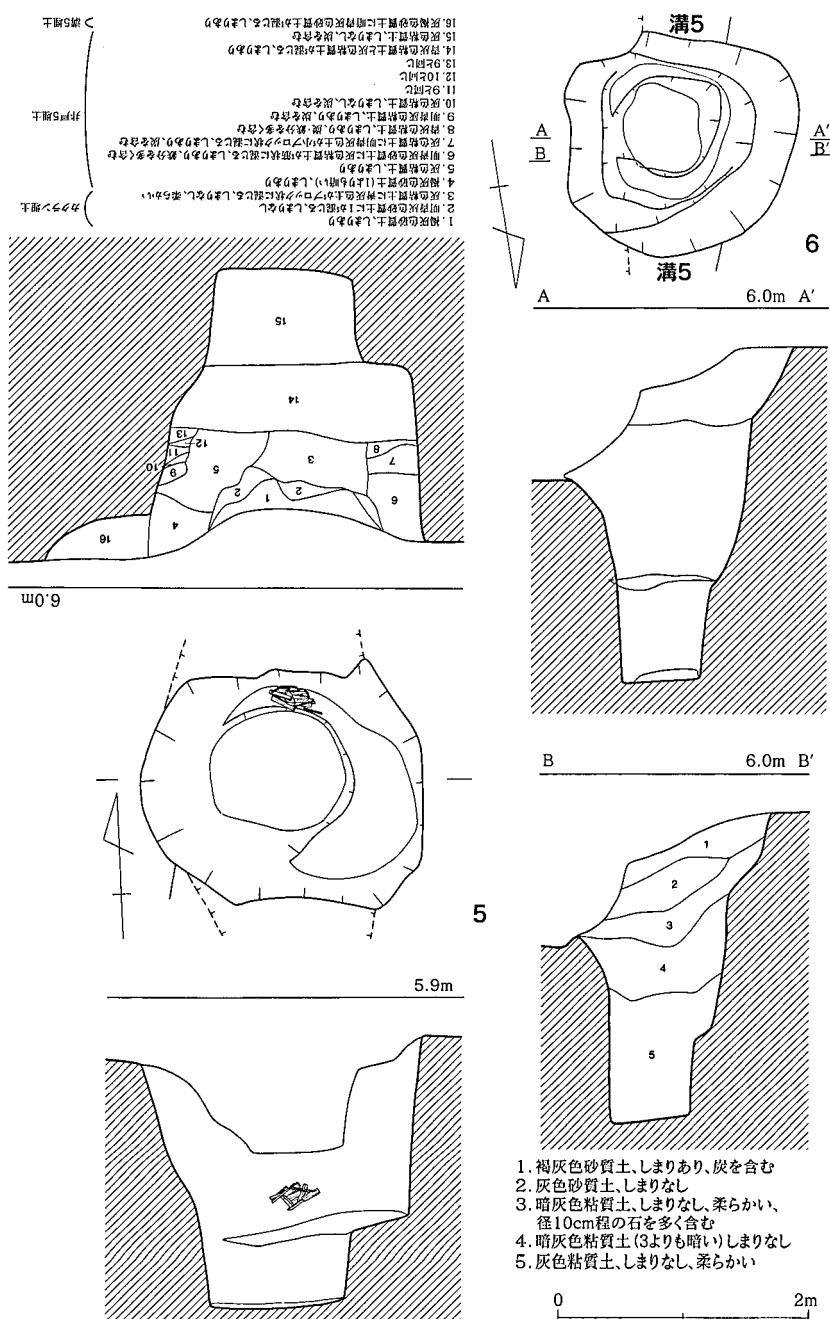
6号井戸跡（第12図、図版6）

1区のほぼ中央、5号井戸跡の北2mで検出した。5号溝を切る。素掘りの井戸。上部の東半分が搅乱の溝によって欠損する。平面は南北約1.8m×東西推定約2.0mの楕円形プラン。深さ1.85～1.95mでテラスを作り、さらに一段下がって検出面から2.6～2.7mで底の青灰色砂層に達する。湧水が激しく掘削作業は難航した。埋土下層（5層）から対になる2つの茶入（35・36）が出土した。出土遺物から16世紀末～17世紀前半に属する。

出土遺物（第15図、図版17）

36～38は埋土下層（5層）から出土した。36・37は陶器の肩衝茶入。36は口径3.4cm、器高8.6

外面の下部にタガの痕跡が残る。このうち柄が取り付く2枚を含む8枚を柄・底板とともに図化した。側板は大きさや木取りなど多様であったため、特徴的かつできるだけ多くの情報を持つものを選んでいる。35-1は柄。長さ23.6cm・幅1.3～1.7cm・高さ4.0cm。全体的に「へ」の字状を呈し、表面にケズリ痕を残す。中央部分は縄で磨り減ったためか細くなる。左右の端部は側板に空けられた方形の孔に固定されるように断面方形に作られる。また柄の固定のため端部を前後



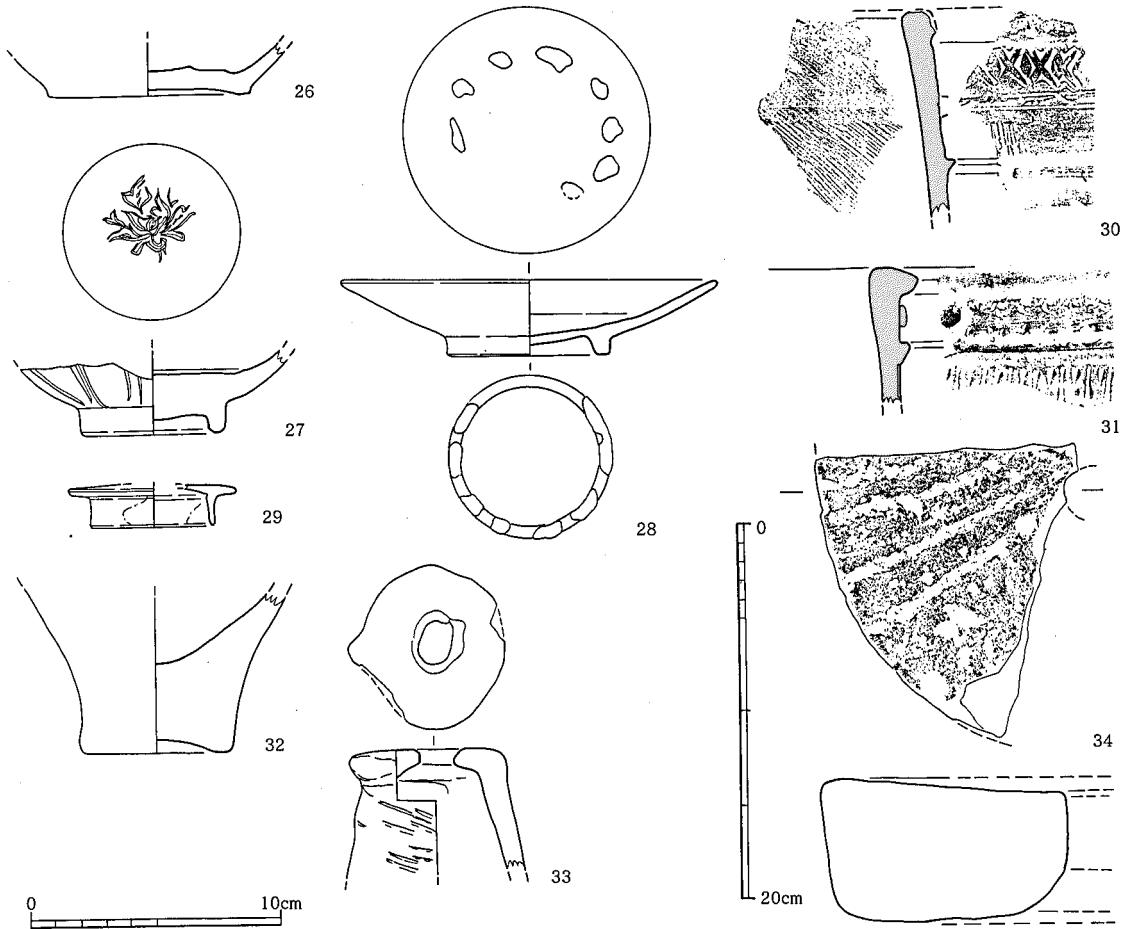
第12図 5・6号井戸跡実測図 (1/60)

別々の材である。どちらも追い柾材。

7号井戸跡 (第16図、図版6)

1区南部のほぼ中央、5号井戸跡の南3mで検出した。2号溝を切る。上部の西半分が搅乱の溝によって欠損する。残る平面は南北約2.0m×東西約2.4mの楕円形プランとなる。検出面から深さ1.2mで結桶組の井戸側を検出した。井戸側は最大で幅15cm、長さ154cm、厚さ2~3cmの側板からなり、径は約75~85cm、ほぼ垂直に2段重なっていた。2段目は検出面から深

cm、最大径は体部下位で7.7cm。37は口径3.1cm、器高8.2cm、体部下位の最大径7.5cm。いずれも体部外面下位は手持ちケズリ、中位から口縁部は回転ナデ。丁寧に整えられる。底部外面はヘラケズリ。肩部と底部外面に逆「V」字のヘラ記号が付く。無釉。備前焼。38は瓦質土器の釜鍔部。39・40は挽き臼の上臼。39は残存1/6程の破片である。厚さ7.0cm、重さ1.3kg。摺目の幅は6mm程でその間隔は0.4~0.8cm。分画数は6分画である。凝灰岩製。40も残存1/6程の破片である。厚さ6.5cm、重さ1.3kg。摺目の幅は4mm程でその間隔は0.6~1.2cm。分画数は6分画か。凝灰岩製。41は円形の板。桶の底板であろう。径19.0cm、厚さ1.3~1.5cm。裏面は風化が進み凹凸が激しい。2枚の半月形の板を接合しており、接合面に2ヶ所の木釘の孔がある。木目の観察から2枚は元来



第13図 5号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、34は1/4)

さ約3mまで確認したが、安全上の理由からさらに下部は掘削しておらず、井戸跡の底面も確認していない。井戸側内には節抜き竹が立てられていた。湧水が激しく掘削作業は難航した。出土遺物から18世紀後半に属する。

出土遺物（第17図、図版17）

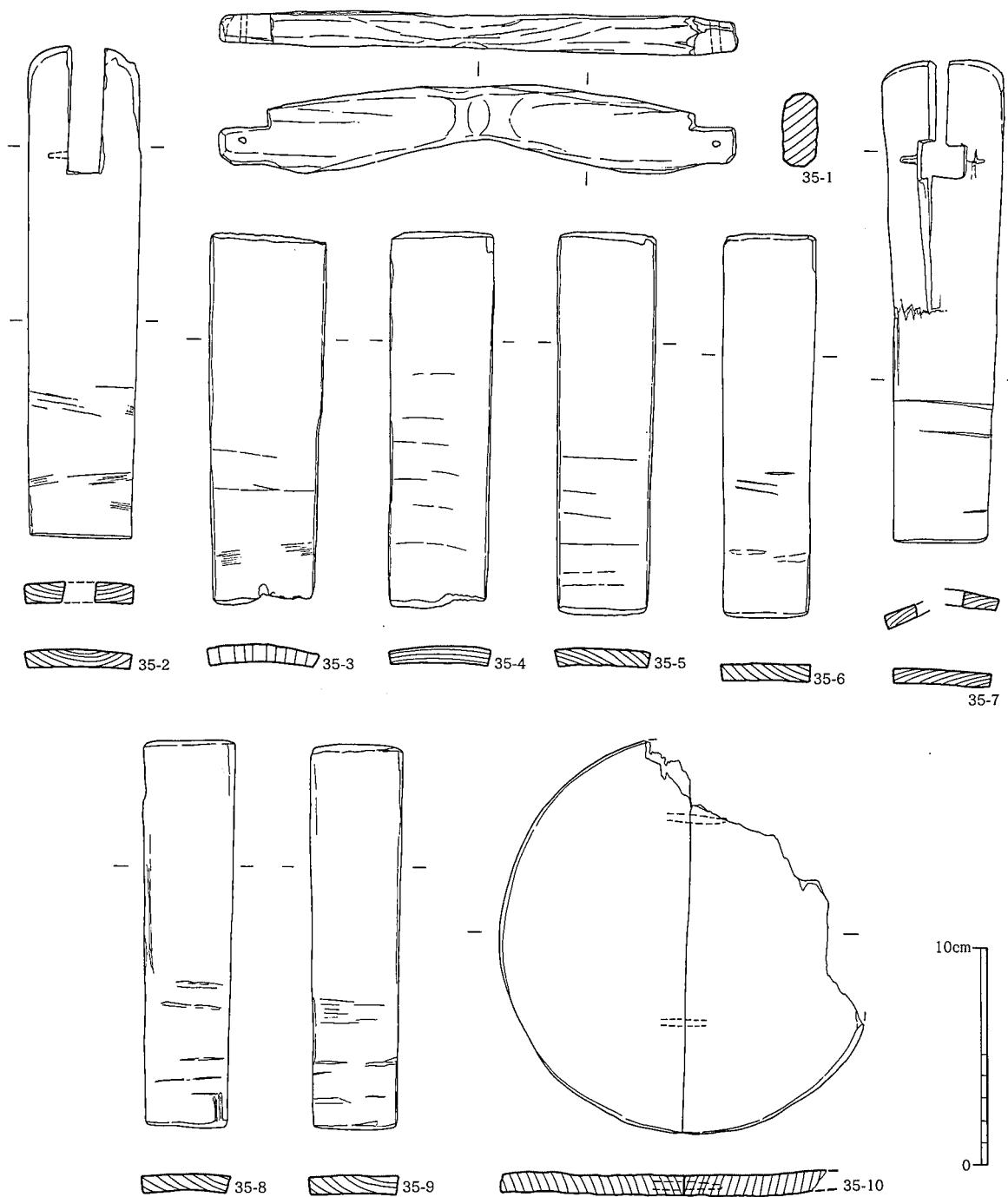
42～44は肥前系磁器の染付。42は小壺の口縁部。43は皿底部。蛇の目凹型高台で、高台内に銘款がある。渦「福」か。44は鉢もしくは皿の口縁部破片。内面染付、外面青磁。45は棒状の土製品。窯道具であろうか。

8号井戸跡（第16図、図版6）

1区南部のほぼ中央、7号井戸跡の南2mで検出した。素掘りの井戸。上部は搅乱の溝のため完全に欠損する。残る部分の平面形は南北約1.5m×東西約1.7mの方形プランとなる。検出面から2.2mの深さまで掘削したが湧水が激しく底面は確認できなかった。図にみえる3ヶ所のテラスは掘削時の掘り過ぎのためにできたものである。出土遺物から17世紀前～中葉に属する。

出土遺物（第17図）

46は肥前系磁器の小壺口縁部。端部内面を釉剥ぎする。47は瓦質土器の摺鉢口縁部。端部が水平に近く作られる。48は陶器の摺鉢底部。11条の摺目が放射状のち水平方向に施される。無

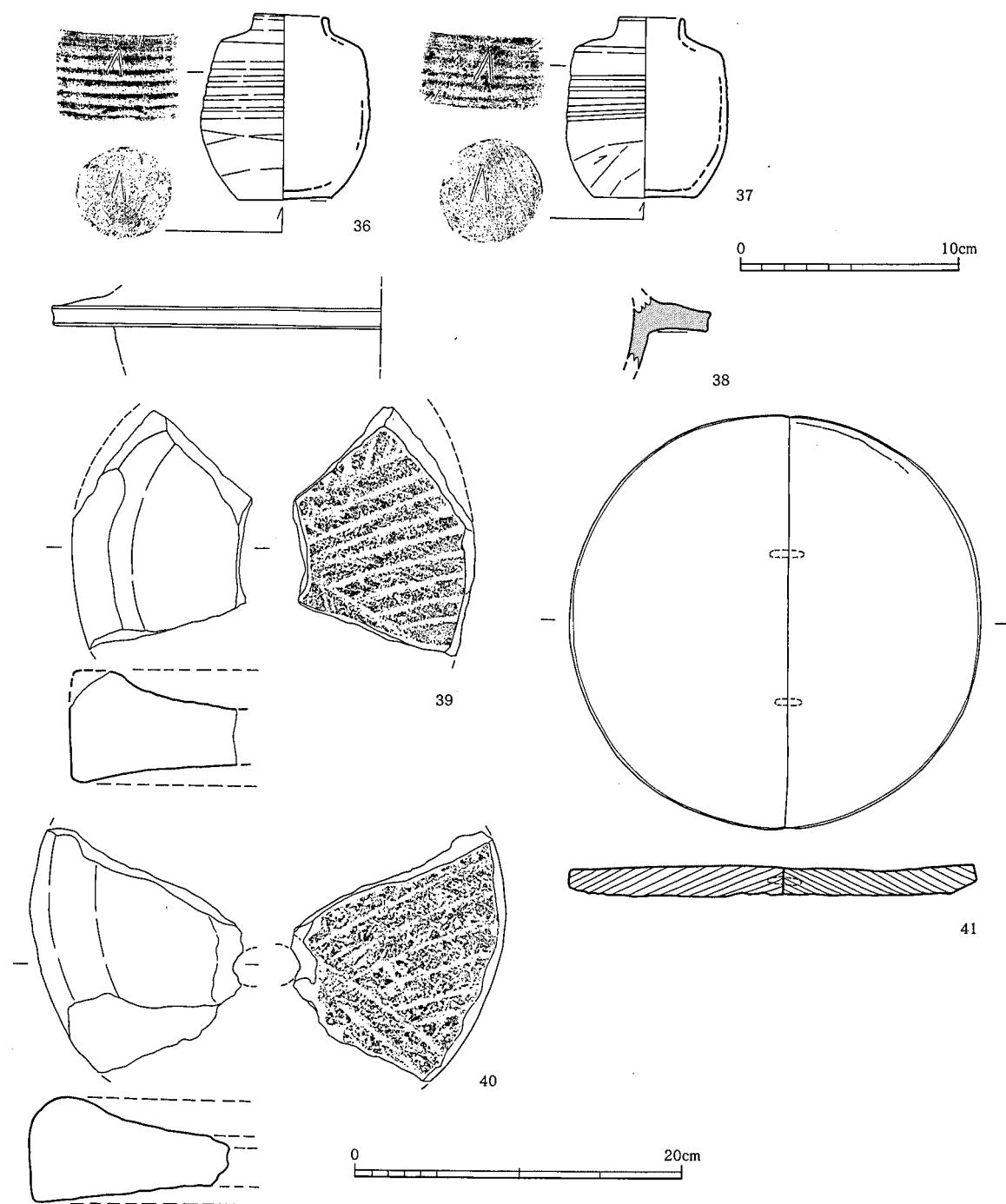


第14図 5号井戸跡出土木製品実測図 (1/3)

軸。唐津系か。

9号井戸跡

1区南西部端、調査区境で検出した。南側は搅乱で失われ、西側は調査区外となるため北東側の1/4のみ確認できた。掘削を始めてすぐに周囲の調査区西壁が崩落する恐れがあつたため作業を中止し、上端の記録のみ行った。わずかな掘削だったが遺物を得ることができた。遺物



第15図 6号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、39・40は1/4)

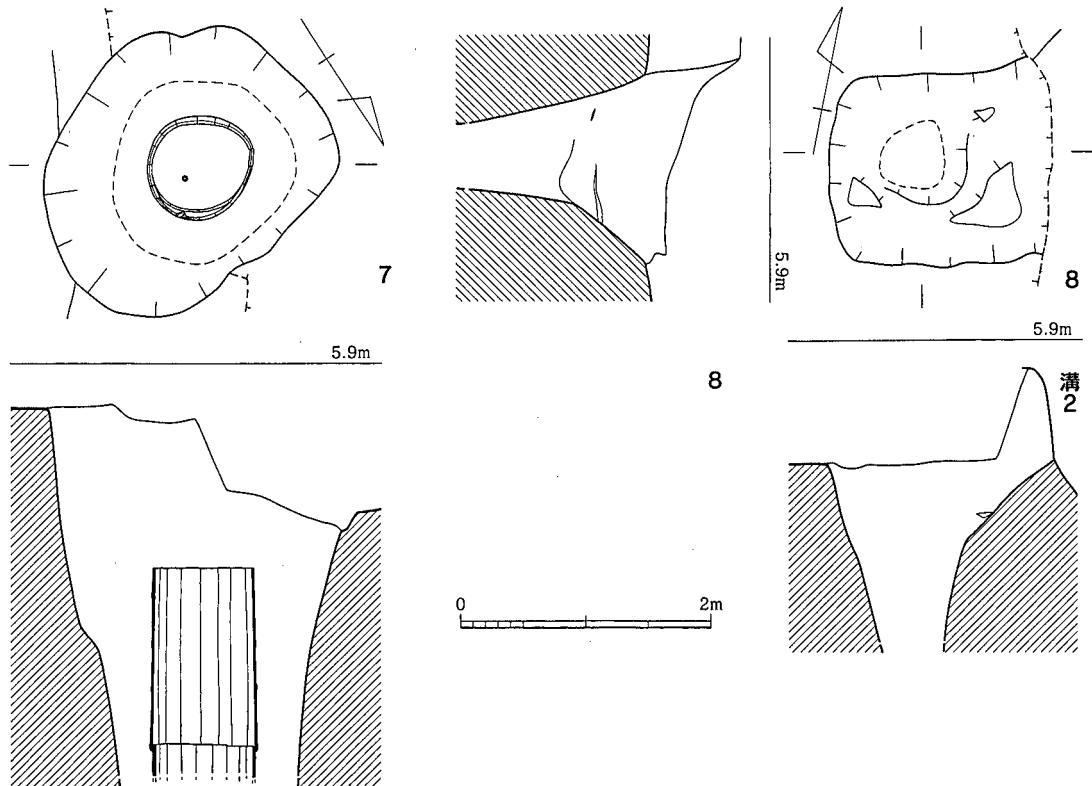
より16世紀末～17世紀前半に属する。

出土遺物（第17図）

49・50は陶器の摺鉢。いずれも11条の摺目が放射状のち水平方向に施され、体部外面には口クロ痕、底部外面に糸切り痕が残る。無釉。50は割れ口に二次焼成を受けた痕がある。

(4) 土坑

2号土坑（第18図、図版7）



第16図 7・8号井戸跡実測図 (1/60)

1区中央部の西側、6号井戸跡の西隣で検出した。長軸96cm×短軸80cmの楕円形プラン。深さは70cmで平坦な床面を持つ。出土遺物から17世紀後半に属する。

出土遺物（第17図）

51は肥前系磁器の白磁碗口縁部。52は唐津系陶器の摺鉢。14条の摺目が放射状に描かれる。底部外面糸切り痕。

3号土坑（第18図、図版7）

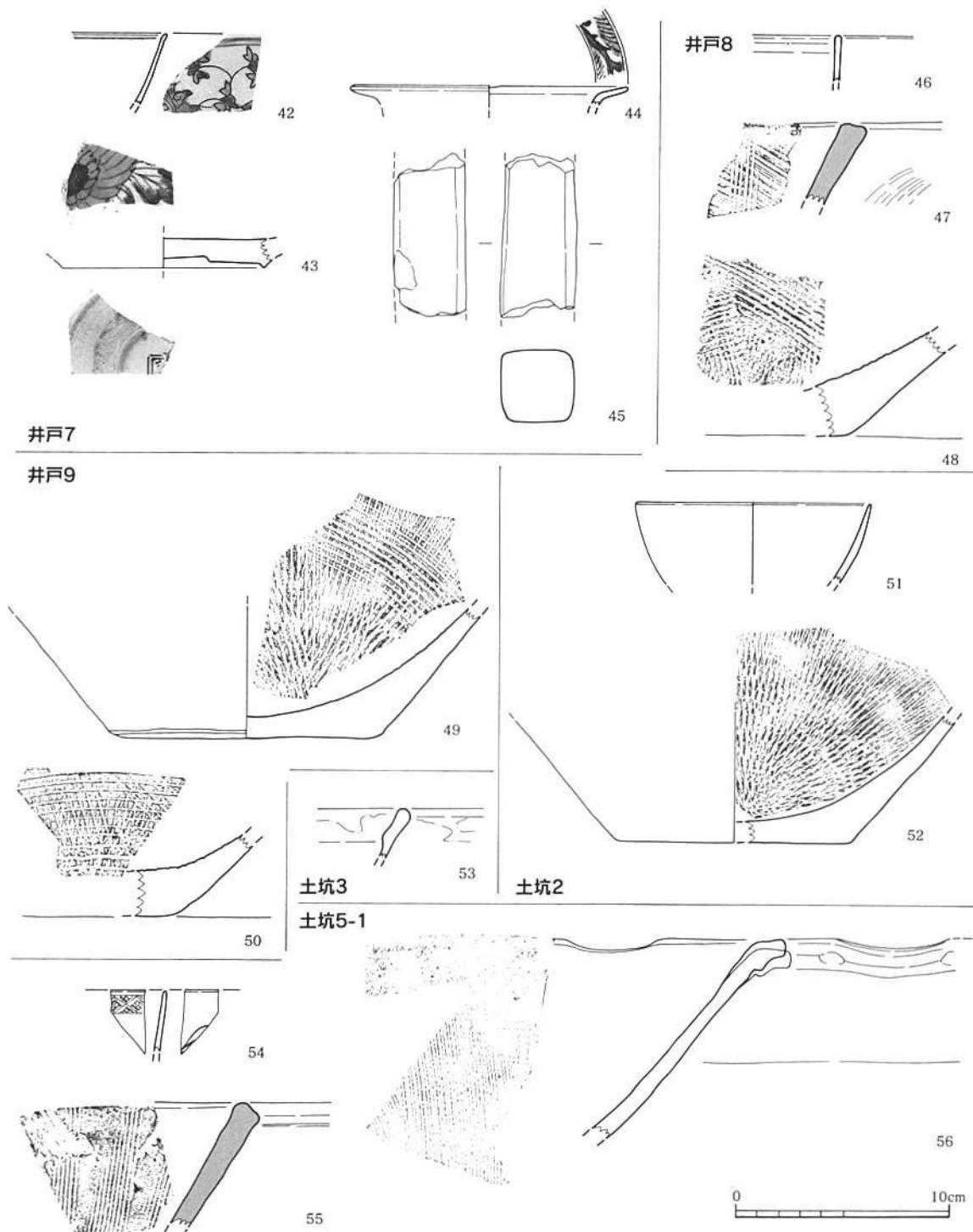
1区中央部の西側調査区境、2号土坑の西1mで検出した。西側が調査区外となるため、現状で長軸210cm、短軸55cmとなる。深さは35cmで床面は全体的に平坦である。出土遺物から17世紀後半に属する。

出土遺物（第17図）

53は唐津系陶器の摺鉢口縁部。口縁部内側が肥厚する。口縁部のみ鉄釉を施す。

5-1号土坑（第18図、図版7）

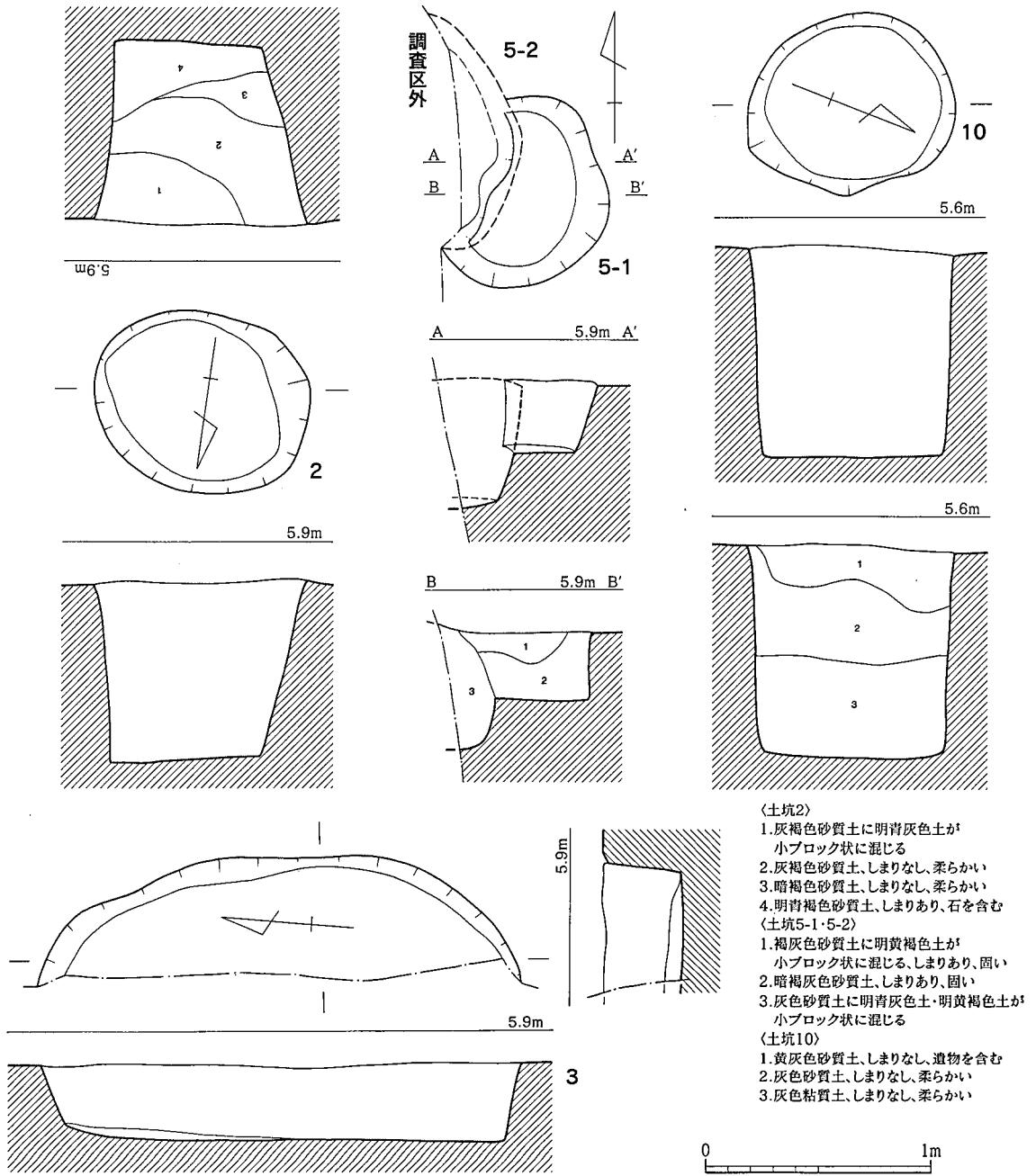
1区中央やや北の西側調査区境、3号土坑の北2mで検出した。3号井戸跡を切り、5-2号土坑に切られる。北西側1/3が5-2号土坑で欠損するが、平面形は径約90cmの円形に復元できる。深さは32cmで床面は平坦である。当初5-2号土坑と同一の遺構と誤認したため、遺物を分けることができなかった。3号井戸跡を切ることから19世紀以降に属する。



第17図 7・8・9号井戸跡・2・3・5-1号土坑出土遺物実測図 (1/3)

5-2号土坑 (第18図、図版7)

3号井戸跡・5-1号土坑を切る。当初5-1号土坑と同一の遺構と誤認したため、南東側の上端ラインを落としてしまった。また北側半分も3号井戸跡埋土とともに誤って崩してしまった。調査区西壁で土坑のプランが確認できたため、破線で復元している。それによると残存する長軸は約100cm、短軸は西側が調査区外となるため現状で30cm。深さは55cmで床面は平坦である。3号井戸跡・5-1号土坑を切ることから19世紀以降に属する。



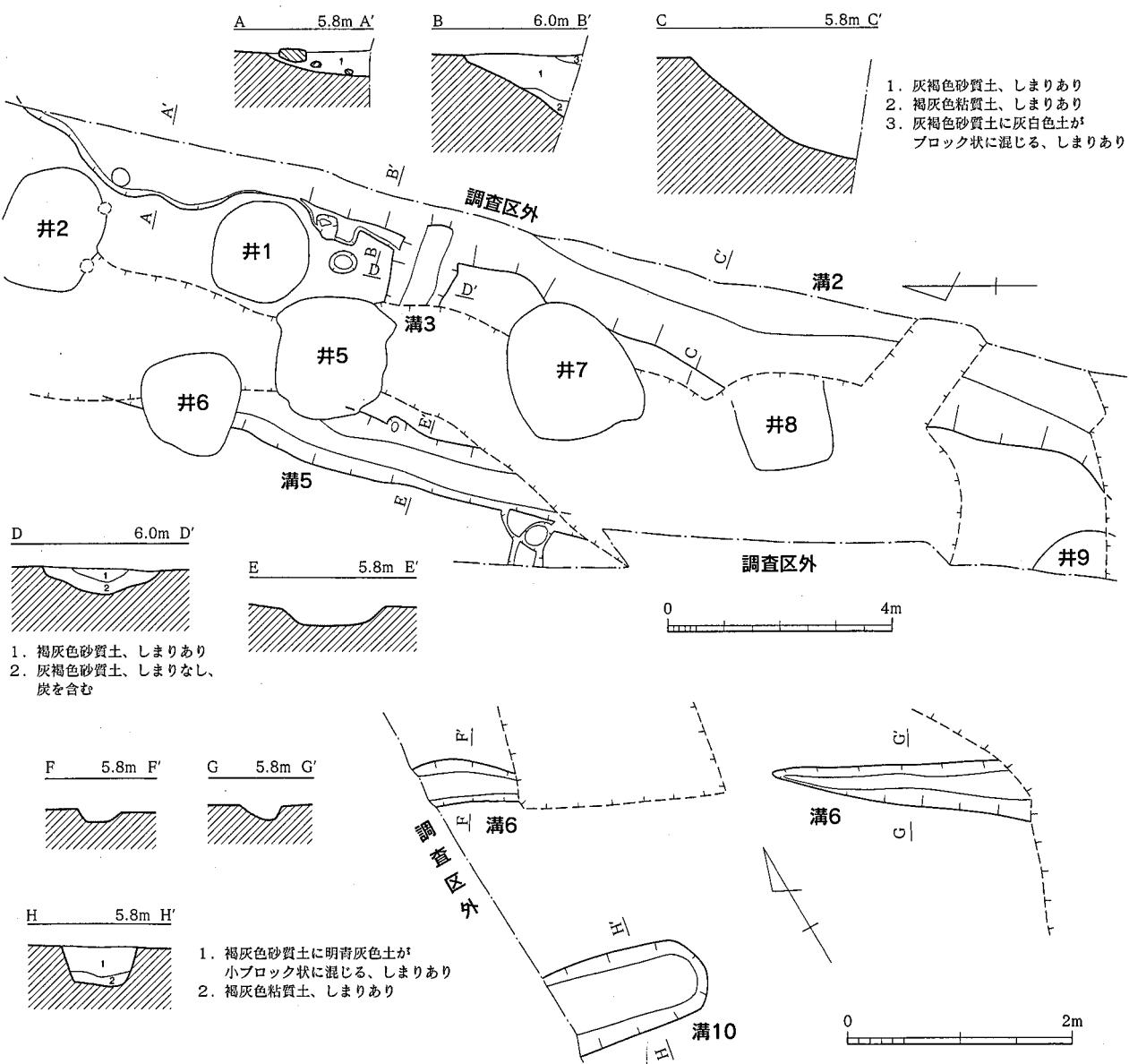
第18図 2・3・5-1・5-2・10号土坑実測図 (1/30)

5-1・5-2号土坑出土遺物 (第17図)

54は肥前系磁器の染付で、猪口の口縁部。内面に四方櫛文を描く。55は瓦質土器の摺鉢口縁部。端部上面が外向きになる。摺目が口縁端部まで伸びる。56は陶器の摺鉢口縁部。口縁部は肥厚して外反し、注口を持つ。鉄釉が内外全面に施される。

10号土坑 (第18図、図版7)

1区北西端部で検出した。平面は南北0.9m×東西0.8mの円形を呈す。深さは0.9mで床面は平坦である。18世紀後半～19世紀の磁器片が出土したが図化に耐えない。



第19図 2・3・5・6・10号溝実測図 (1/60)

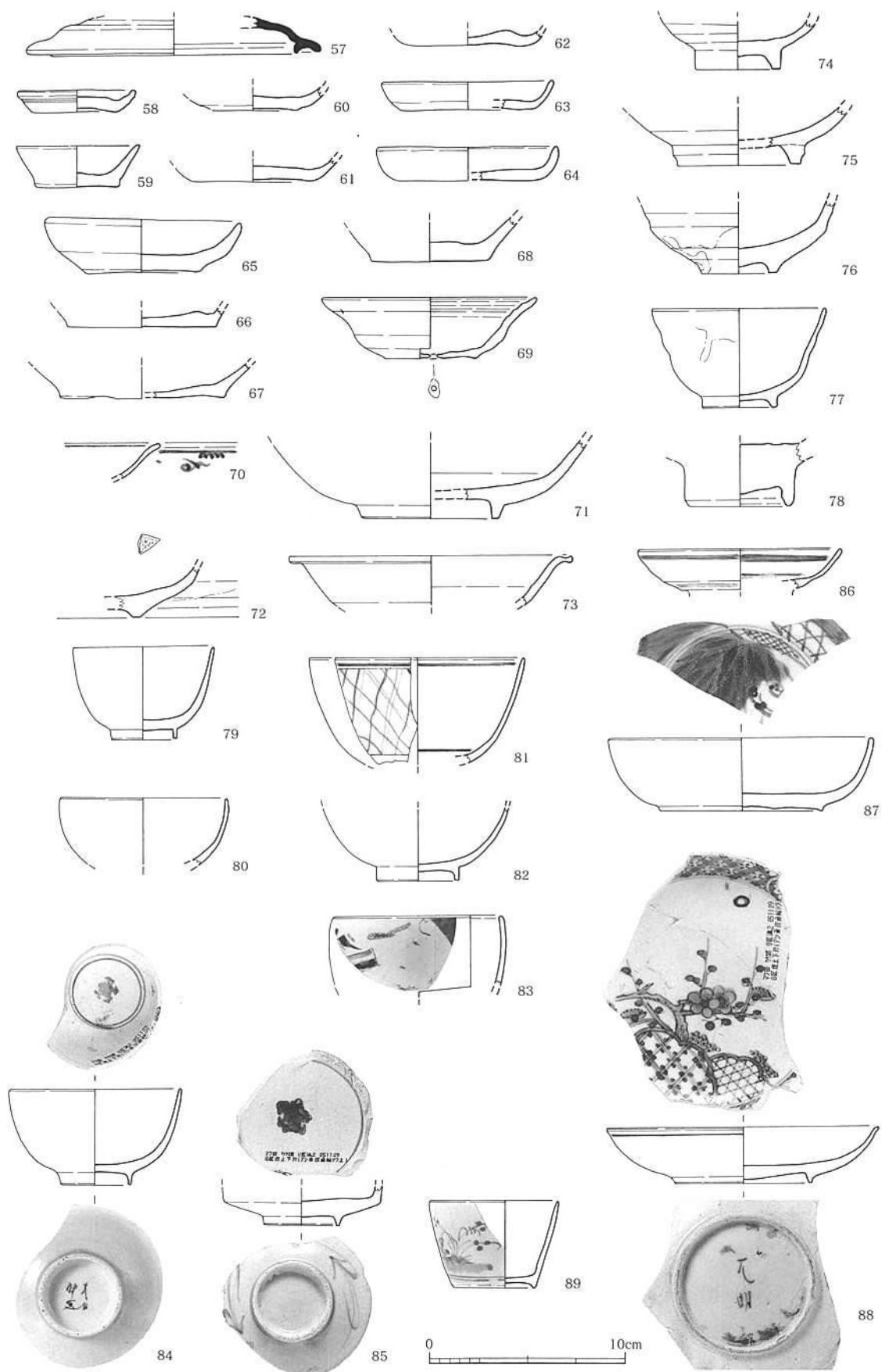
(5) 溝

2号溝 (第19図、図版8)

1区の東側調査区境に沿って検出した。1号柱穴列、3号溝を切り、7号井戸跡に切られる。検出した長さは約20m。北東—南西方向に走る溝で、北端は調査区外に延び、南端は搅乱で失われる。深さは状態がよいところで50cmを測る。なお、検出した上端ラインは西岸側のみで、東岸は調査区境の向こう側となる。現在も1区の東側には調査区に並行して水路が流れしており、2号溝との関連が推測される。遺物は16世紀後半から19世紀の物も多く出土している。

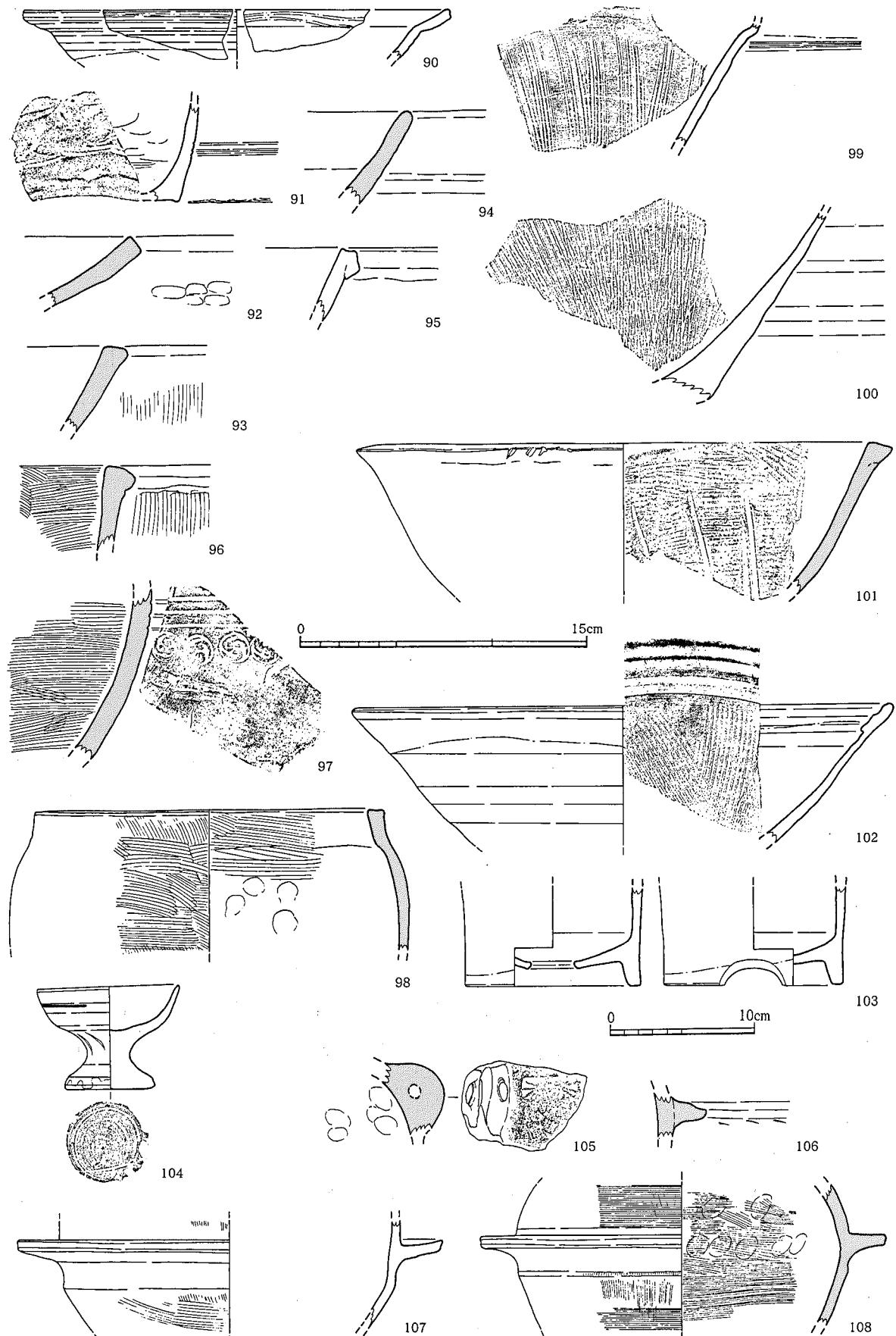
出土遺物 (第20・21・22図、図版17・18)

57は須恵器壺蓋の口縁部。復元口径15.0cm。径は大きく全体的に扁平。かえりは短いが口縁よりも下に出る。混入品。58～69は土師質土器。いずれも糸切り痕を残す。58～65は小皿。

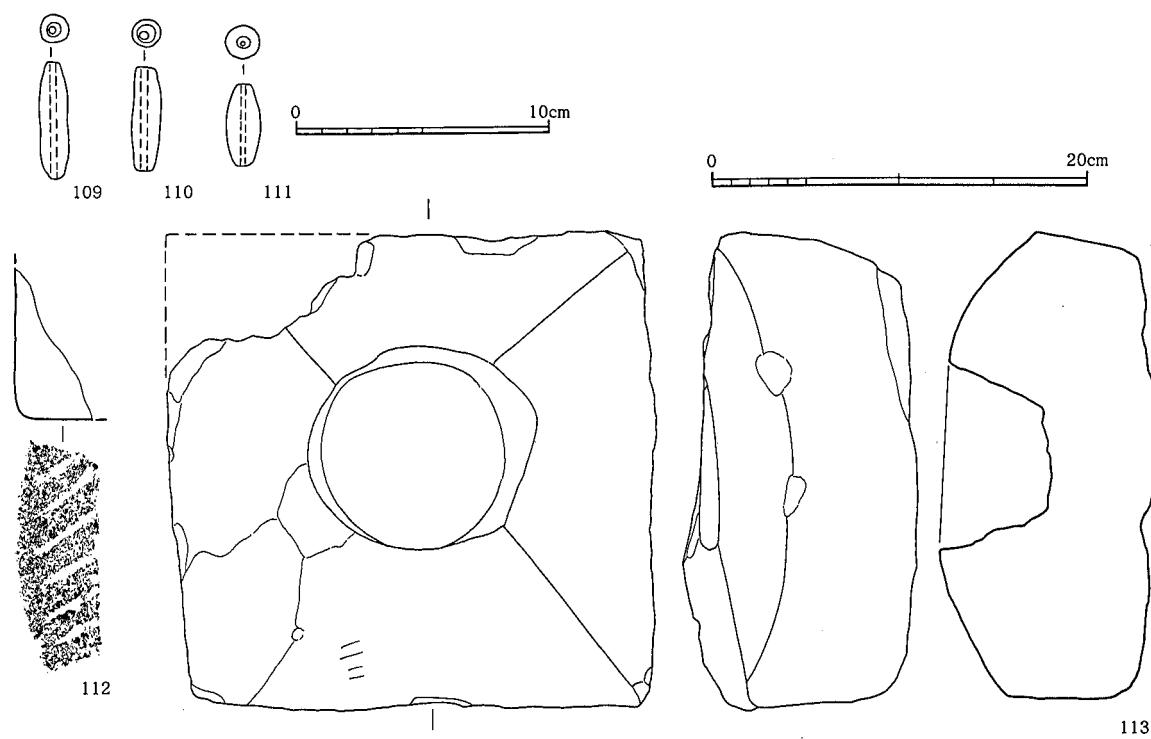


第20図 2号溝出土遺物実測図① (1/3)

58は口径6.0cm、器高1.1cm。59は口径6.3cm、器高2.1cm。65は口径10.0cm、器高2.8cm。66～68は口縁部を欠くため小皿か壺か判断しがたい。69は壺。口径10.9cm、器高3.1cm。口縁部が外反して伸びる。底部中央に径2.5mm程の穿孔がある。70は青花の端反り皿口縁部。外面の口縁部に界線と体部に唐草文を描く。71は青磁碗。龍泉窯系。全面施釉後に畳付けのみ釉を削る。黄褐色を帯びる。72・73は唐津系陶器の皿。72は体部下位～底部の破片で、見込みに目土跡を残す。底部外面は無釉。73は溝縁皿。灰釉を施す。74～78は唐津系陶器の碗。74は体部下位～底部の破片。胎土は精良で、畳付けを除く全面に灰釉を施す。75・76も体部下位～底部の破片。高台は露胎し明褐色を呈する。76は高台見込みに兜巾が残る。77は体部が斜め上方に伸びて口縁に至る。畳付けを除いて全面施釉。78は青磁碗の底部。厚い底部で、全面施釉後に外底を輪状に削る。焼成が悪く、胎土の色調は褐色、釉調は灰色から灰白色を呈する。79～85は肥前系磁器の碗。79・82は白磁。畳付け以外全面に施釉する。80も白磁。口縁端部に口紅。81・83～85は染付。81は外面に丸みのある網目文が描かれる。84は内面見込みにコンニヤク印判の五弁花、外面見込みに「大明年製」銘款。85は筒形碗の底部。内面見込みに五弁花のコンニヤク印判。底部外面の高台外にも文様を描く。畳付け以外の全面に施釉する。86～88は肥前系磁器の皿。86は内面見込みを蛇の目釉剥ぎする。87は蛇の目凹型高台を持つ。88は内面の口縁部に四方擗文、見込みに梅花を描く。外面見込みに「大明」の銘款が入る。畳付けを除く全面に施釉する。89は肥前系磁器の猪口。90は唐津系の陶器の皿口縁部。口縁部が屈曲して鍔縁状になる。91も唐津系陶器で瓶の体部下位～底部破片。平底で内面に当て具痕が残る。外面は施釉する。92～94・96～98・101は瓦質土器。92・93は鉢。93は外面にタテハケを残す。94は素口縁の鍋。95は土師質土器の鍋で、口縁部を玉縁状に作る。96・97は火鉢。96は口縁部で端部が外側に突出する。内面ヨコハケ。口縁部下の外面は無文でタテハケで仕上がる。97は体部上位の破片。3条の沈線の下に巴文のスタンプが廻る。内面ヨコハケ。98は深鉢もしくは釜。復元口径24.4cm。体部は丸みを帶び、口縁部は内側が肥厚して内傾する。口縁部は外面タテハケ、内面ヨコハケ、体部は外面ヨコハケ、内面ナデで整えられる。101は摺鉢。口縁端部上面は水平に近い。内面はハケメ後に摺目が施される。摺目は太く間隔を空けて刻まれる。外面ナデ。口縁端部外面に粗雑な刻み目が廻る。99・100・102は唐津系陶器の摺鉢。99は体部上位の破片。口縁部のみ鉄釉を施す。100は体部下位の破片。体部外面にロクロ痕が良く残る。内外面無釉。102は口縁内面が肥厚する。鉄釉が口縁部にのみかかる。103は陶器の植木鉢。104は磁器の仏飯器。底部外面は糸切り後未調整。105～108は瓦質土器の釜。105は耳の破片。外面に菊花文のスタンプが廻る。106は鍔部の破片。107・108は体部。108は内外面ともカキメで丁寧に整えられる。109～111は管状土錐。109は長さ4.7cm、最大幅1.1cm、孔径0.3cm、重さ5.9g。110は長さ4.2cm、最大幅1.1cm、孔径0.4cm、重さ4.7g。111は長さ3.2cm、最大幅1.4cm、孔径0.2cm、重さ4.9g。112は挽き臼。上下は不明。重さ0.4g。摺目の幅は5mm程でその間隔は1.0～1.2cm。分画数は不明である。凝灰岩製。113は五輪塔の火輪で、一部欠損する。縦25cm×横26cm、厚さは12.6cm。重さ7.0g。上面中央の接続部は円形の孔で、径11cm、深さ6cm。孔から四隅に向けて稜線が通る。全体的に風化が進む。凝灰岩製。



第21図 2号溝出土遺物実測図② (1/3、90・98・102・107・108は1/4)



第22図 2号溝出土遺物実測図③ (1/3、112・113は1/4)

3号溝（第19図）

1区の中央東側、5号井戸跡の南東2mで検出した。東西方向の溝で東は2号溝に切られ、西は搅乱の溝で消える。このため検出した長さは1.5m程である。幅は50～60cm、深さは30cmを測る。出土遺物や2号溝を切ることから、16世紀末～17世紀前半に属すると考えられる。

出土遺物（第23図）

114は土師質土器の小皿。復元口径9.4cm。

5号溝（第19図、図版8）

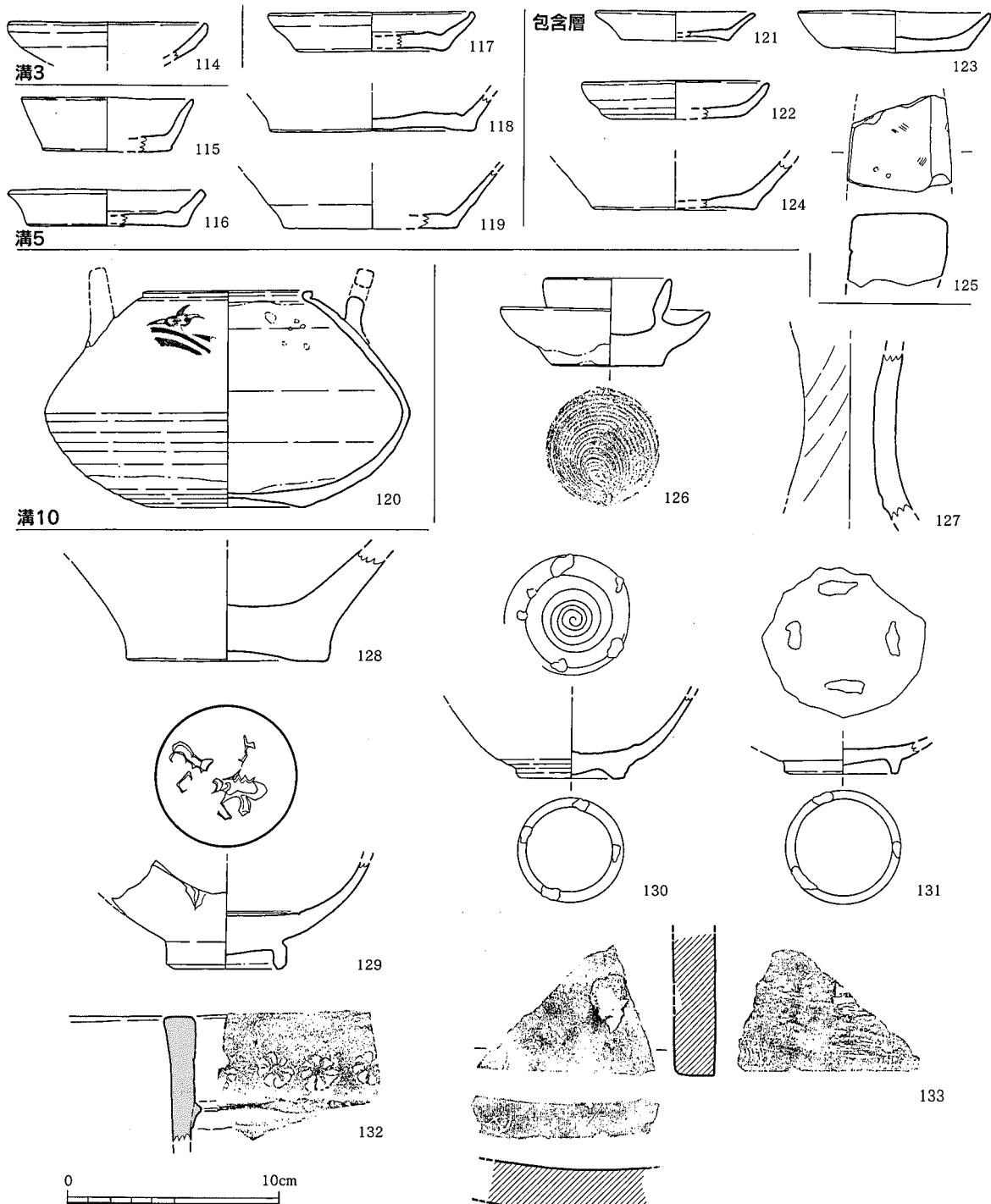
1区の中央西側、5号井戸跡の西で検出した。5・6号井戸跡に切られる。南北方向に走る溝で北は6号井戸跡と搅乱の溝で、南も搅乱の溝で消える。検出した長さは約6mで、幅は50～55cm、深さは30～40cmを測る。出土遺物および5号井戸跡に切られることから16世紀代に属する。

出土遺物（第23図）

115～119は土師質土器。115～117は小皿。いずれも糸切り痕を残す。115は口径8.0cm、器高2.5cm。116は口径9.2cm、器高1.7cm。127は口径9.6cm、器高1.8cm。118・119は壊。いずれも口縁部を欠き、底部外面は摩滅する。

6号溝（第19図）

1区北部の西側で検出した。北西～南東方向の溝で東は搅乱溝で消失し、西は調査区外に延びる。検出した長さは5.5mだが、自然消滅と搅乱で中央2mは消える。幅最大50cm、深さ約10cm。遺物は出土していない。



第23図 3・5・10号溝・1区その他の出土遺物実測図① (1/3)

10号溝 (第19図、図版9)

1区北部の西側、6号溝の南1.5mで検出した。東西方向に走る溝で、東端から長さ65cmで調査区西壁にぶつかり調査区外に延びる。幅は70～80cm、深さは30～35cmを測る。出土遺物から18世紀後半～19世紀に属する。

出土遺物 (第23図)

120は陶器の土瓶。注口と前後の耳を一部欠く。ソロバン玉状の体部で、口縁端部は丸く收まる。外面の体部中位から口縁端部内面まで施釉する。外面の体部上位に草花文を描く。

(6) 1区その他の出土遺物（第23・24図、図版18）

121～125は包含層出土の遺物。121～124は土師質土器。121～123は小皿。124は壺。125は砥石の破片。重さ103.6g。砂岩製。126・127は遺構検出時に出土したもの。126は唐津系陶器の灯明皿。器高の2/3程の受け皿が付く。底部外面糸切り痕。褐色の鉄釉がかかる。127は須恵器の長頸壺頸部。全体的に摩滅するが、内面にシボリ痕が見られる。

128～135は搅乱から出土したもの。128は弥生土器。壺の底部か。129は青磁碗の底部。龍泉窯系。内面見込みに印花文と思しき文様を、体部外面に蓮弁文を描く。畳付けと外底は露胎する。130・131は唐津系陶器。130は碗で、見込みと畳付けに目土跡を残す。131は皿の底部。同じく見込みと畳付けに目土跡を残す。132は瓦質土器の火鉢口縁部。口縁部はやや内径気味に肥厚する。外面の口縁部下に菊花文のスタンプが廻る。133は瓦の破片。側面に「丸に十」の刻印がある。134は茶臼の上臼。残存は1/2程で、心棒孔や側面の挽き木挿入孔も残る。厚さ11.8cm、重さは3.1kg。挿入孔には2段菱形の浮き彫り装飾が施される。摺目はよく使用されてほとんど磨り減っている。確認できるところで摺目は幅1mm、間隔は1.2～1.6cm。分画数は不明である。砂岩製。135は挽き臼の下臼。厚さ7.2cm、重さ2.7kg。心棒孔も確認できる。摺目は全体的によく使用されて磨り減っており、幅は5mm程、間隔は0.8～1.4cm。分画数は6分画である。凝灰岩製。

(7) 小結

1区では、中世末から近世、そして近現代に至る生活の痕跡を確認できた。そのなかでも中世末期～近世初頭の遺構は井戸跡5基、溝3条が検出され、この時期の土地利用が活発だったことを物語る。特筆すべき物として1号・5号井戸跡から釣瓶の桶が、6号井戸跡から備前焼の茶入れが出土している。その後17世紀後半以降は遺構・遺物も減少するが18世紀後半から再び井戸が掘削されるなど利用が始まる。

3) 2区の検出遺構と出土遺物

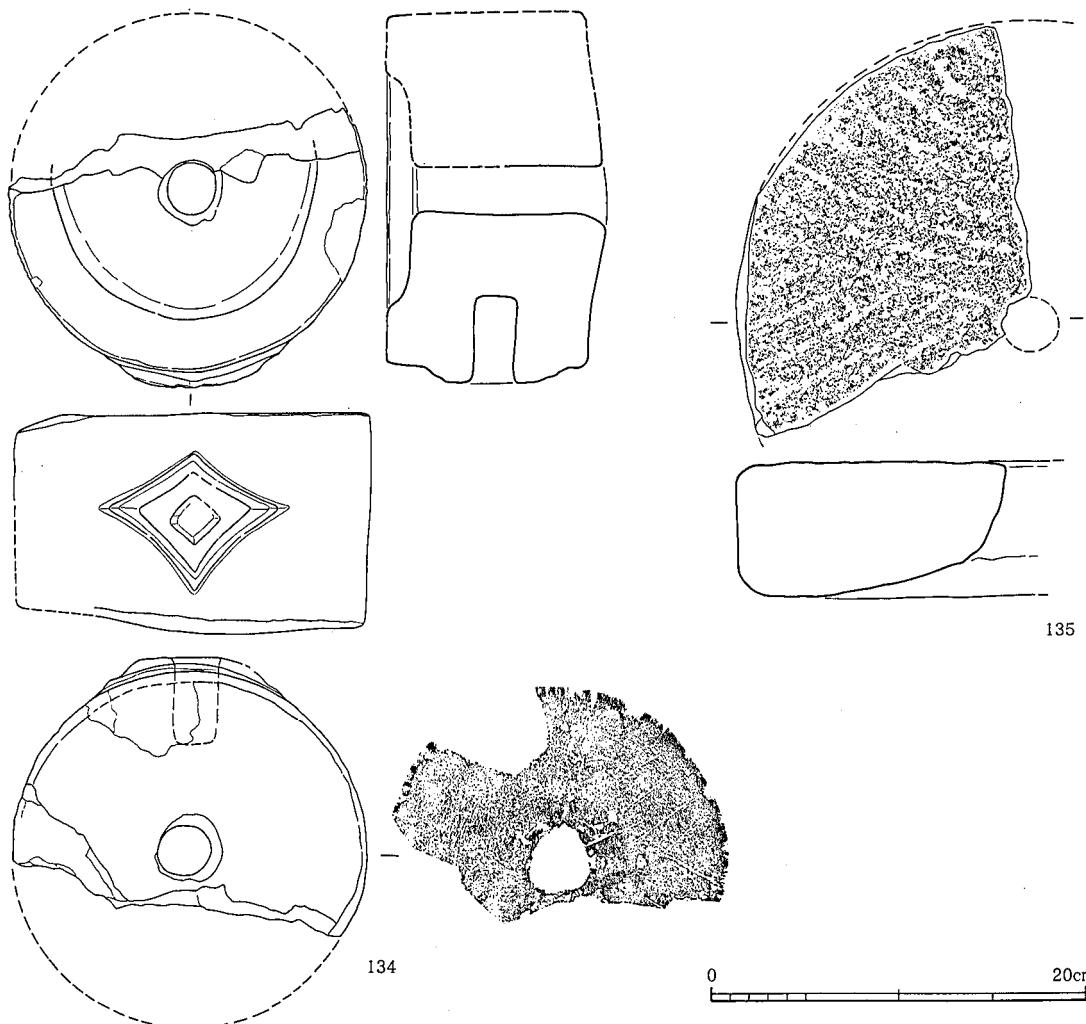
(1) 2区の概要

それぞれ市道を挟んで1区の北側、3区の南側に位置する。東西最大9.5m、南北18mでやや南側が狭くなる。調査区中央部のやや西に近代の大きな搅乱坑があり、一部の遺構が切られる。調査の結果、井戸跡3基、土坑4基、溝4条と多数のピットが検出された。このうち井戸跡1基は結桶組の井戸側を持つ。また溝1条は本調査地で唯一確認された古代（8～9世紀）の遺構である。

(2) 井戸跡

10号井戸跡（第25図）

2区北部の中央で検出した。素掘りの井戸。8・13号溝を切る。当初誤って13号溝と同一の



第24図 1区その他の出土遺物実測図② (1/4)

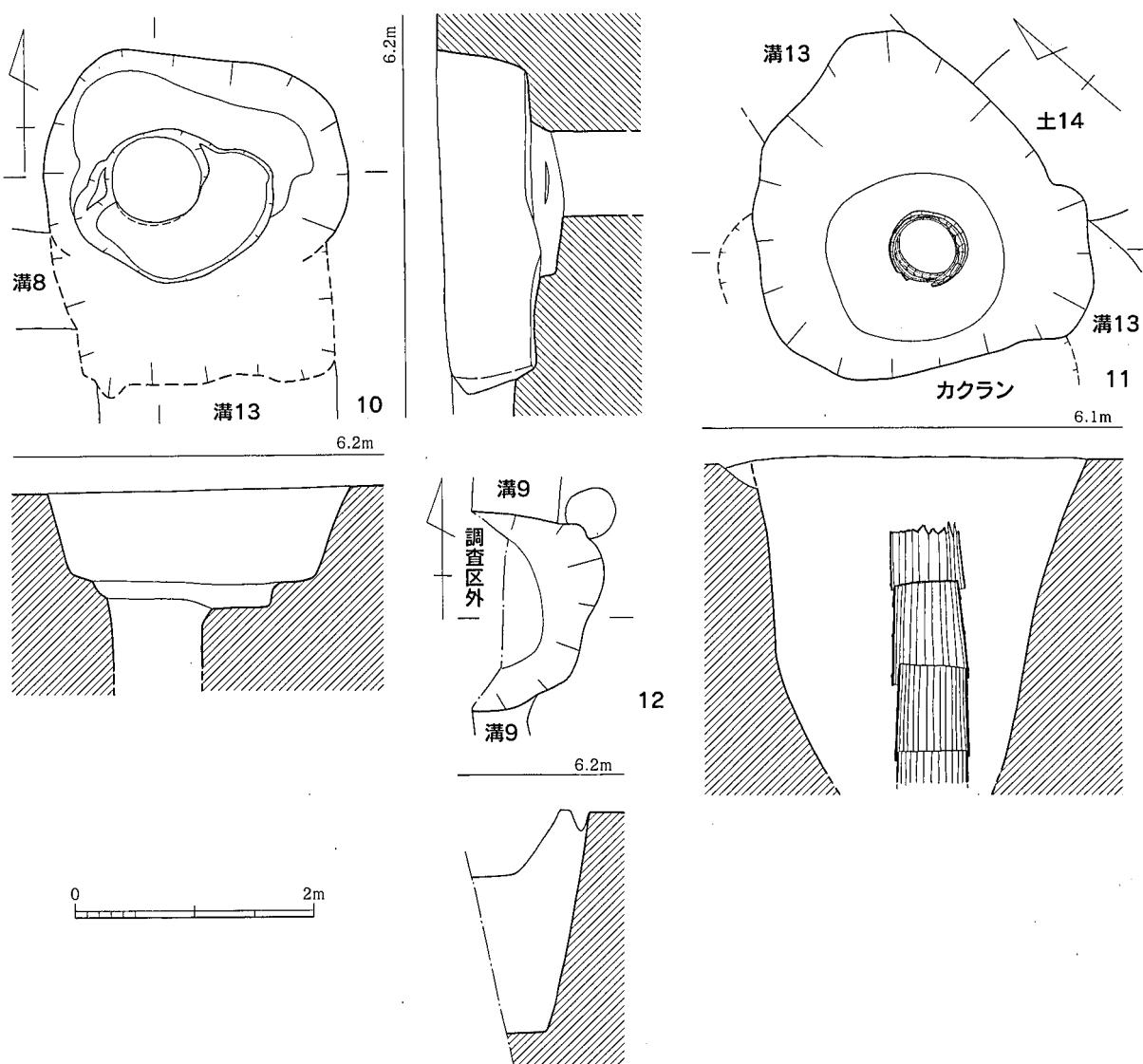
遺構としたために南側の上端ラインを認識せずに掘削してしまった。平面プランは東西2.6m ×南北約2mの楕円形プランに復元できる。深さ約80cmと約100cmの2段のテラスを持ち、さらに中央やや西が円形に深く掘り込まれる。検出面から深さ1.6mまで掘削したが、湧水が激しく底面は確認していない。出土遺物から17世紀後半に属すと考えられる。

出土遺物（第26図、図版18）

136・138・139・141は土師質土器。136は小皿。底部外面は摩滅する。138・139は鍋口縁部。端部が玉縁状になる。141は釜体部。内外面ナデで仕上がる。137は土師器の壊底部。高台が付く。混入品。140は瓦質土器の摺鉢。体部の破片である。内面ハケメ後に放射状に6条の摺目を描く。142は青磁碗口縁部。外面に細線連弁文を描く。釉調は褐色を呈する。143は肥前系磁器の碗底部。17世紀後半。144は丸瓦の玉縁側破片。凹面に布目痕を残す。145は挽き臼の下臼。厚さ5.8cm、重さ3.8kg。心棒孔が残る。摺目の幅は6mm程、間隔は0.4～0.6cm。分画数は6分画である。凝灰岩製。

11号井戸跡（第26図、図版9）

2区中央部、10号井戸跡の南4mで検出した。14号土坑・13号溝を切る。西半分の上半は攪

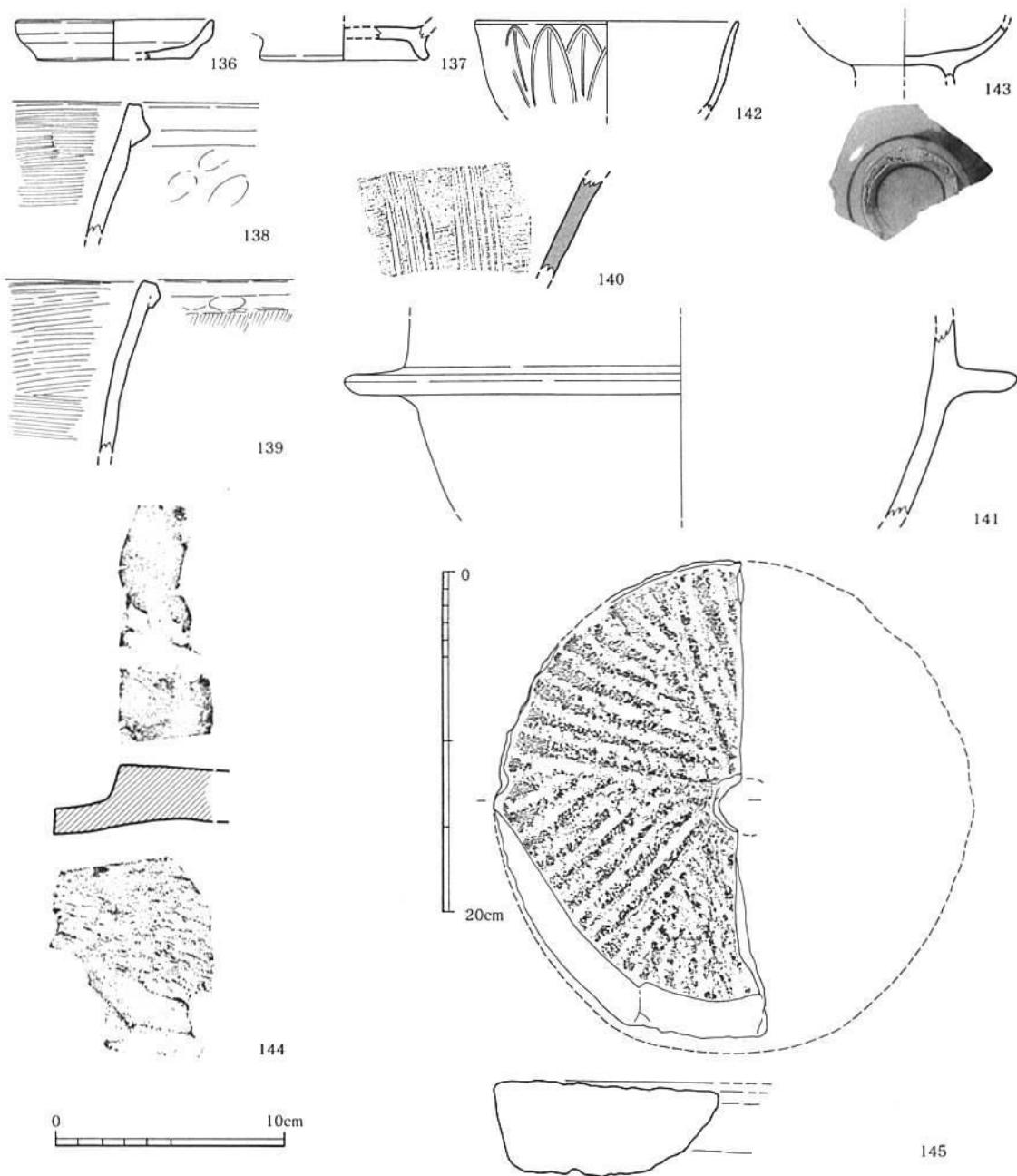


第25図 10・11・12号井戸跡実測図 (1/60)

乱のため失われる。現状で南北3 m、東西2.6 mの大きな不整形プランで、検出面から深さ0.5 mで結桶組の井戸側を検出した。井戸側は最大で幅9cm、長さ84cm、厚さ1.5～2 cmの側板からなり、径は約75～85cm、4段重なって検出した。4段目は検出面から深さ約2.8mまで確認したが、湧水と安全上の理由からさらに下部は掘削しておらず、井戸跡の底面も確認していない。出土遺物から19世紀以降に属する。

出土遺物（第27～30図、図版19）

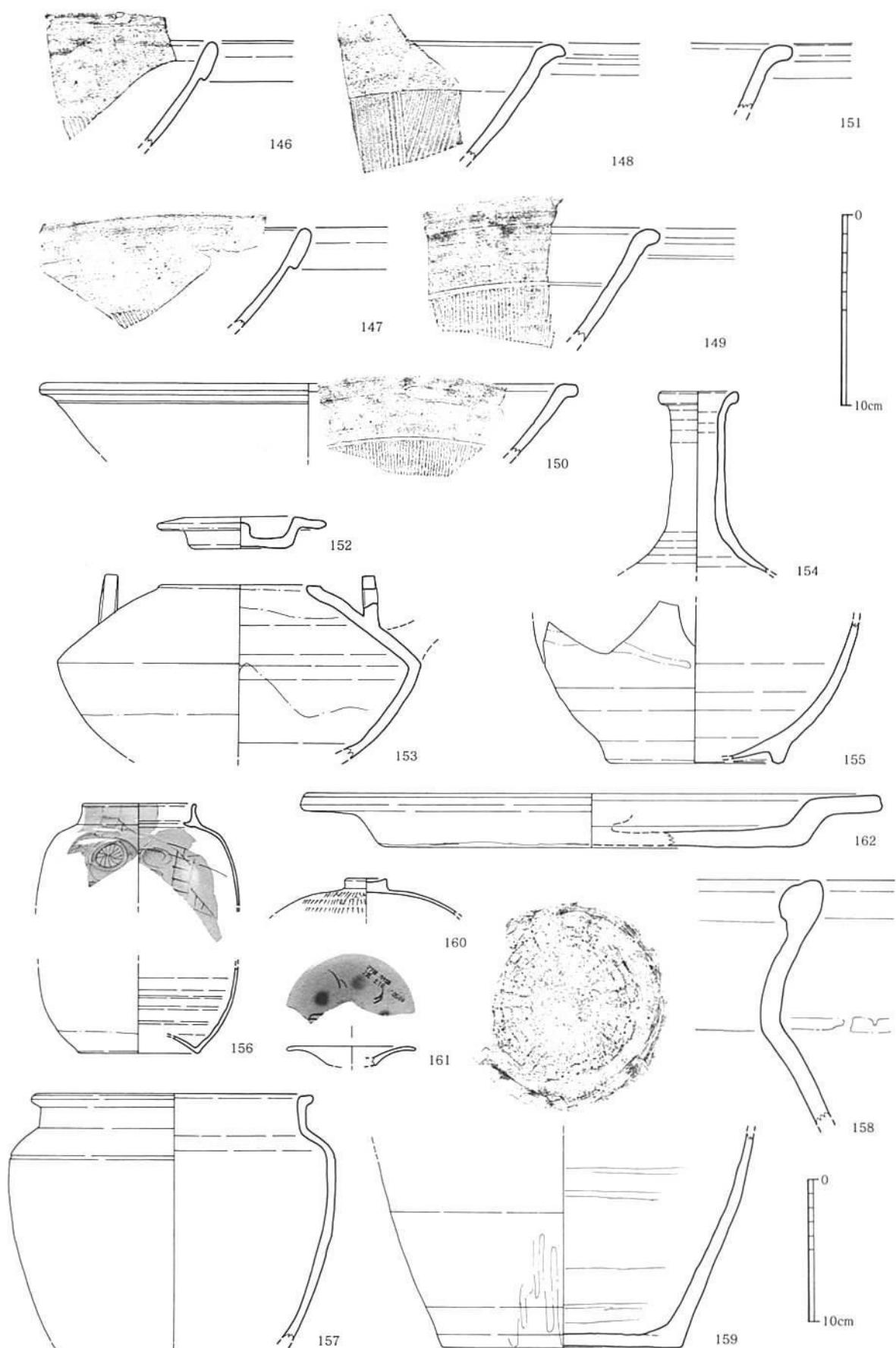
146～155・157～159は唐津系陶器。146～151は摺鉢。いずれも鉄釉が全面に施される。146・147は口縁部が肥厚する。148～151は口縁部が外反して如意形となる。152は土瓶の蓋。上面に黒色の鉄釉がかかる。153に付く。153は土瓶。注口を欠く。ソロバン玉状の体部で、口縁端部は平らに作られる。外面の体部中位から口縁部内面にかけて黒色の鉄釉が施される。但し口縁端部上面は露胎。154・155は瓶。154は口頸部。ロクロ成形で長頸である。鉄釉。155は体部下位～底部。ロクロ成形で高台が付く。二彩手か。157は小型の甕。口径14.8cm。158は体



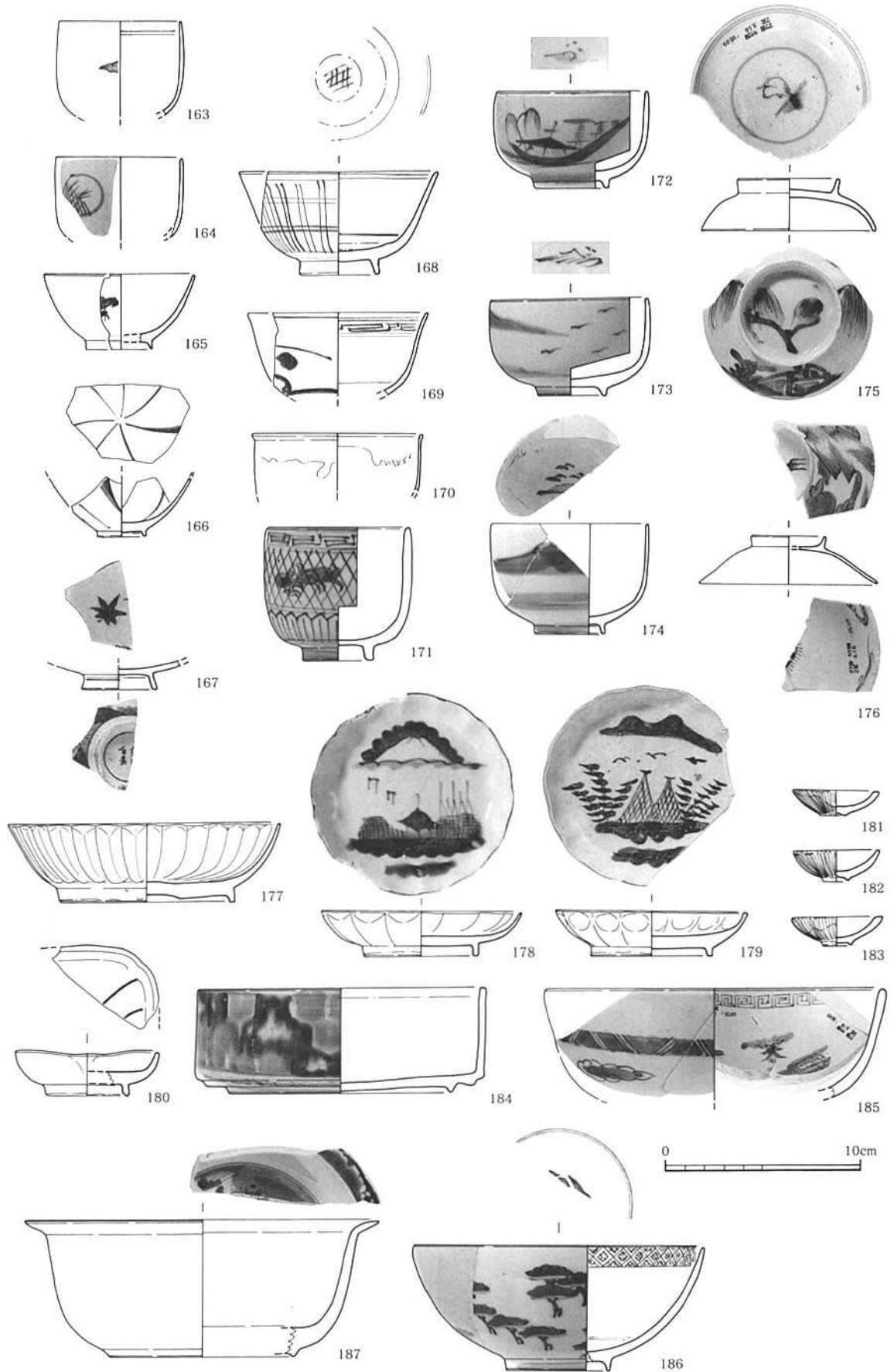
第26図 10号井戸跡出土遺物実測図 (1/3、145は1/4)

部下位～底部。底径16.7cm。底部内面に放射状に当てられた格子目の当て具痕が残る。159は大甕の口縁部破片。口縁端部が内側に丸く肥厚する。156・160～162は陶器。攪乱からの混入品か。156は小型壺。器壁が薄い。160～162は蓋。160は体部が丸くボタン状のつまみが付く。体部外面に飛び鉋が施される。162は甕など大型品の蓋。

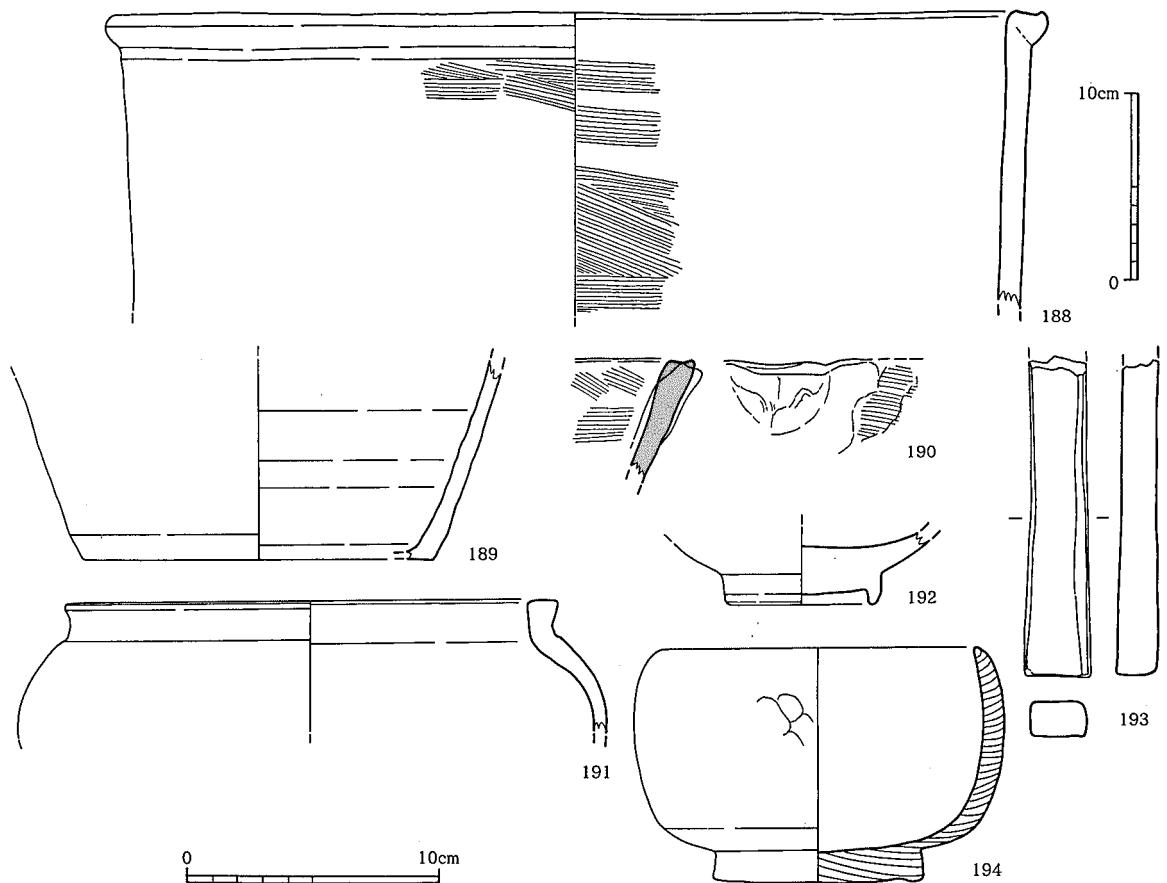
163～187は肥前系の磁器。163～174は小壺・碗。167は高台見込みに「大明年製」の銘款が入る。168・169は端反り碗。168は外面と見込みに格子状の網目文を描く。169は口縁部内面に雷文帯が廻る。171は口縁部内外面に雷文帯、体部外面に蟹が入った網目文を描く。172～174は見込みに波千鳥文が入る。175・176は蓋。175は天井部に丸みがある。外面全体に文様を描き、内面見込みには鷺文が描かれる。176は体部が直線的に伸びる。177～180は皿。いずれも型打ち



第27図 11号井戸跡出土遺物実測図① (1/3、150・158・159は1/4)



第28図 11号井戸跡出土遺物実測図② (1/3)



第29図 11号井戸跡出土遺物実測図③ (1/3、188は1/4)

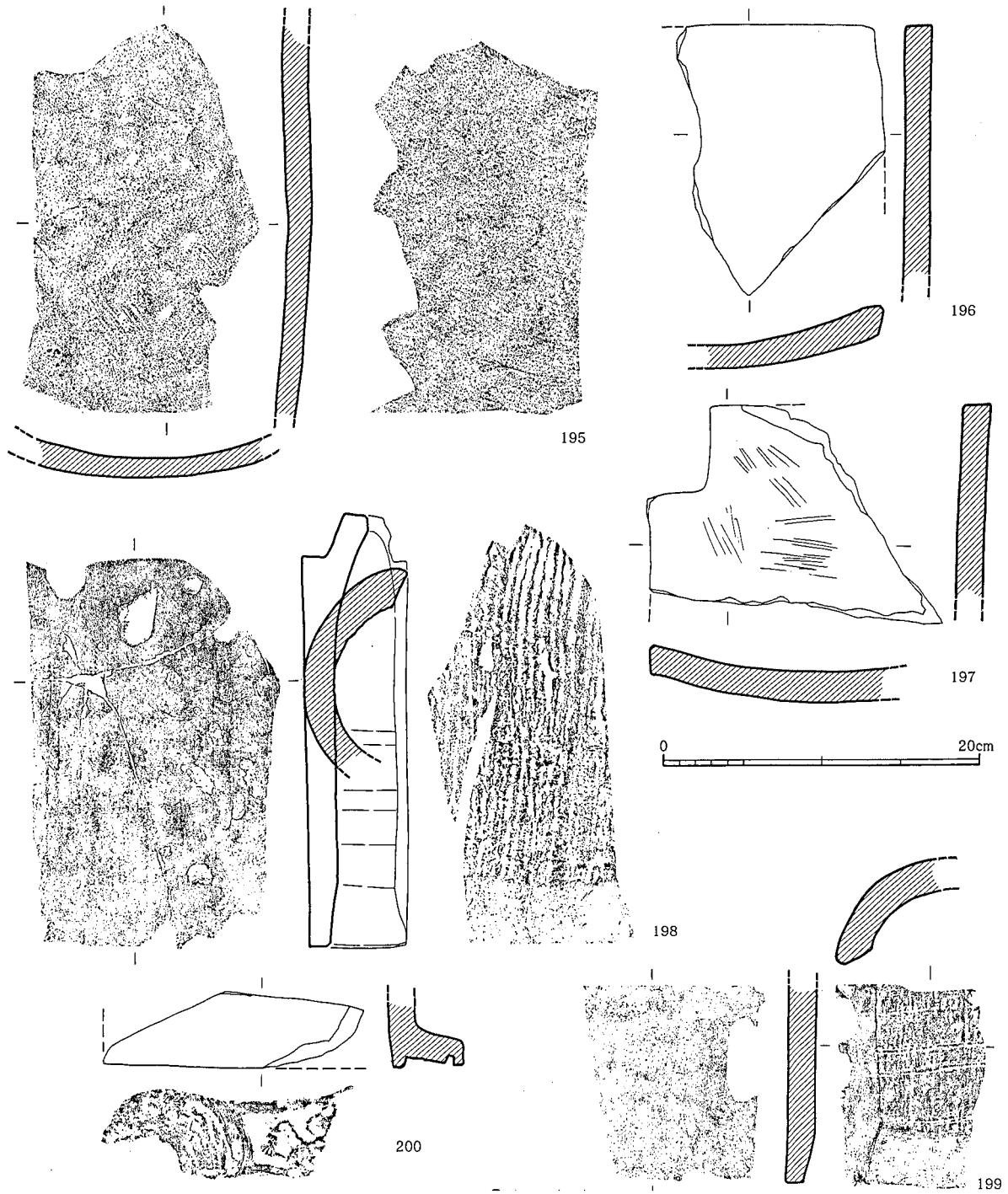
技法を用いる。177は蛇の目凹型高台を持つ。180は角皿。181～183は紅皿。184は蓋付き鉢。底部は平らで口縁部は垂直に伸びる。185～187は鉢。185・186は丸形鉢。185は口縁部内面に雷文帯、186は四方繩文を描く。187は口縁部が外反する。高台は蛇の目凹型高台になる。

188は弥生土器の甕棺。復元口径50.0cm。口縁部は断面三角形となる内外面にハケメを残す。189は土師質土器の小鉢。190は瓦質土器の片口鉢。内面ハケメ。外面はハケメで調整後注口を貼り付けている。191は土師質土器の深鉢または釜。体部は丸く、口縁部が短く直立する。端部はやや肥厚する。192は青磁碗の底部。龍泉窯系。底部は厚く、全面施釉後に畳付けと外底を輪状に削る。188～192は混入品であろう。193は棒状土製品。窯道具か。194は漆器碗。復元口径12.3cm、器高9.3cm。体部外面にケズリ痕が残る。

195～200は瓦。195は土師質の平瓦。焼成は良好で赤褐色を呈する。内外面にタタキ痕を残す。196は平瓦の破片。197は棟瓦。198・199は丸瓦。198は全長26.4cm、残存幅12.5cm。凹面に粗い布目痕を残す。199は広端部の破片。凹面に198よりも細かい布目を残す。200は軒棟瓦の瓦当部分の破片。瓦当を欠く。

12号井戸跡（第25図）

2区北部の西側調査区境で検出した。9号溝を切る。西側は調査区外となるため南北約1.6m、東西0.9mの半円形のプランとなる。調査区壁面が崩落する恐れがあつたため底面は確認でき



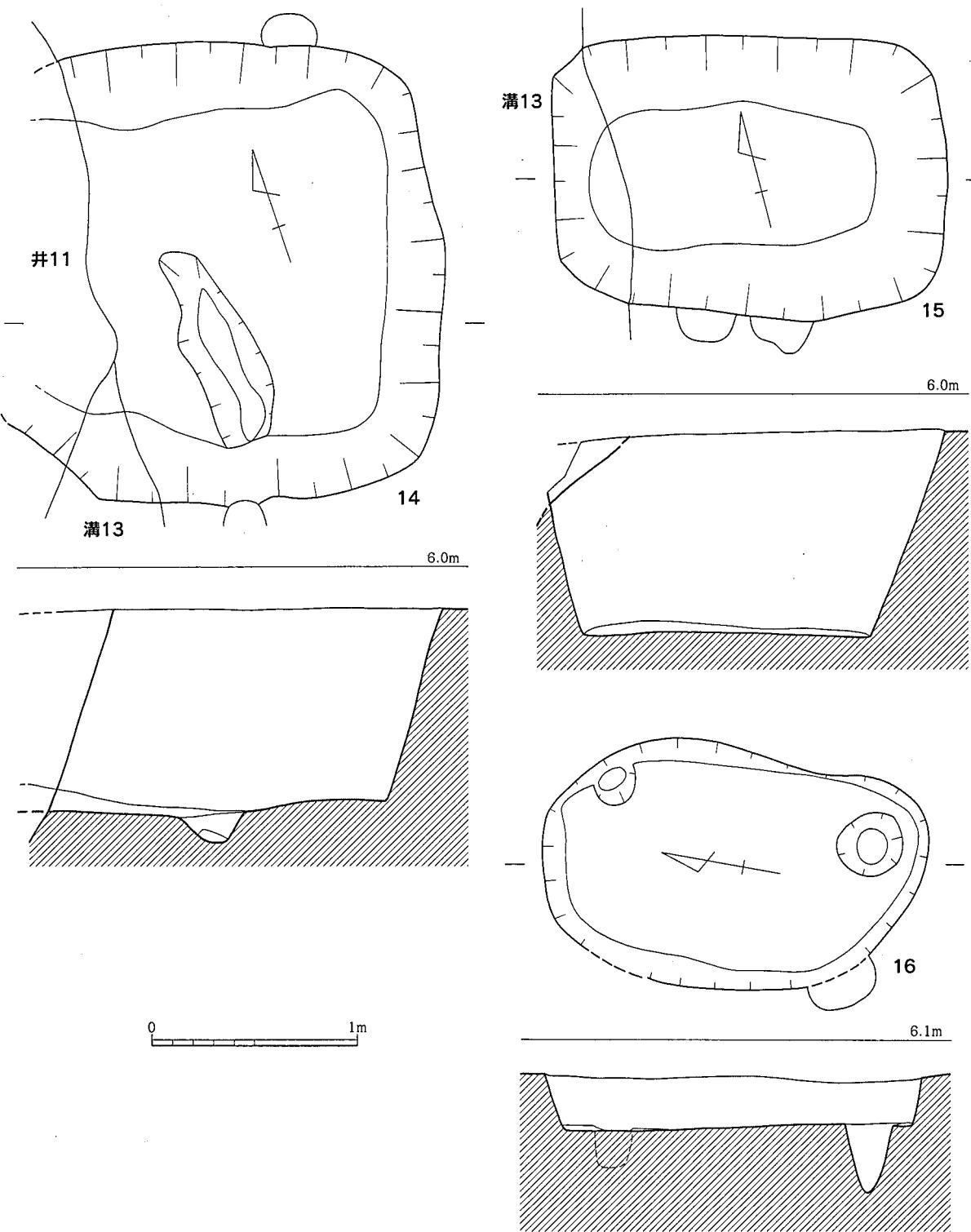
第30図 11号井戸跡出土遺物実測図④ (1/4)

なかつたが、検出面から1.9m以上深くなる。遺物は出土していないが、9号溝を切ることから近世のものであろう。

(3) 土坑

14号土坑 (第31図、図版10)

2区中央の東側、11号井戸跡の東で検出した。11号井戸跡・13号溝に切られる。このため西



第31図 14・15・16号土坑実測図 (1/30)

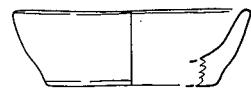
側の上端ラインが失われるが、平面形は南北2.3m×東西約2.3mの方形プランに復元できる。深さは0.9～1.0m。床面は概ね平坦だが、南壁際中央から土坑の中央にかけて溝状の凹みがある。埋土から土師質土器が出土している。

出土遺物（第32図）

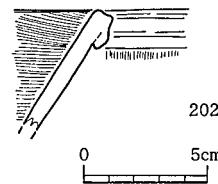
201は土師質土器の小皿。底部を欠く。

15号土坑（第31図、図版10）

2区中央の東側、14号土坑の南隣で検出した。13号溝に切られる。このため西側の上端ラインが失われるが、平面形は南北1.4m×東西約2mの方形プランに復元できる。深さは0.9～1.0m。床面は概ね平坦である。遺物は出土していないが13号溝に切られることから、16世紀後半以前の遺構。



201



202

16号土坑（第32図・図版10）

2区南部の東側、15号土坑の南4mで検出した。南北1.9m×東西1.2mの楕円形プランで、深さは25～30cmを測る。床面は概ね平坦で、南北にそれぞれピットがある。埋土から土師質土器が出土している。

出土遺物（第32図）

202は土師質土器の鍋口縁部。端部が肥厚して玉縁状をなす。

第32図 14・16号土坑

出土遺物実測図（1/30）

（4）溝

8号溝（第33図、図版11）

2区北部で検出した。10号井戸跡・9・13号溝に切られる。東西方向に走る溝で、西側は9号溝に切られ、東側は調査区外に延びる。検出した長さは8.5mだが、このうち中央部分の約2.5mは10号井戸跡・13号溝により失われる。幅は70～140cm、深さは最も深いところで約50cmを測る。西側の10号井戸跡と9号溝に挟まれた部分では溝が2筋に分かれることが土層観察で確認できたが、掘削時には認識できず掘りすぎてしまった。出土遺物から8～9世紀に属する。

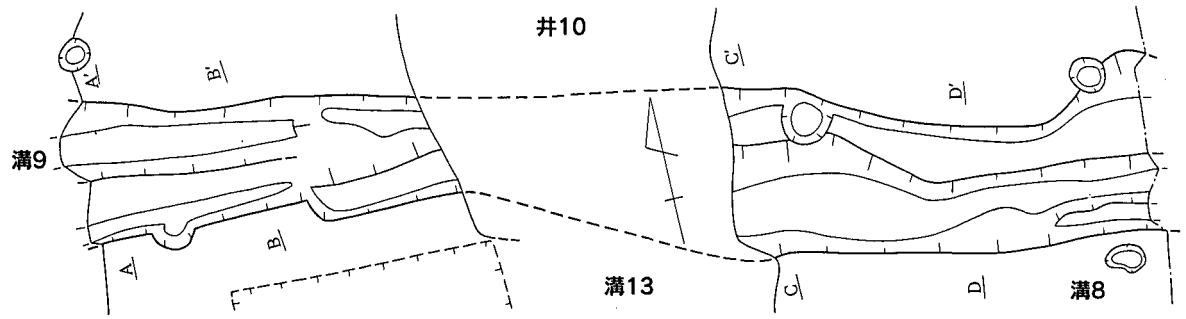
出土遺物（第34図）

203～208は土師器。このうち203～206は壊。203は底部～体部下位の破片。外面と底部内面はナデ、体部内面ヨコナデ。204は口径13.0cm、器高は3.5cm。体底部とも内外面ナデで仕上がる。205は底部を欠くが、口径13.0cm、器高4.1cmを測る。体部内外面ナデ。206は高台が付く。体部内外面ナデ、高台の内外面はヨコナデ。207は高壊の壊部。体部は深く、体・底部境の外面に1条の沈線が廻る。内外面ナデ調整。208は同じく脚部。裾端部で屈曲して外反する。209は須恵器。台付鉢か。口縁部と脚部を欠く。底部外面に擬口縁が露出する。底部内外面ナデ、体部内外面は回転ナデ。

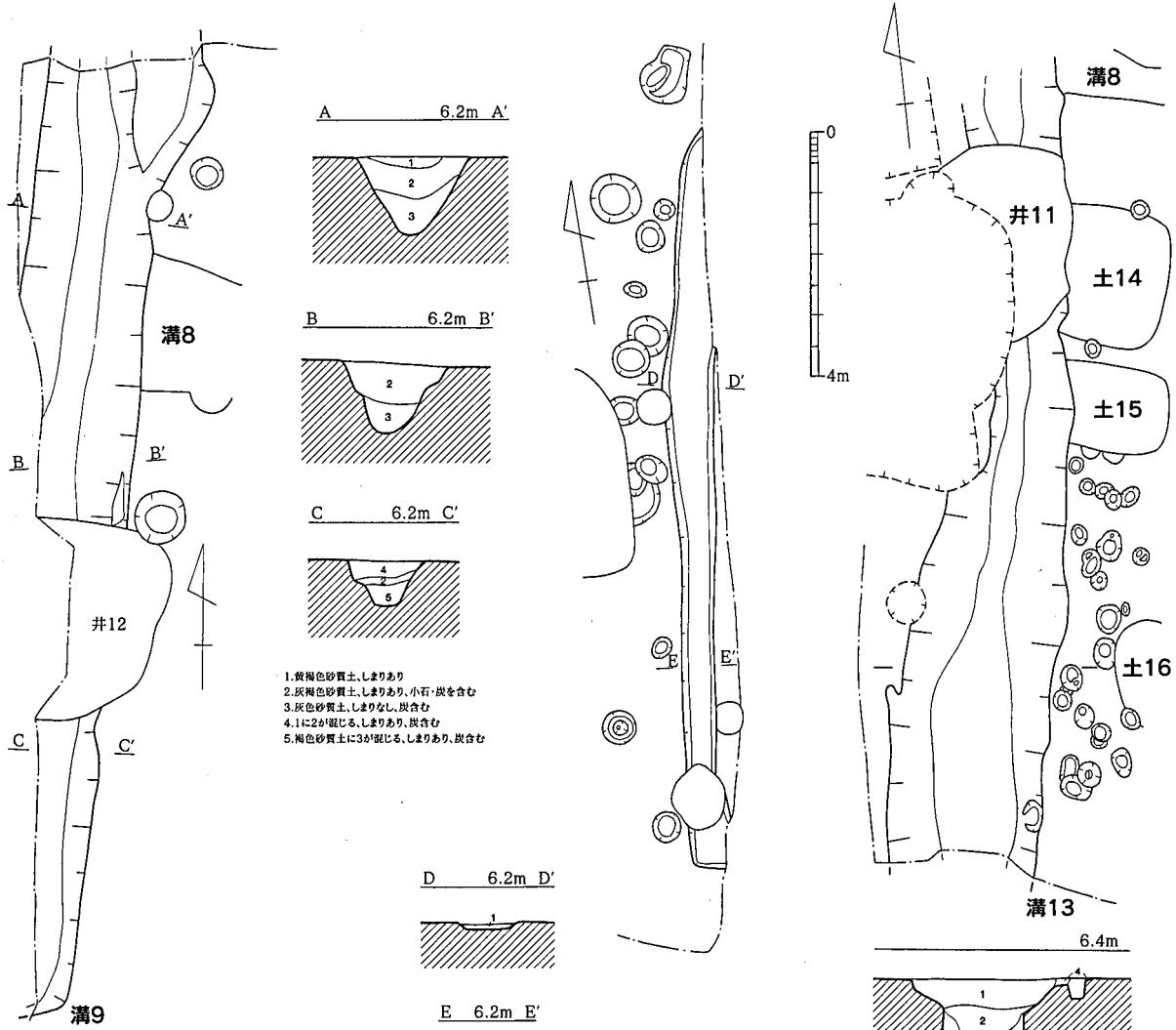
9号溝（第33図、図版11）

2区北西部の西側調査区境で検出した。8号溝を切り、12号井戸跡・15-1・15-2号溝に切られる。南北方向に走る溝で、北端は3区南西隅で検出されている。そこからさらに西に廻る可能性がある。南側は2区西壁にぶつかり調査区外に延びる。2区で検出した長さは約8m、3区まで含めると約13mになる。状態の良いところで幅90cm、深さ63cmを測る。出土遺物から16世紀後半に属する。

出土遺物（第34図、図版19）

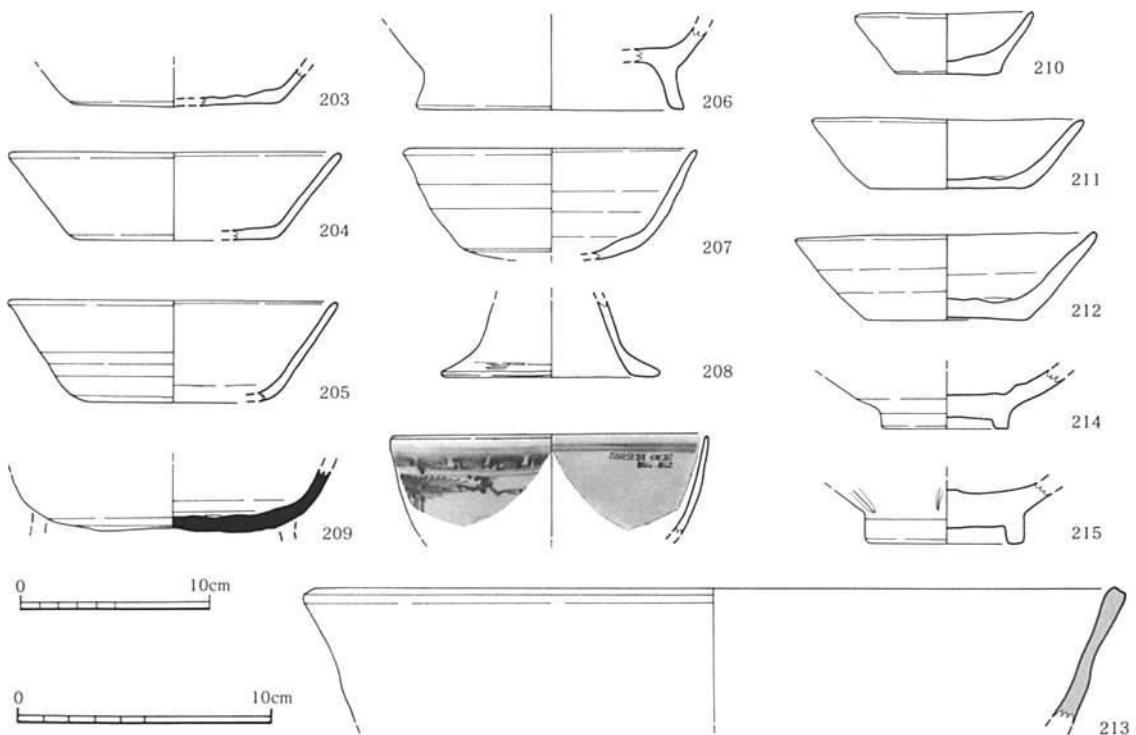


- 1.灰褐色砂質土、しまりあり、匂い・遺物含む
- 2.褐灰色砂質土、しまりあり、匂い
- 3.褐灰色砂質土、2より明るいしまりあり、ビット埋土
- 4.黒褐色砂質土、しまりあり、ビット埋土
- 5.黄灰色砂質土、しまりあり
- 6.褐灰色砂質土、マンガン多く含む、しまりあり



- 1.灰褐色砂質土、しまりあり、石・炭・遺物を多く含む
- 2.暗灰色粘質土、しまりなし、遺物を含む
- 3.褐色粘質土、しまりなし、炭を少し含む
- 4.褐色砂質土、しまりあり、炭・遺物を含む=南側包含層

第33図 8・9・13・14号溝実測図 (1/60、13号溝は1/120)



第34図 8・9号溝出土遺物実測図 (1/3、213は1/4)

210～212は土師質土器。いずれも糸切り痕を残す。210は小皿。211・212は壊。211は口径10cm、器高2.8cm。212は口径12cm、器高3.5cm。213は瓦質土器の鍋。口縁が外反する鉢形で、内外面ナデ。外面にスヌが付着する。214・215は青磁碗の底部。龍泉窯系。214は内面見込みと外面の疊付より内側の外底が露胎する。251は外面に細線連弁文を描く。外底のみ露胎。216は青花碗の口縁部。やや小振りな碗で、口縁部は直線的に伸びる。口縁部内面に雷文帯、体部内面にも文様を描く。

13号溝 (第33図、図版12)

2区の中央を南北に縦貫するように検出した。14・15号土坑を切り、10・11号井戸跡に切られる。溝の北端は10号井戸跡で失われ、南側は調査区外に延びる。検出した長さは約13m、状態の良いところで幅2.3m、深さ1.1mを測る。東西方向に走る溝で、東端から長さ65cmで調査区西壁にぶつかり調査区外に延びる。幅は70～80cm、深さは30～35cmを測る。出土遺物から16世紀後半に属する。

出土遺物 (第35・36図、図版19・20)

217～231は土師質土器。217～223は小皿。いずれも糸切り痕を残す。219は口径7.5cm、器高2.05cm。220は口径7.6cm、器高2.8cm。276は口径11.5cm、器高3.0cm。224～227は壊。糸切り痕を残す。225は口径11.4cm、器高3.4cm。227は11.2cm、器高5.05cm。228は浅鉢。口径20.2cm、器高5.5cm、底径14.0cm。底部外面は糸切り痕。229～231は鍋口縁部の破片。端部を玉縁状に作る。

232～243は瓦質土器、このうち232～238は摺鉢。232は片口。232～236は体部が直線的に

伸び、口縁端部が外向きに作られる。237・238は体部下位～底部。237は底部に摺目が無く、体部から描かれるが、238は底部から摺目が見られる。239・240は釜。239はやや扁平な体部で、体部中央に鍔が廻る。外面は全体的にハケメで整えられ、鍔周辺にナデや指圧痕が残る。内面は体部下半と口縁部にハケメが、体部上半にナデの痕が残る。外面肩部に刻み目のある「く」の字形のスタンプが廻る。240は鍔部の破片。241は釜または深鉢。肩部がやや張り、口縁部がやや肥厚して直立する。242・243は火鉢。242は体部が外傾して伸び、口縁端部が外にやや肥厚して上面が水平に作られる。外面の口縁部下に鳥形文のスタンプが配される。243は体部が直立し、口縁端部は外に突出する。外面の口縁部下に菊花文のスタンプが、さらに突帯を挟んだ下に櫛目状のスタンプが間隔を空けて廻る。244～246は青磁碗。いずれも底部が厚い。龍泉窯系。244は小碗で復元口径11.2cm、器高5.5cm。内面見込みと畳付けより内側は露胎。高台の外面の畠付け部分は釉剥ぎされた痕が残る。245は破片で、外底のみ露胎。246は内面に劃花文を描く。全面施釉後に外底を輪状に削る。247～250は須恵器。混入品。247は高坏の脚部。内面にシボリ痕を残す。248・249は短頸壺。いずれも口縁部は短く外反する。内面ヨコハケ、外面は格子目タタキ。250は甕の底部破片。内面平行タタキ、外面は格子目タタキの痕。内面に人為的に空けられたと思われる径3mm程の孔がある。孔は外面まで貫通していない。251は滑石製石鍋の底部。内外面にケズリの痕がある。

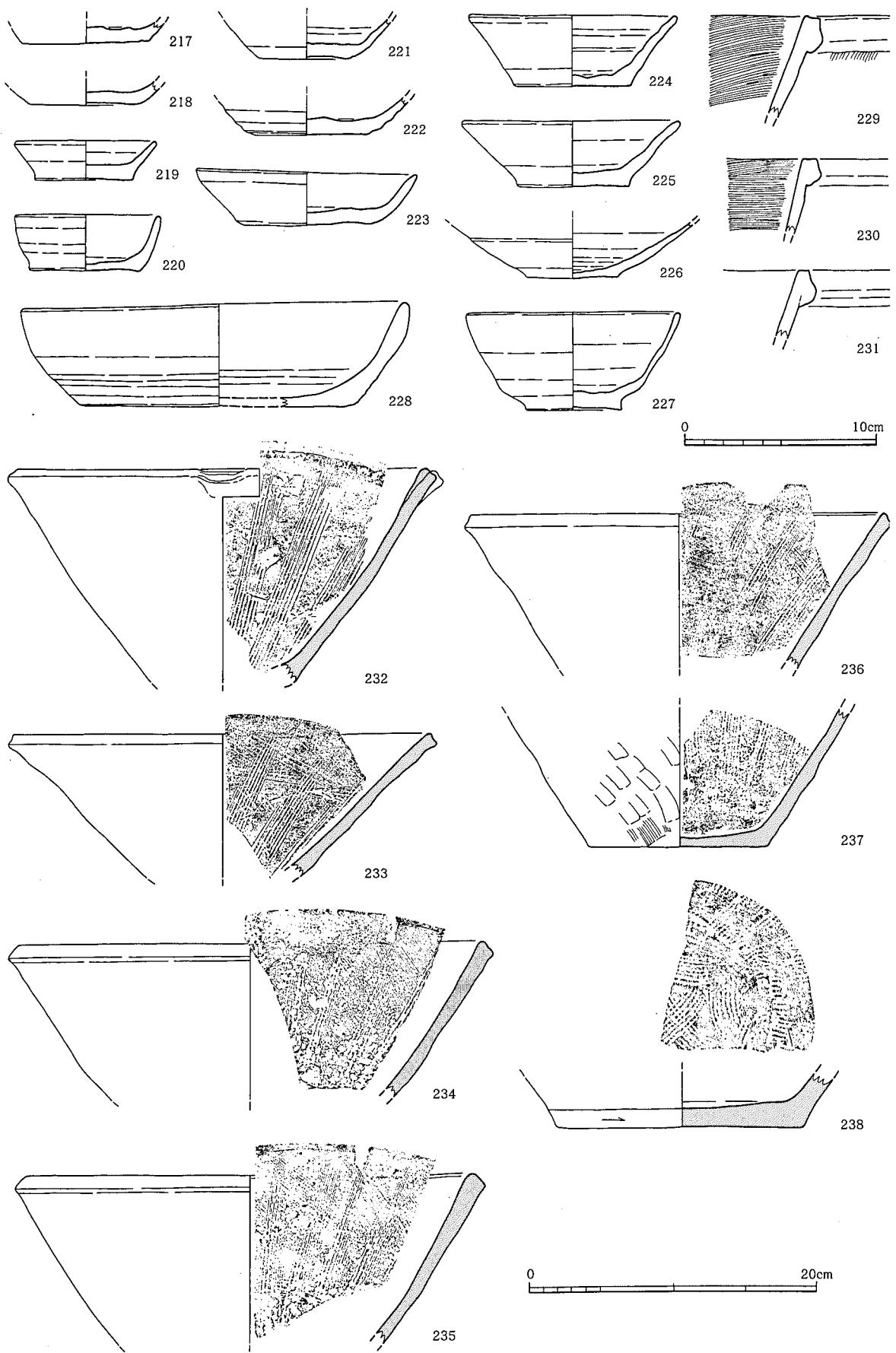
14号溝（第33図、図版10）

2区南東部の東側調査区境、16号土坑の東隣で検出した。長さは南北方向に約5.5mにわたり、南端部は東にほぼ直角に折れて調査区外へ延びる。北端部は東半分が調査区外となるが、同じく東へ廻る可能性がある。幅20～30cm、深さ2～3cmと細小であり、雨落ち溝の可能性がある。埋土は炭を含む灰色砂質土。遺物は出土していない。

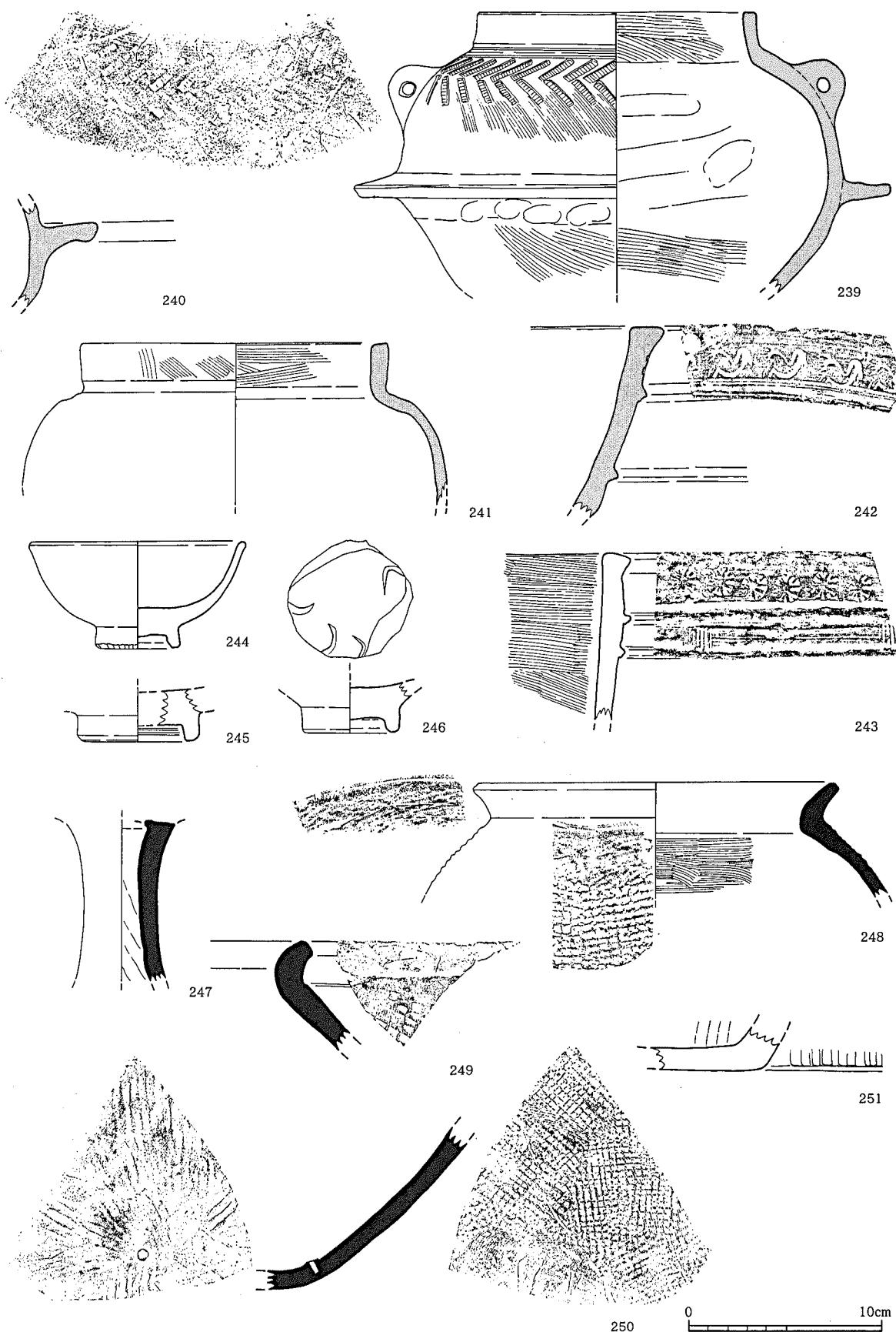
（5）2区その他の出土遺物（第37図・図版20）

252～269は2区南壁付近の13号溝東側に浅く広がる褐色砂質土の包含層から出土した物。252～263・265・266は土師質土器。252～262は小皿。257は摩滅するが、ほかはいずれも糸切り痕がみられる。255は口径7.2cm、器高1.7cm。257は底部に穿孔がある。259は口径9.4cm、器高2.5cm。260は口径10.9cm、器高1.7cm。263は鉢。口径20.5cm、器高4.8cm、底径13.0cm。底部外面は摩滅する。265・266は釜の体部破片。265は外面ナデ、内面ヨコハケで仕上がる。266は内外面ナデで整えられる。264は瓦質土器の鍋底部。内外面ハケメ。外面にススが付く。267・268は青磁。267は越州窯系の碗の底部。幅が広く低い輪状高台を持つ。高台部外側を斜めにカットして高台を作り出す。全面施釉後、畠付の釉を削る。見込みに目土跡が残る。268は龍泉窯系の碗底部。畠付けから内側の外底は露胎する。269は滑石製石鍋の口縁部。口縁直下に削り出された鍔が廻る。鍔は断面が不等辺の台形。口縁部外面にノミ状工具痕が残る。

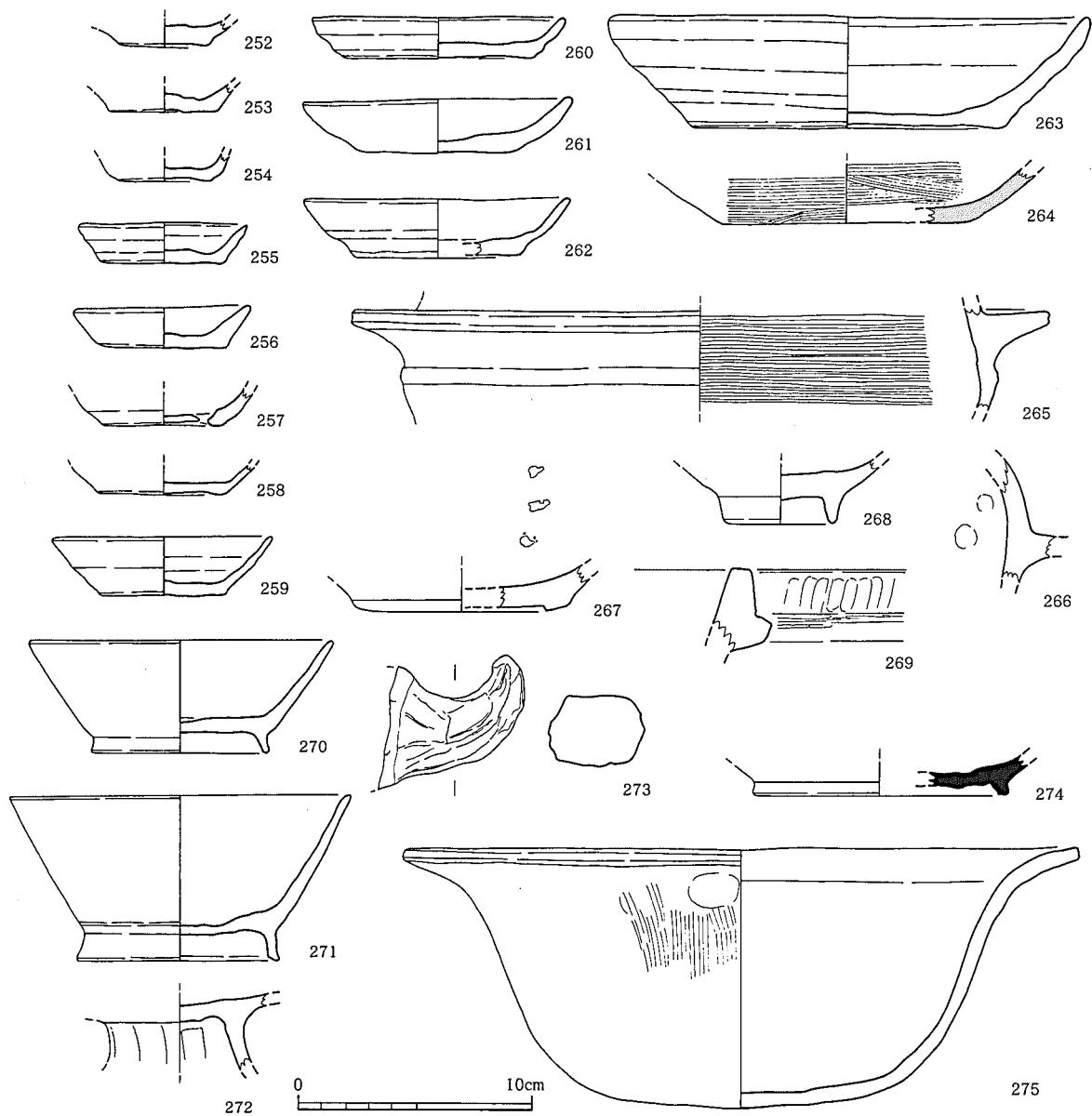
270～311は8号溝周辺に浅く広がる褐色砂質土の包含層から出土した物。270～273・275は土師器。270・271は高台を持つ坏。270は口径12.9cm、器高4.8cm。外面ヨコナデ、他は摩滅する。271は口径14.6cm、器高7.0cm。体部内外面はヨコナデ、底部は内外面ナデで仕上がる。272は高坏の坏部と脚部の接合部。273は甕の把手。275は土師器の鉢。丸底で口縁部が外反する。



第35図 13号溝出土遺物実測図① (1/3、232～237は1/4)



第36図 13号溝出土遺物実測図② (1/3)



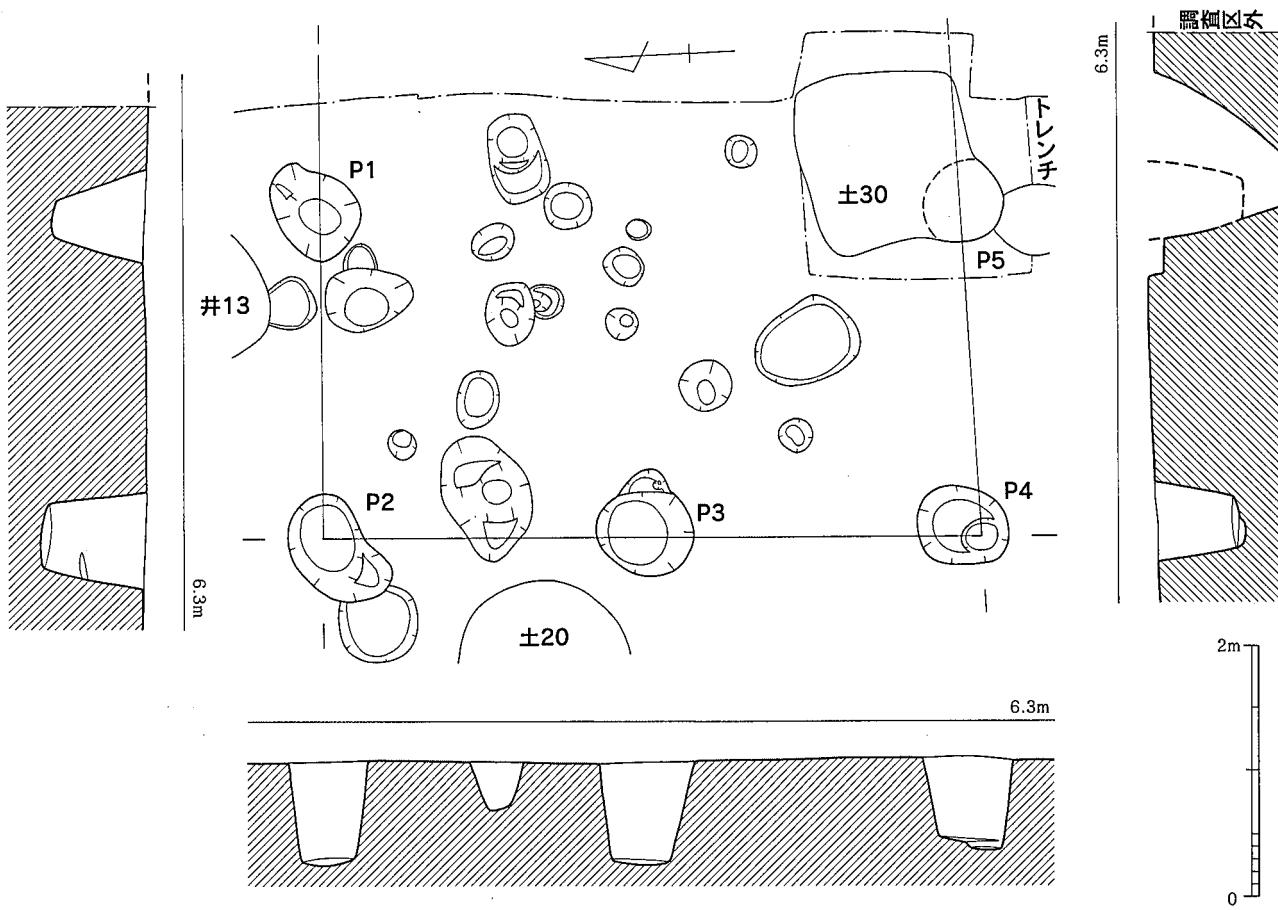
第37図 2区包含層出土遺物実測図 (1/3)

内面ナデ、外面は体部に一部ハケメを残すが概ねナデである。274は須恵器の坏身底部。高台を持つタイプ。底部は平らで、外面の端に低く断面方形の高台が付く。

(6) 小結

2区では、本調査地の遺構としては唯一古代の遺構が確認された。包含層からも8世紀の遺物が出土しており、周辺に遺跡が存在する可能性がある。この後、中世後期まで遺構は認められず、15世紀になると集落が形成されるようになる。1区と同じく2区でもこの時期の遺構が最も多く、土坑3基と溝2条を検出した。近世前期以降になると遺構は疎らになるが、10号井戸跡からは多量の陶磁器が出土した。

4) 3区の検出遺構と出土遺物



第38図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

(1) 3区の概要

3区は、2区の北側、山門前田遺跡の調査区（0区）南端から約16m南に位置する。東西10m、南北16mの方形の調査区となる。調査の結果、掘立柱建物跡1棟、井戸跡2基、土坑4基、溝3条を検出した。このうち掘立柱建物跡は南北2間、東西は2間以上で調査区の東側に延びる。また溝1条は3区の北壁・西壁に沿うように「L」字状に巡る区画溝となる。

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (第38図、図版12)

3区南西部で検出した。5つのピットが「コ」の字型に並び、北東側にあるピットから反時計回りにP1～P5とした。P5は当初検出できなかつたため周囲を一段下げるところ、30号土坑に大きく切られながらも一部上端のラインが検出できた。建物跡は南北2間、東西は2間以上で東側の調査区外に続く。各柱間の心々距離は約2.5mを測る。柱穴のプランは概ね径30～40cm、深さ35～40cm。P2とP3から遺物が出土している。出土遺物から16世紀代に属する。

出土遺物 (第39図、図版20)

276～278は土師質土器。276・277は小皿。276は全体的に摩滅する。277は糸切り痕残す。278は鍋の口縁部。口縁端部外面を貼り付けにより肥厚させ玉縁状に作る。内面ヨコハケ。279は青磁碗の口縁部。280～282は管状土錐。280は長さ4.3cm、最大幅1.2cm、孔径0.2cm、重さ4.3g。

281は長さ3.8cm、最大幅0.9cm、孔径0.2cm、重さ3.6g。282は上下とも端部を欠き、残存長3.9cm、最大幅1.3cm、孔径0.3cm、重さ4.7g。276～280、282はP2から、281はP3から出土した。

(3) 井戸跡

13号井戸跡 (第40図、図版13)

3区中央東側、1号掘立柱建物跡の北1mで検出した。素掘りの井戸。南北約1.7m×東西約1.6mの不整な方形プランを持つ。浅いところで数ヶ所の小さなテラスを持つが、深さ約1.1mで比較的広いテラスを作る。さらに中央部が円形に深く下がって、検出面から深さ約2mまで掘削したが、底面は確認できなかった。湧水のため掘削作業は難航した。出土遺物から16世紀代に属する。

出土遺物 (第41図)

283～289は土師質土器。283～286は小皿。286は底部を欠くが、ほかはいずれも底部外面糸切りである。283は口径6.2cm、器高2.1cm。284は口径7.0cm、器高1.9cm。287・288は鍋の口縁部。287は素口縁で、内外面ハケメ。288は外面が肥厚して玉縁状になる。内面ハケメ。289は瓦質土器の火鉢。体部下位の破片で、外面に1条の突帶が廻る。290は青磁碗の口縁部破片。龍泉窯系。291は輸入白磁皿の口縁部。口縁部はやや外反する。口縁端部は口禿げし、体部外面の下位が露胎する。292は須恵器の坏身底部。高台が付くタイプ。

14号井戸跡 (第40図、図版13)

3区北部の中央やや西で検出した。素掘りの井戸。西半分の上位を試掘トレンチのため欠損する。平面プランは約1m×約1mの円形に復元できる。壁面にはテラスを持たない。検出面から約1.9mまで掘削したが、湧水のため底面は確認できなかった。出土遺物から15世紀に遡る可能性がある。

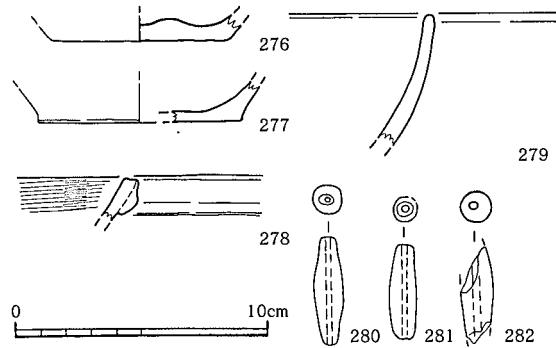
出土遺物 (第41図、図版20)

293・294は瓦質土器の鍋口縁部。いずれも素口縁。293は内面ハケメ、外面はハケメのちナデで指圧痕を残す。294は内外面ナデ。295は挽き臼の上臼。残存1/8程の破片である。厚さ7.4cm、重さ1.8kg。摺目の幅は2～4mm、間隔は0.4～0.8cmで、分画数は不明である。心棒孔やものくばりが確認できる。凝灰岩製。

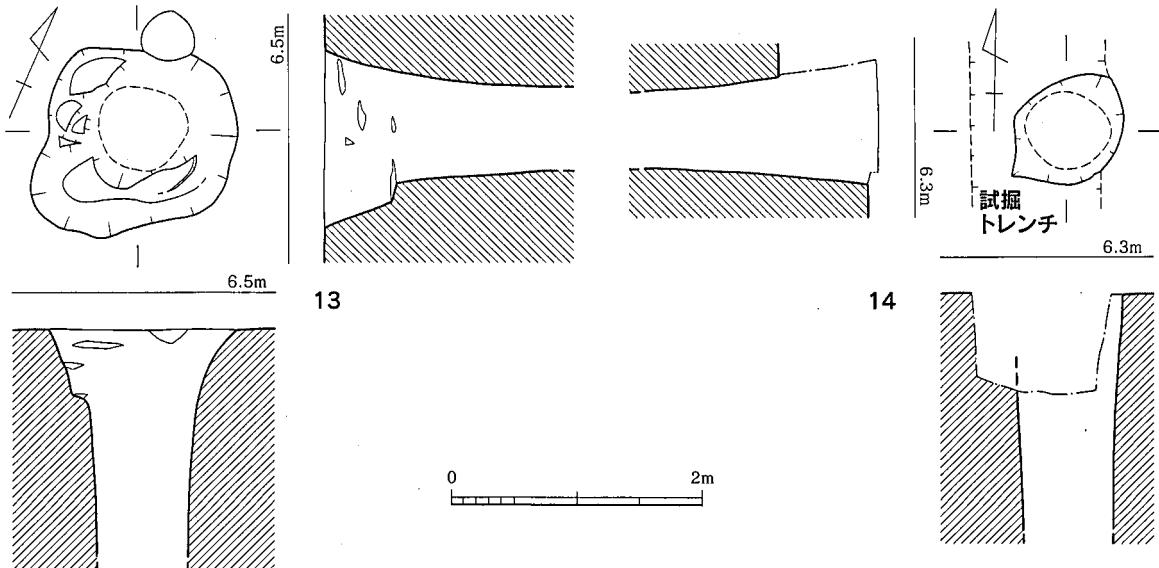
(4) 土坑

20号土坑 (第42図、図版14)

3区の中央やや南、1号掘立柱建物跡の西1mで検出した。南北1.4m×東西1.6の楕円形プランを呈し、床面は中央部が低い摺鉢状となる。北西隅にピットを持つ。出土遺物から16世紀後半以降に属する。



第39図 1号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3)



第40図 13・14号井戸跡実測図 (1/60)

出土遺物 (第41図)

296～298は土師質土器である。296は小皿。底部外面は摩滅する。287は口縁部を欠くため小皿・壺の別は不明である。底部外面は摩滅する。298は壺口縁部の破片。復元口径13.2cm。299は土師器の高壺脚部。内外面ナデ。300は瓦質土器の釜鍔部。301は龍泉窯系の青磁碗。畠付けのみ釉剥ぎする。

22号土坑 (第42図、図版14)

3区の東部、13号井戸跡の北1.5mで検出した。23号土坑に切られる。平面形は長軸約110cm、短軸85cmの不整形プランで、深さは85cm、平坦な床面を持つ。出土遺物から16世紀後半に属する。

出土遺物 (第41図)

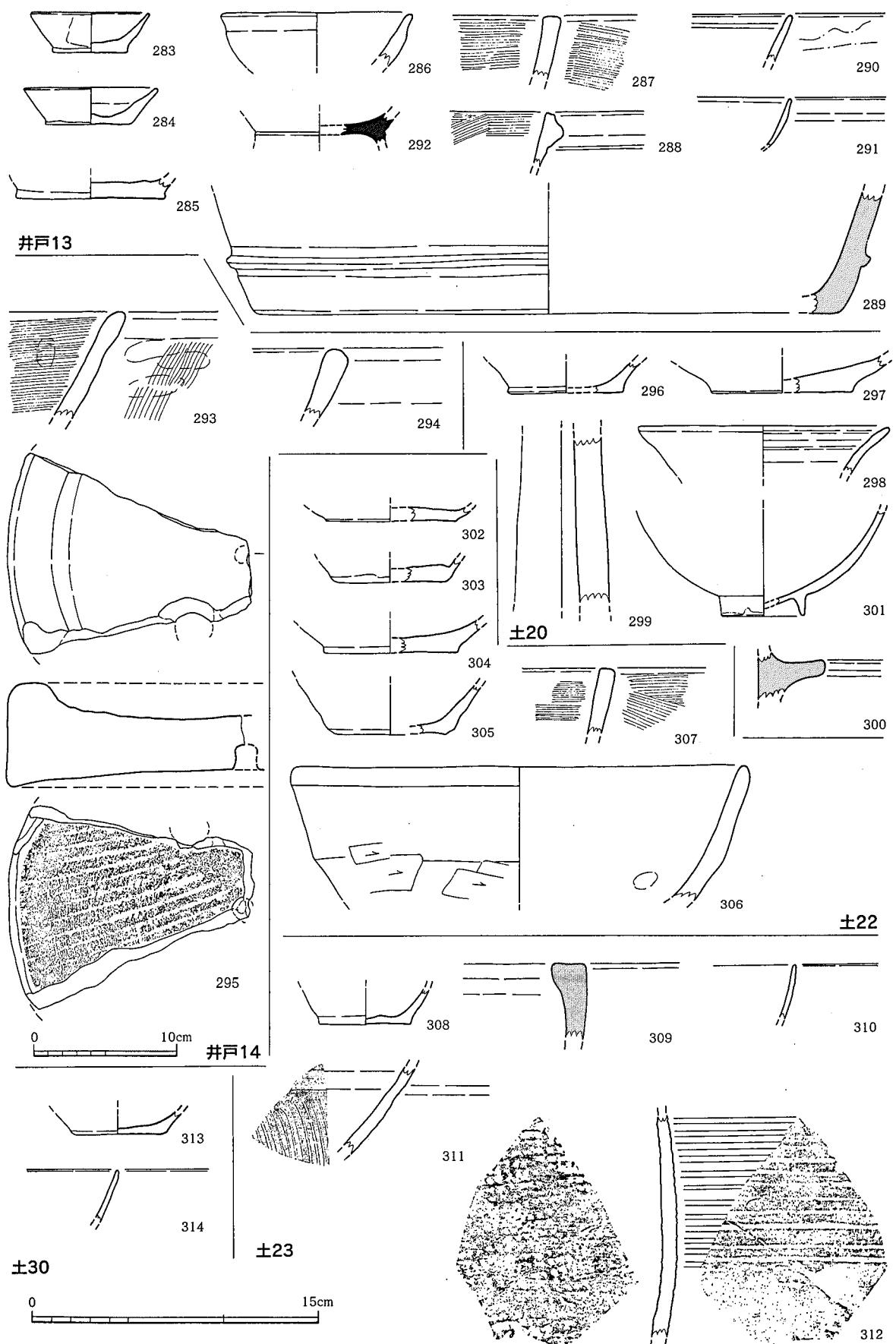
302～307は土師質土器。302・303は小皿。304は口縁部を欠き小皿・壺の別は不明。305は壺である。302・305は糸切り痕がみえ、303・304は摩滅する。306は鉢。口径23.6cm。口縁部は素口縁となる。内面と外面上位はナデ、体部外面の下位はヘラケズリで整えられる。307は鍋の口縁部破片。素口縁で端部上面は水平に近く作られる。内外面ハケメで仕上がる。

23号土坑 (第42図、図版14)

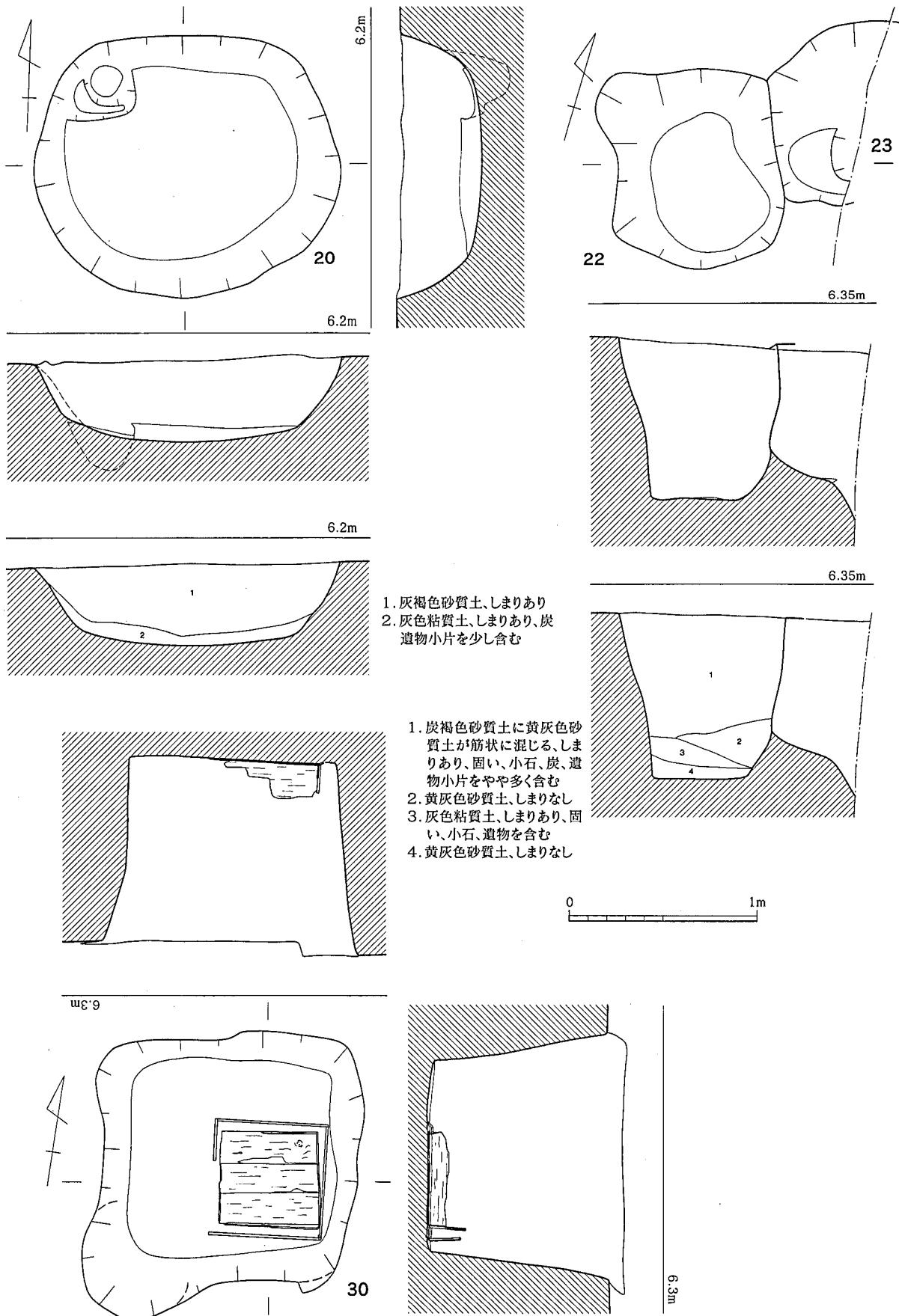
3区東側調査区境のやや北側で検出した。22号土坑を切る。当初22号土坑との先後関係を誤認したため、西側の上端ラインを落としてしまった。さらに東半分は調査区外となるため、平面は現状で南北約100cm、東西55cmの不整形となる。検出面から深さ60～70cmにテラスが付き、さらに東側が深くなるが、床面は調査区外で確認できなかった。出土遺物から18世紀以降に属する。

出土遺物 (第41図)

308は土師質土器の小壺。糸切り痕を残す。309は瓦質土器の火鉢口縁部。口縁端部の内側が



第41図 13・14号井戸跡・20・22・23・30号土坑出土遺物実測図 (1/3)



第42図 20・22・23・30号土坑実測図 (1/30)

突出する。310は肥前系磁器の染付碗口縁部。311は唐津系陶器の摺鉢。312は陶器の甕体部破片。外面に鉄釉を施す。外面に11条以上の沈線が廻り、内面には格子目のタタキ痕が残る。

30号土坑（第42図、図版15）

3区南東部の東側調査区境で検出した。1号掘立柱建物跡P5の検出のためにサブトレンチを設けたところ、P5を切って検出できた。南北1.3m×東西1.3mの方形プランで、深さは約1.1m。平坦な床面には薄い板で作られた箱と、箱の周囲に断面1cm角の細い棒で作られた木枠設けられていた。箱・枠とも上部が失われていた。改葬を受けた墓坑であろうか。土師質土器の小皿と肥前系の磁器碗が出土している。

出土遺物（第41図）

313は土師質土器の小皿底部。全体的に摩滅する。314は肥前系磁器の碗口縁部破片。

（5）溝

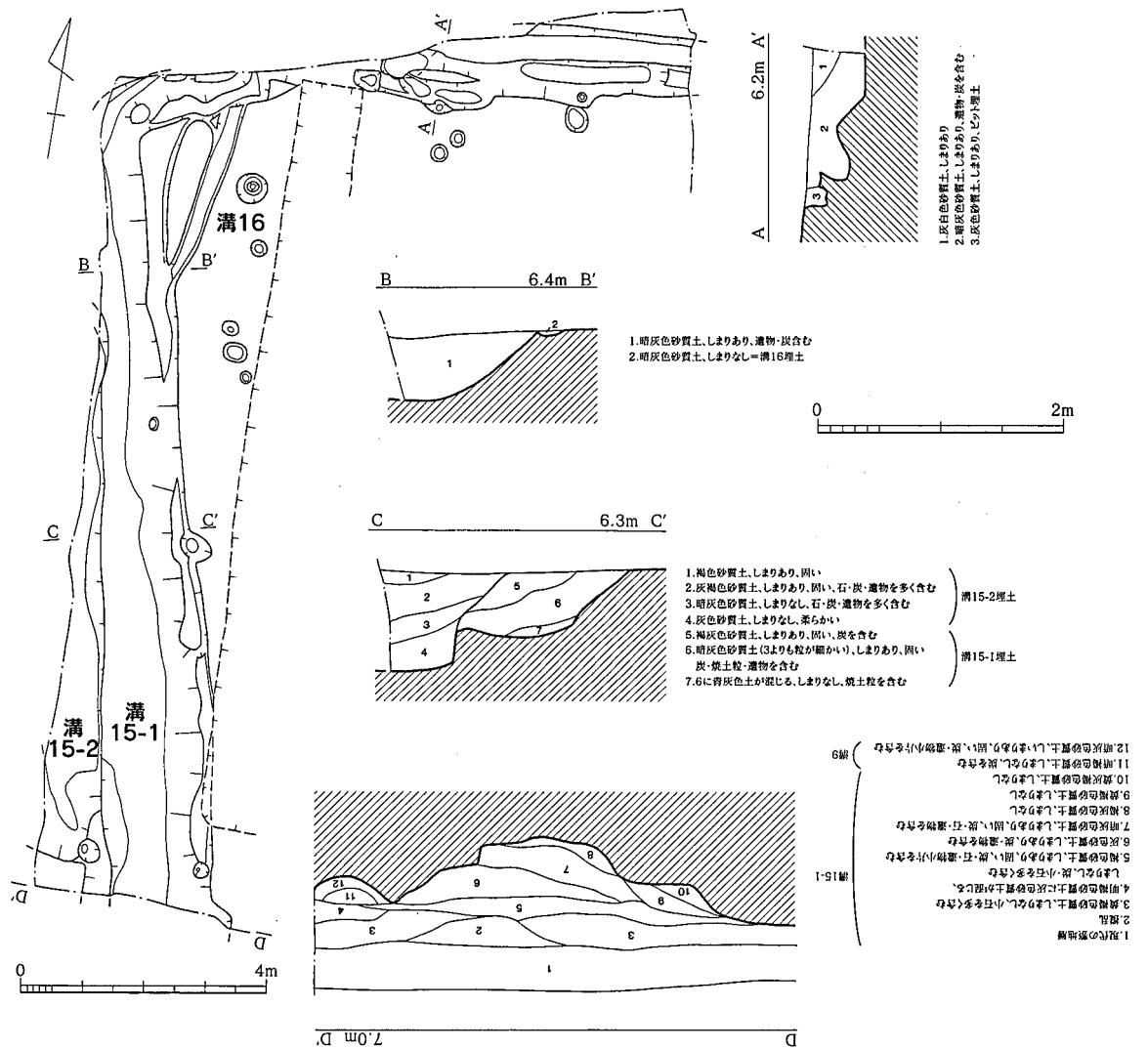
15-1号溝（第43図、図版2・15）

3区の北壁沿いから西壁沿いの全体にわたって「L」字形に検出した。区画溝と思われる。東側と南側はさらに調査区外に延びる。9・16号溝を切り、15-2号溝に切られる。北側の東西方向では残存状況の良いところで幅0.5～0.6m、深さ62cmを測り、北側にテラスが付く。西側の南北方向は西岸側の大部分が15-2号溝で失われるが、同じく状態の良いところで幅3.2m、深さ80cmを測り、東側にテラスが付く。出土遺物から16世紀後半～17世紀前半に属する。

出土遺物（第44～47図、図版21・22）

315～356は土師質土器の小皿・壺。底部を欠く物や摩滅する物もあるが、ほぼ糸切り痕を残す。317は口径6.0cm、器高2.0cm。319は口径6.6cm、器高1.5cm。322は口径6.8cm、器高1.9cm。325は口径7.5cm、器高1.7cm。326は口径6.8cm、器高1.7cm、328は口径8.4cm、器高1.6cm。330は口径7.2cm、器高2.1cm。332は口径7.0cm、器高2.3cm。333は口径7.8cm、器高2.3cm。341は口径9.8cm、器高3.9cm、342は口径11.0cm、器高3.8cm。344は口径11.5cm、器高3.5cm。349は口径11.0cm、器高4.2cm。350は口径12.6cm、器高2.8cm。353は口径12.8cm、器高3.8cm、354は口径12.8cm、器高4.0cm。355は口径14.0cm、器高4.7cm。356は底径15.6cm。357～372も土師質土器で357～359は鉢。357は口径24.0cm、器高6.4cm、底径13.2cm。体部内外面ハケメのちナデで仕上がる。底部外面に板圧痕が残る。358は口径20.0cm。同じく体部内外面ハケメのちナデ。359は口縁部が内湾して端部上面が水平に作られる。口径21.6cm。360～370は鍋。360から369は口縁部が外に肥厚して玉縁状になる。361は体部が直線的に伸びる。361・362・368・369は内外面ハケメ。360・364・366・367は内面ハケメ、外面ナデ。363・365は内外面ナデで仕上がる。370は素口縁の鍋。口縁上面はやや外向きで凹む。内面ハケメ外面ナデ。371～372は摺鉢。371は片口の摺鉢。372は体部下位の破片。底部近くと破片の上部に摺目が残る。

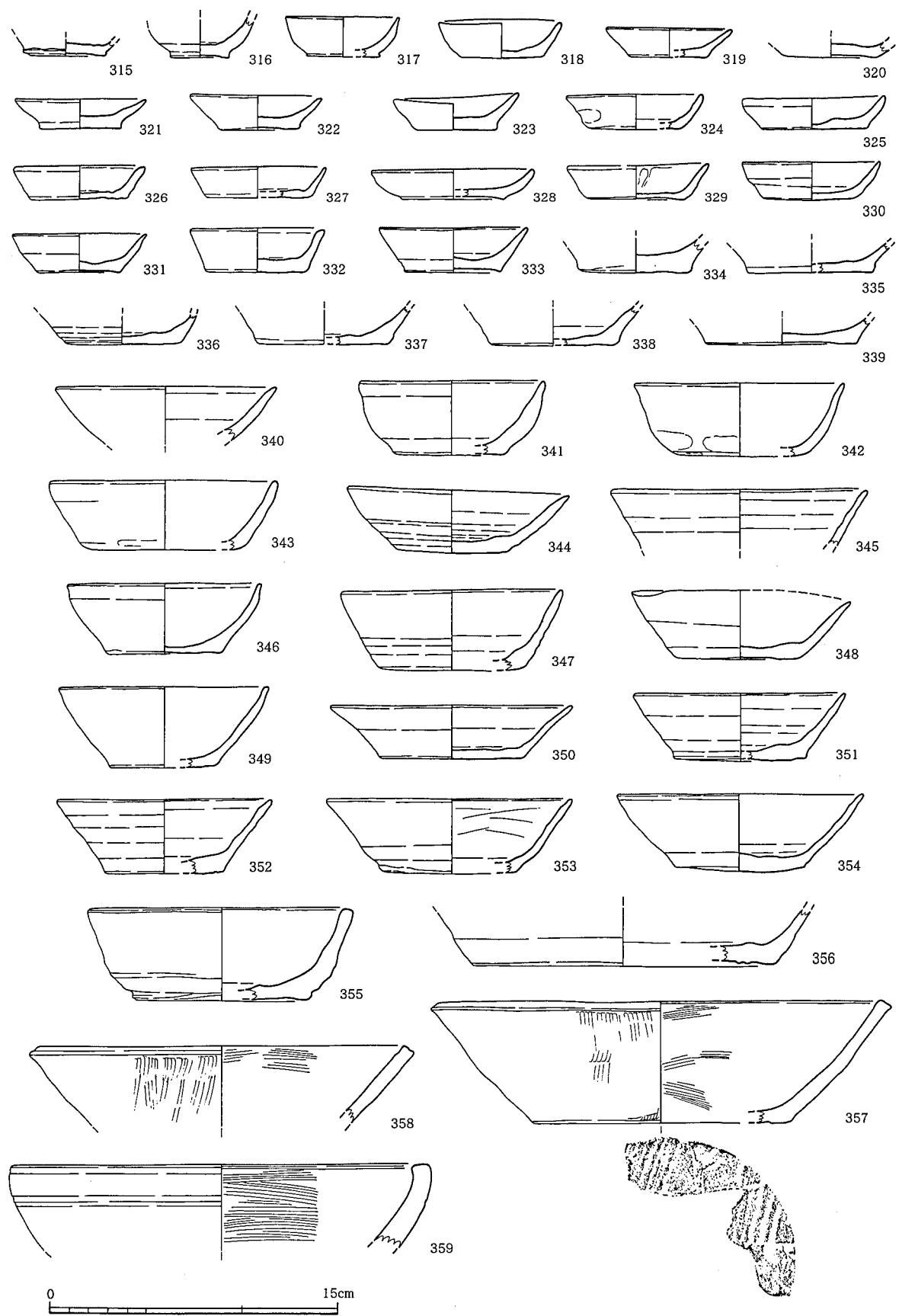
373～389は瓦質土器で、373～377は摺鉢。373は体部の破片。8条の摺目が放射状に描かれる。374・375は片口の口縁部。376も口縁部の破片。いずれも端部は外向きに作られる。377は体部下位～底部。6～7条の摺目が放射状に伸びている。378～383は火鉢。378は小型のもので、口径17.6cm。端部は内側が突出する。外面の口縁部下に斜め格子目状のスタンプが密に



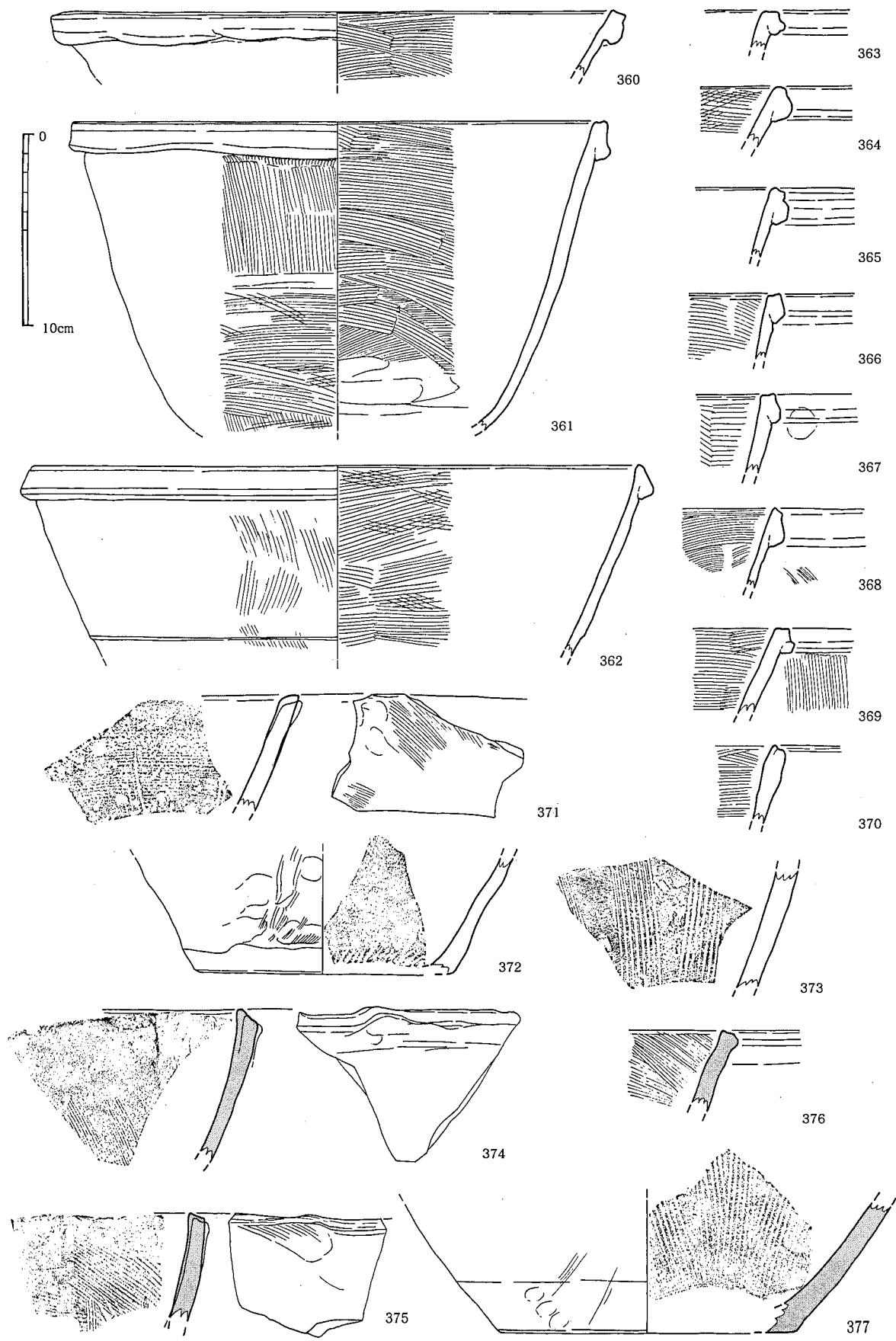
第43図 15-1・15-2・16号溝実測図 (1/120、土層図は1/60)

配される。379は体部がやや外傾して伸び、端部が内外に突出しない。外面口縁部下に菊花文、さらに突帯を挟んだ下に方形の重圏文状のスタンプが廻る。380は体部が外傾して伸び、口縁端部が外にやや肥厚して作られる。外面の口縁部下に鳥形文のスタンプが配される。242と同じスタンプである。381は口縁短部外面を貼り付けにより肥厚させる。口縁部外面下に「Y」字状のスタンプが廻る。382は体部の破片。2条の突帯の間に櫛形文のスタンプが密に配される。383も体部の破片。外面に2条の突帯が付く。内面はハケメ、突帯の下はハケメのちミガキ。384は鉢の口縁部破片。口縁端部は内に折れるように突出する。内部外面は細かい格子目タタキ、口縁部と内面はヨコナデで仕上がる。385は植木鉢の底部。底部は平らで中心に孔が空く。体・底部境の外面3ヶ所に三角形の脚が付く。脚部には2つの丸（目）が描かれて鳥の顔のようを作られる。386～389は釜。386は体部上位で内面ハケメ。外面は摩滅する。387は肩部の破片。外面に半円の菊花文と爪形文のスタンプが配される。内面ハケメのちナデ。388は体部中位。鍔は欠損する。389は鍔部。

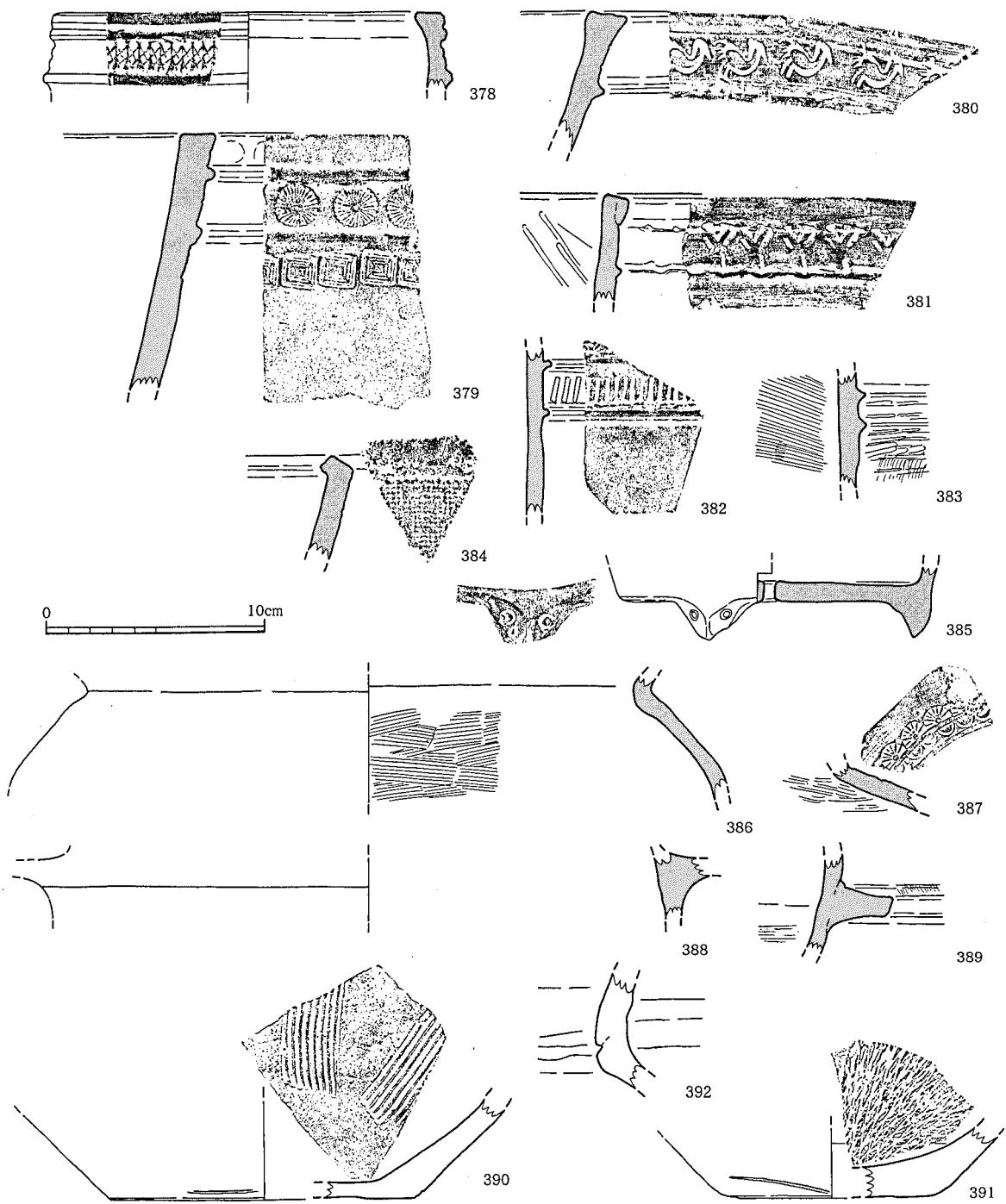
390～391は唐津系の陶器。どちらも摺鉢の体部下位～底部で無釉。390は底部に摺目はなく、



第44図 15-1号溝出土遺物実測図① (1/3)



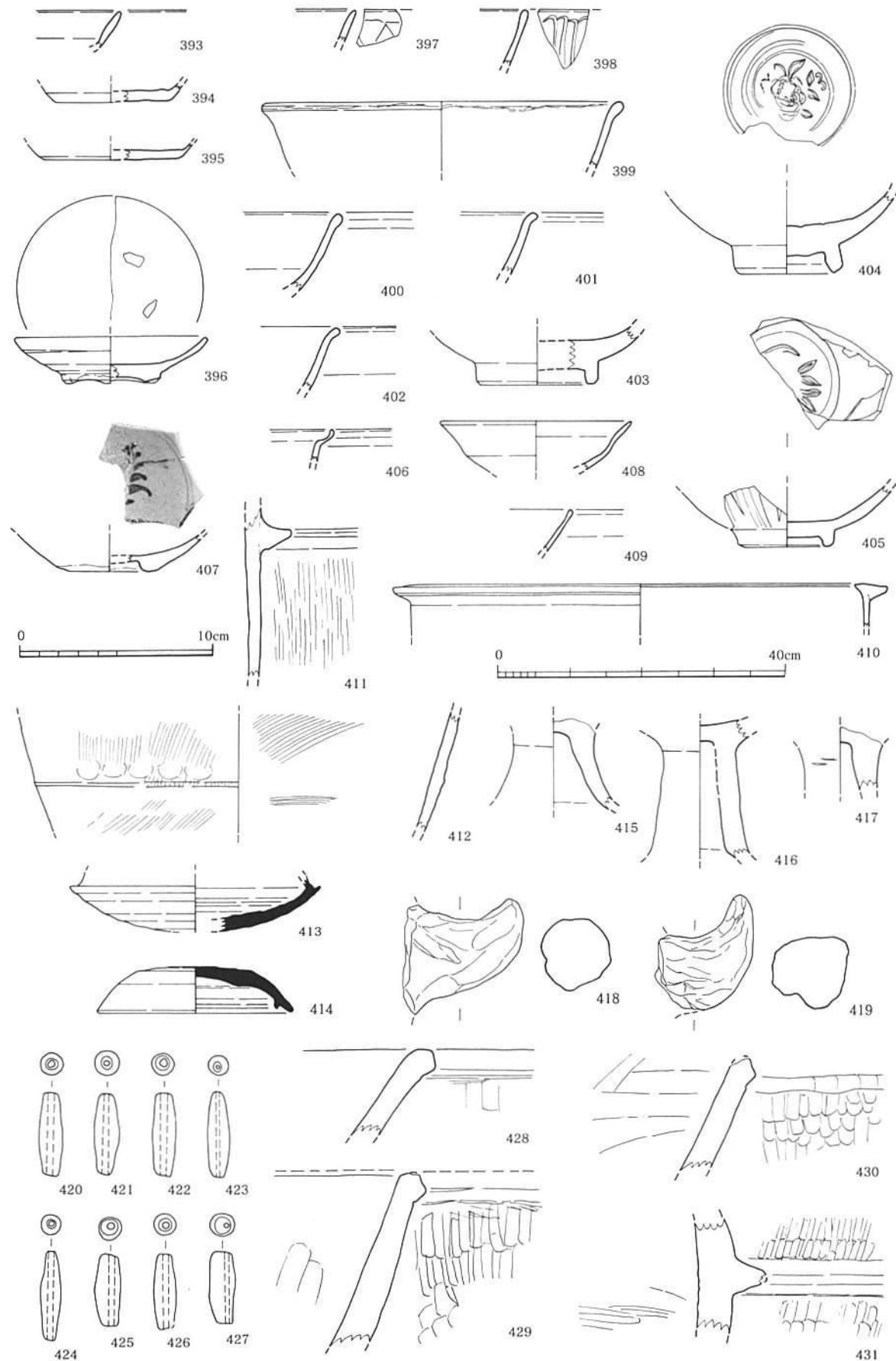
第45図 15-1号溝出土遺物実測図② (1/3)



第46図 15-1号溝出土遺物実測図③ (1/3)

体部から9条の摺目が間隔を空けて放射状に描かれる。391は底部から密に放射状の摺目が描かれる。392は陶器の甕頸部破片。頸部と体部の接合痕が残る。

393～396は輸入白磁皿。393は口縁部の破片。直口する口縁部で、体・底部境の内面に沈線状の段を持つ。394・395は平底の底部。395の底部外面は板状工具で釉を伸ばしている。396は口径10.0cm、器高2.4cm。高台に4ヶ所の抉り込みと、内面に2ヶ所の目土跡がある。本来



第47図 15-1号溝出土遺物実測図④ (1/3、410は1/8)

は目土跡も4ヶ所あったと思われる。灰白色を呈する。397～405は龍泉窯系の青磁碗。397・398は口縁部の破片で、いずれも外面に蓮弁文を持つ。399は復元口径19.0cm。外反する口縁部。400～402は同じく外反する口縁部の破片。403～405は底部。403は外底が露胎する。404は見込みに印花文が施される。外底露胎。釉垂れしていることから外底は施釉後に削られたものではないと分かる。405は底部が薄く、高台が低い。外面に蓮弁文、見込みに印花文が描かれる。疊付けより内側が露胎となる。407は青花の皿。いわゆる碁笥底の皿で、見込みに捺花文が描かれる。408は朝鮮産陶器の小鉢。復元口径10.0cm。409も朝鮮産陶器の碗口縁部破片。

410～412は弥生土器。410は甕棺の口縁部。断面三角形に近いが口縁部内面がやや突出気味である。411は甕棺体部の破片。突帯が付く。412は甕または壺の体部。低い突帯が廻る。内外面にハケメが残る。413・414は須恵器。413は立ち上がりが付く坏身。受け部最大径13.0cm。体部は丸く、受け部は短い。立ち上がりは破損する。底部外面のやや広い範囲に回転ヘラケズリが施される。底部内面ナデ。その他は回転ナデ。414はかえりが付く坏蓋。復元口径10.2cm、器高2.3cm。体部はやや高く、天井部は平らである。かえりは短く口縁よりも下に出ない。天井部外面回転ヘラケズリ、内面ナデ、その他は回転ナデ。415～419は土師器。415～417は高坏の脚部。いずれも摩滅して調整は不明。418・419は瓶の把手。以上は混入品である。

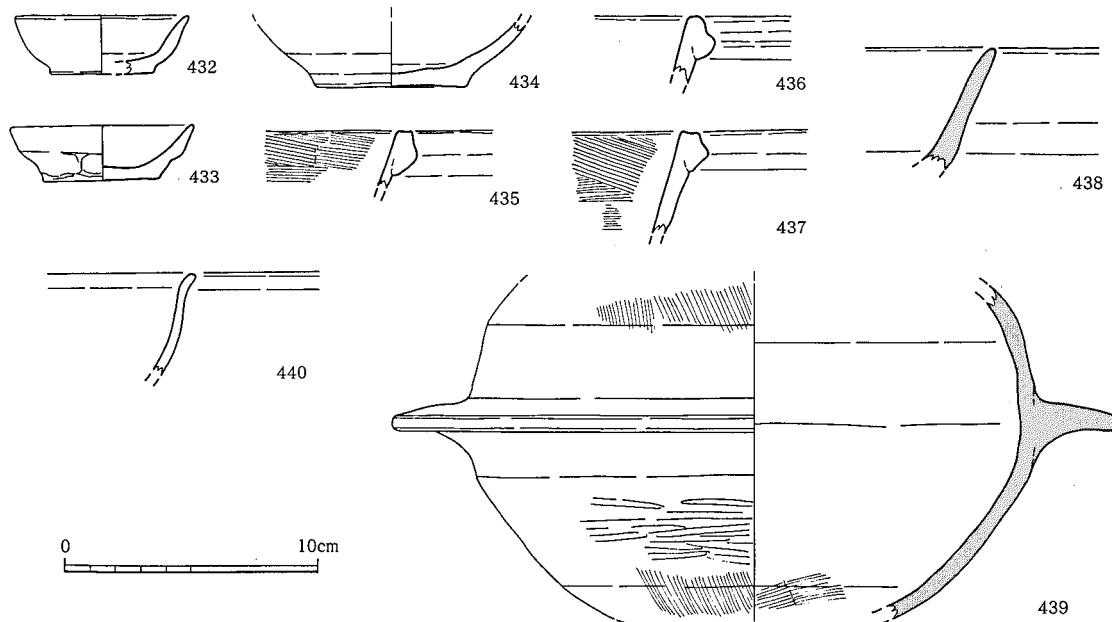
420～427は管状土錘。420は長さ4.4cm、最大幅1.2cm、孔径0.3cm、重さ5.0g。421は長さ4.2cm、最大幅1.3cm、孔径0.3cm、重さ5.8g。422は長さ4.4cm、最大幅1.1cm、孔径0.3～0.4cm、重さ5.5g。423は長さ4.5cm、最大幅1.1cm、孔径0.2cm、重さ5.5g。424は長さ4.6cm、最大幅1.0cm、孔径0.3cm、重さ3.8g。425は長さ3.7cm、最大幅1.3cm、孔径0.3cm、重さ5.7g。426は長さ3.7cm、最大幅1.3cm、孔径0.2cm、重さ6.9g。427は長さ3.9cm、最大幅1.2cm、孔径0.3cm、重さ4.7g。428～431は滑石製石鍋。428～430は口縁部の破片。いずれも鍔を持たず、口縁端部を外に向かって削り落として面を作る。口縁部外面直下に沈線状の凹みを廻らせて口縁部を作り出している。外面にノミ状の工具痕を残す。430の内面はケズリ。431は体部中位と鍔部の破片。やや古い様相で、鍔は小さく、断面は正台形となる。断面体部外面にノミ状工具痕、内面にケズリ痕が残る。

15-2号溝（第43図、図版2・15）

3区西壁沿いで検出した。9・15-1号溝を切る。検出したのは溝の東岸で、15-1号溝と別遺構と認識できず、上半の多くを落としてしまった。検出した長さは約7m。北側は東壁から調査区外に延び、南側は3区南西端付近で終わるが、西に向きを変えて調査区外に続く可能性がある。土層断面から現状で幅1.1m、深さ80cmを測る。出土遺物と15-1号溝を切ることから、17世紀以降に属する。

出土遺物（第48図、図版22）

432～437は土師質土器。432～434は小皿で432・433は糸切り痕を残す。434は摩滅する。432は口径7.0、器高2.3cm。433は口径7.2cm、器高2.3cm。434は復元底径6.0cm。435～437は鍋の口縁部破片。口縁端部が外に肥厚して玉縁状になる。438・439は瓦質土器。438は鉢口縁部の破片。口縁部は丸く收まる。内外面ナデ。439は釜。体部は丸く、中位にやや下に垂れ気味の鍔を持つ。体部外面は鍔の下位にミガキが施されるほかはハケメ。内面は底部近くにハケ



第48図 15-2・16号溝出土遺物実測図 (1/3)

メが残るほかはヨコナデで仕上がる。

16号溝（第48図、図版15）

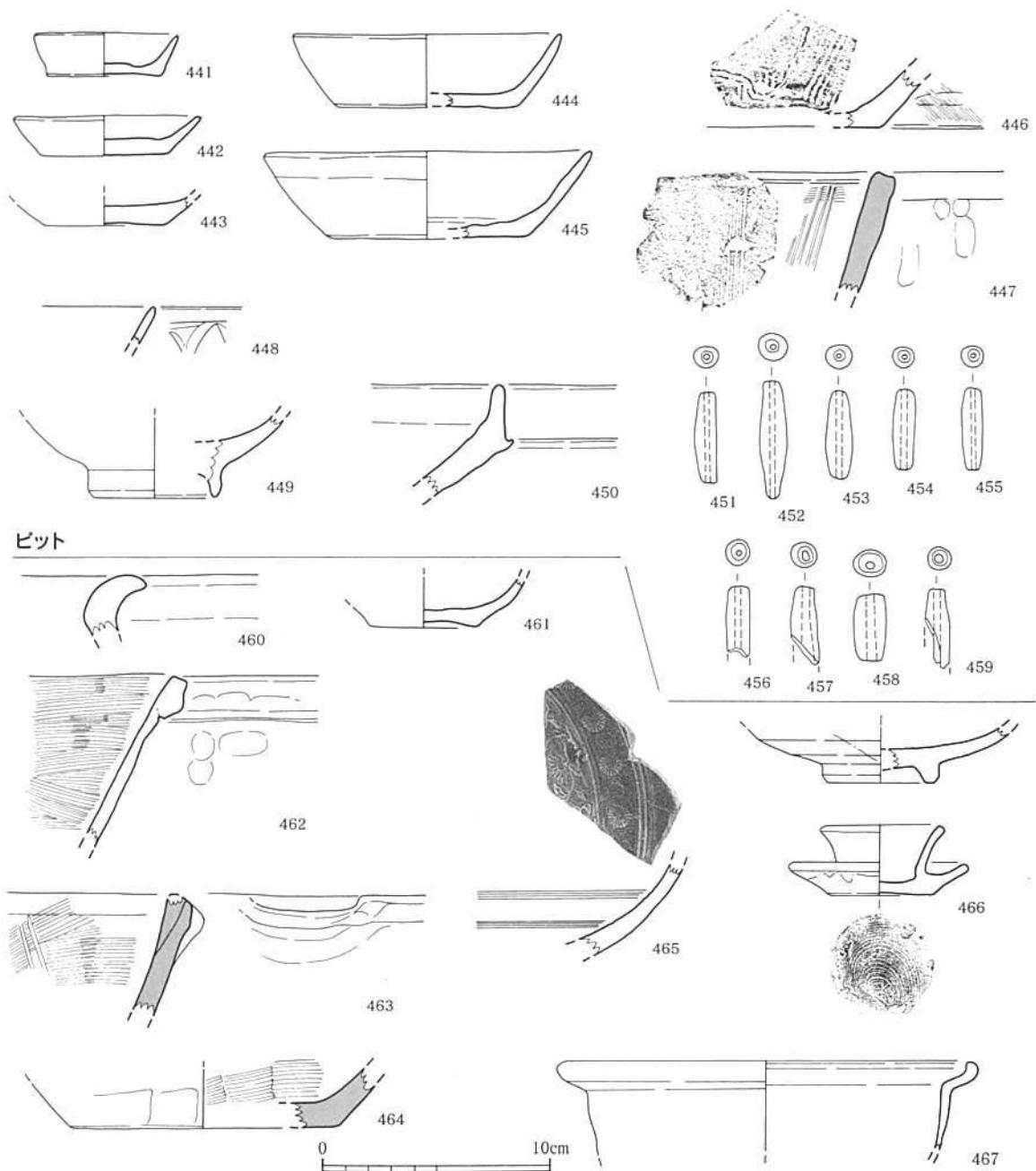
3区の北西部、15-1号溝が東西から南北に向きを変える角の内側で検出した。南北方向に走る溝で、南側・北側とも15-1号溝に切られて消える。検出した長さは約1.6m。幅20cm、深さ4cmの小溝である。埋土から青磁碗が出土している。

出土遺物（第48図）

440は青磁碗の口縁部破片。口縁部が外反する。

(6) 3区その他の出土遺物（第49図、図版22）

441～459は3区のピットから出土した。441～446は土師質土器。441～443は小皿。441・442は摩滅するが、443は糸切り痕が残る。444・445は壊。444は復元口径12.0cm、器高3.2cm。糸切り痕が残る。445は復元口径14.6cm、器高3.8cm。底部外面は摩滅する。446は摺鉢。447は瓦質土器の摺鉢口縁部。素口縁で端部上面がやや外を向く。448・449は龍泉窯系の青磁碗。448は口縁部破片。外面に蓮弁文を施す。449は底部の破片。450は陶器の鉢か。二重口縁状の口縁部破片で、一次口縁が外に突出し、口縁部は直立する。内外面回転ナデ。無釉。451～459は管状土錐。451は長さ4.0cm、最大幅1.1cm、孔径0.2cm、重さ4.2g。452は長さ5.2cm、最大幅1.2cm、孔径0.2cm、重さ5.8g。453は長さ3.9cm、最大幅1.2cm、孔径0.2～0.3cm、重さ4.2g。454は長さ3.6cm、最大幅0.9cm、孔径0.2cm、重さ3.0g。455は長さ3.5cm、最大幅1.0cm、孔径0.2cm、重さ3.2g。456は長さ3.0cm、最大幅1.4cm、孔径0.4～0.5cm、重さ5.4g。457～459は下端部を欠く。457は残存長3.5cm、最大幅1.2cm、孔径0.3～0.5cm、重さ3.2g。458は残存長3.1cm、最大幅1.1cm、孔径0.2cm、重さ3.8g。459は残存長3.6cm、最大幅1.1cm、孔径0.3cm、



第49図 3区その他の出土遺物実測図 (1/3)

重さ2.6g。

460～468は表土剥ぎ・遺構検出時の出土遺物。460は土師器の甕口縁部。短く外反する。461は土師質土器の小皿。462も土師質土器で鍋。体部が直線的に伸び、口縁端部が外に肥厚して玉縁状になる。463は瓦質土器の片口摺鉢。素口縁で端部上面は外を向く。464も瓦質土器で鉢の底部。内面ハケメ、外面ケズリで整えられる。465～466は唐津系陶器。465は皿体部の破片。内面に象嵌で文様を施す。三島手。466は灯明皿。復元口径5.5cm、最大径8.0cm、器高3.1cm。受け部の高さは1.4cmと器高の約1/2程。底部外面は糸切り痕が残る。468は陶器の鉢。復元口径19.0cm。口縁部が「く」の字状を呈し、端部がさらに上を向いて丸く終わる。468は輸入白

磁皿の底部。底部外面をやや深く削り、高台を高く作る。内面見込みを輪状に蛇の目釉剥ぎする。

(7) 小結

3区でも、中世末～近世前期にかけての集落遺構・遺物が主体となる。遺構は掘立柱建物跡1棟、井戸跡2基、土坑2基、溝3条。特に掘立柱建物跡と「L」字状に廻る区画溝を検出したことは大きな成果である。近世中期以降は墓地として利用された可能性がある。なお、3区のすぐ北は溝と市道になるが、これは山門前田遺跡の調査で確認された松延城の堀跡（0区7号溝）を埋め立てて造成されたと考えられ、松田掛畠遺跡の北端となる。

5)まとめ

(1) 松田掛畠遺跡出土の中世の遺物について

本遺跡では18世紀以降の近世陶磁器と並んで、中世～近世初頭の陶磁器・在地土器（土師質土器・瓦質土器）が多く出土している。このうち中世～近世初頭の出土遺物について触れておく。本遺跡では古いものでは13世紀代に遡る中国製輸入磁器が出土しているが、朝鮮産輸入陶器や主に唐津系の陶器の主体は16世紀後半～17世紀前半となる。またこれらと共に出土した在地系の土師質土器・瓦質土器について、北筑後・佐賀平野と本遺跡が所在する南筑後という地理的な距離があるものの、久留米市海津城跡出土の在地土器編年（白木編1994）と佐賀平野の在地土器編年（徳永1990）を参考に見ると、土師質土器の小皿・壺は概ね16世紀中頃～後半の時期に収まる。土師質土器の鍋や瓦質土器は一部にやや古い様相が見られるものの、北筑後・佐賀平野の編年も未確立であり、同様の時期に位置づけることができる。

(2) 文献資料にみる松延城跡

これまで述べてきたように本遺跡は中世城郭の松延城跡に近接しており、今回の調査成果からも密接な関係が窺われる。山門前田遺跡報告書（大庭2006）では、発掘調査成果に加え周辺の字名や圃場整備前の地形から縄張りの復元案が提示された。ここでは文献資料に現れる松延城について考えてみたい。

まずその築城時期について、広く知られる解説では松延城は天正12年（1584）に肥前の龍造寺氏に攻められた山下城（現立花町）に寄る上蒲池氏を守るために樺島式部が築いたとされる。その典拠は天和2年（1682）の「筑後地鑑」あるいは明和2年（1765）の「南筑明覽」である。ところが、実はその両書とも松延城の築城には触れていない。それぞれの記事を抜粋すると、「（前略）…柳川口ハ、山門郡松延村ノ城ニ於テ、賀庭島（樺島）式部之ニ拠リ…」（「筑後地鑑」）、「一松延村ノ城ハ、天正十二甲申年、樺島式部山下城加勢ノ為ニ肥前軍ヲ防ギシ砦ナリ。」（「南筑明覽」）となる。「筑後地鑑」も「南筑明覽」も後世に編まれたもので、松延城に関する史料としては使用に注意を要する上、天正12年の築城説は記載事項の読み違いである。恐らく樺島氏は上蒲池氏配下の武将として松延地域を支配しており、天正12年を遡る時期に松延城は築かれていたと思われる。とすると、本遺跡や山門前田遺跡の出土資料の年代にも一致する。

その後、豊臣秀吉の九州平定（1587）を経て立花宗茂が柳川城に入ると、松延城には一族の立花三郎右衛門が在番したとされる。この時期については史料が少ないので詳しく知ることは

できない。

関ヶ原の合戦（1600）後には田中吉政が筑後一国を領することとなった。慶長6年（1601）の吉政入部後には、松野主馬が松延城主を務めたとされる。このことについてやや詳しく検討したい。吉政は入部直後の慶長7年（1602）に領国支配に関して「慶長七年台所入之掟」を発している。その中に本・支城構成について「やな川・くるめ・城島・福島・くろ木・赤司・ゑのきつ・江浦八ツの諸城」という記述があるが、松延城の名は見あたらない（中野2005）。「台所入之掟」は同時代の信用のおける一次史料であるが、各支城主の記載が無いため、その比定には「筑後將士軍談」や「南筑明覽」などの城名と城主が載る二次史料に頼らざるを得ない。そこに見られる松延城主が松野主馬である。松野主馬は元来小早川秀秋の家臣だったが、慶長7年（1602）に秀秋の死によって小早川家が断絶すると吉政に転仕したとされる人物で、田中家家臣団でも上席に位置した。また松延城跡の東に位置する清水寺には、年未詳ながら松野が清水寺に宛てた書状が残る（柳川古文書館にマイクロフィルム蔵）。内容は「清水道」周辺の竹木を薪として切り取る事を禁じ、村々に対して重ねて申しつけたとの主旨で、「清水道」周辺一帯の支配に松野が影響力を持ったことの証左となる。このほか良質な史料ではないが、慶長11年（1606）頃に田中領を訪れた長州藩の密使による「筑後之国やなかわにて世間とりさた申事」という史料にも松延城と城主に松野主馬が上がる（中野2005）。これらのことから松野主馬が実際に松延城に在城した可能性は高い。吉政の筑後入部当初こそ支城として把握されなかつたものの、松野転仕後のある時期からは改めて彼を城主とする支城として領国支配の一拠点に位置づけられたと考えられる。その後は元和元年（1615）の一国一城令により廃城に至るが、その時期は本遺跡や山門前田遺跡の調査成果でも裏付けされる。

参考文献

- 西以三1682「筑後地鑑」・戸次求馬 1765「南筑明覽」（『筑後地誌叢書』筑後遺籍刊行会 1979）
矢野一貞1853「筑後將士軍談」（『校訂筑後国史』名著出版 1972）
徳永貞紹1990「肥前における中世後期の在地土器」（『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会）
白木守1994「第5節 総括」（『安武地区遺跡群VIII』久留米市文化財調査報告書第87集 久留米市教育委員会）
『福岡県の地名』「松延村」（日本歴史地名体系第41巻 平凡社 2004）
中野等2005「筑後柳川時代の田中吉政」（『秀吉を支えた武将 田中吉政』柳川古文書館他）
大庭孝夫2006「V.まとめ」（『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会）

6) 松田掛畠遺跡出土木製品の樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

松田掛畠遺跡の調査では、井戸跡が検出され、井戸側材のほか漆器や桶などが出土した。ここでは、これら木製品について樹種同定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、木製品から3方向（横断面・接線断面・放射断面）について、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、ガムクロラールで封入しプレパラートを作成した。これらプレパラートは光学顕微鏡下40～400倍で観察した。

(3) 結果

樹種の同定を行った結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属とスギ、落葉広葉樹のエノキ属とクマノミズキであった（表1）。

木製品別では、桶材と井戸側材がいずれもスギとマツ属複維管束亜属が用いられ、漆器木地はクマノミズキとエノキ属が用いられている。九州地方において、当該期の桶材としてスギ材の利用は一般的である（山田, 1993）。なお、漆器木地は、他地域においては、ブナ帶の樹木であるブナ属、ケヤキ、クリ、トチノキなどの樹木の利用が多いが、本遺跡ではこれらとは違った樹木の利用が見られた。

第2表 松田掛畠遺跡出土木製品とその樹種

試料No.	遺跡名	遺構	遺物	時期	樹種
1	松田掛畠遺跡 (九州新幹線)	1区1号井戸跡	桶	16世紀	スギ
2		1区3号井戸跡	漆器椀	18世紀	クマノミズキ
3			井戸側		マツ属複維管束亜属
4		1区4号井戸跡	井戸側	16世紀	スギ
5		1区5号井戸跡	桶	17世紀初	マツ属複維管束亜属
6		1区6号井戸跡	桶底板	16世紀	スギ
7		2区11号井戸跡	漆器椀	19世紀	エノキ属

以下に、各樹種の材組織の特徴を記載する。

①マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科 図版1 1a-1c(試料No.5)

水平と垂直の樹脂道がある針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかである。分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には鋸状の肥厚がある。

マツ属複維管束亜属は、自然分布では内陸部に分布するアカマツ、海岸部に分布するクロマツがある。材は、杭材のほか建具材、漆器木地、農機具などに用いられる。

②スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 図版1 2a-2c(試料No.6)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量が多く晩材の仮道管の壁

は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大きく、孔口が水平に大きく開いたスギ型で1分野に2個ある。

スギは、本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。日本海側では縄文時代に低地にスギ林が成立していたことが知られている。材はやや軽軟で加工は容易であり、建築材や建具材など広く用いられる。

③エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版1 3a-3c(試料No.7)

中型の管孔が1～2層配列し、その後非常に小型の管孔が多数集合し塊状・斜状・接線状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状で、穿孔は単穿孔である。放射組織は、異性1-5細胞幅、10-3-細胞高であり、鞘細胞がある。

エノキ属は、落葉広葉樹であり、本州以南の低地から山地に普通のエノキ、北海道以南の山地に生育するエゾエノキ、近畿以西の山地にまれに生育するコバノチョウセンエノキがある。材は、建築材や器具材あるいは家具材などに利用される。

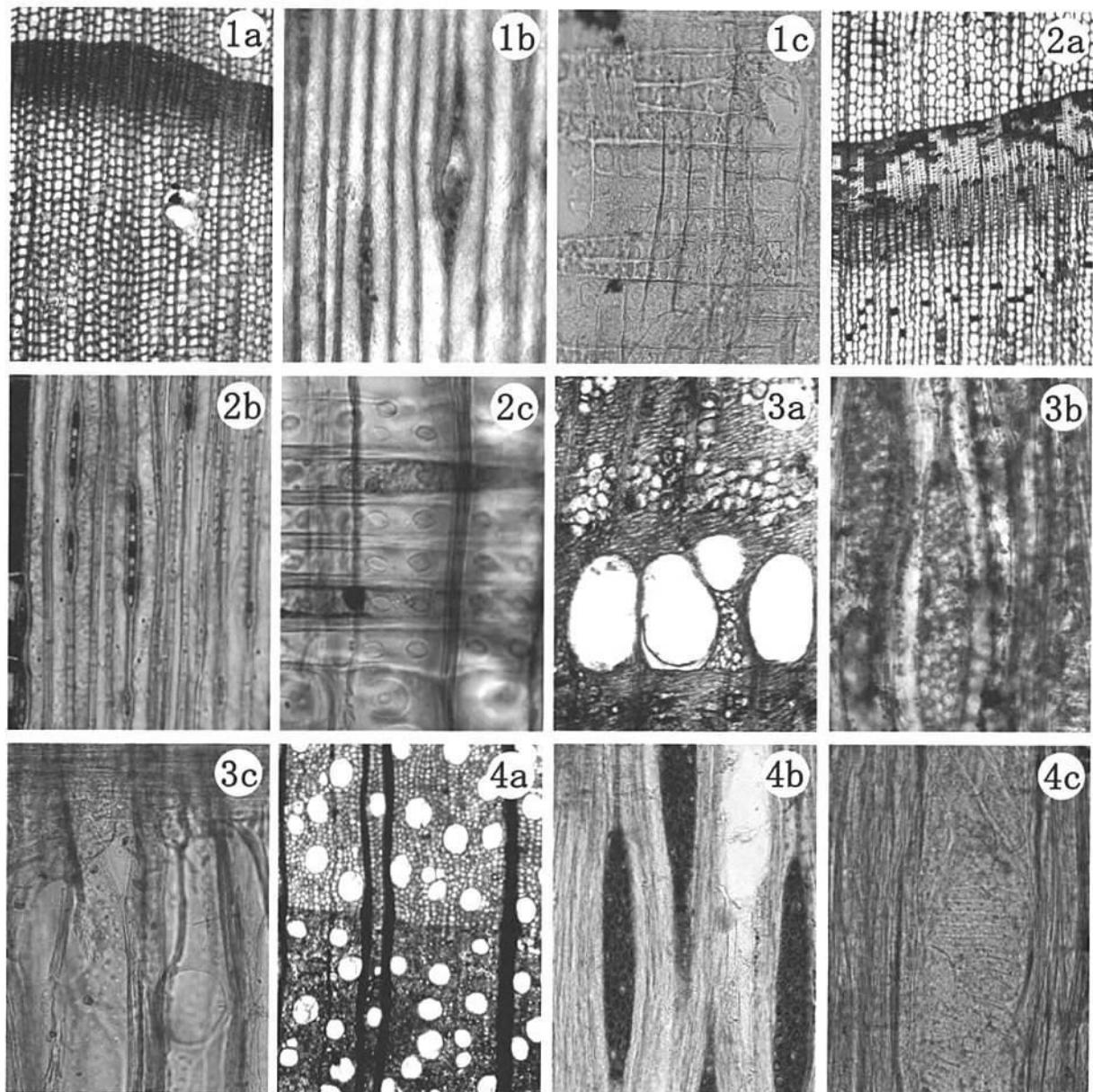
④クマノミズキ *Swida macrophylla* (Wall.) Sojak ミズキ科 図版1 4b-4c(試料No.2)

小型で薄壁の管孔が単独または放射方向に2-4個接合して均一に分布する散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は40本の横棒からなる階段穿孔である。放射組織は、異性1～5細胞幅、4-40細胞高であり、単列部および多列部の端部は直立細胞である。

クマノミズキは、暖帯から温帯に分布する落葉広葉樹である。材は、盆や椀などの漆器木地のほか器具の柄などに用いられる。

引用文献

山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成一用材から見た人間・植物関係史一. 植生史研究,特別第1号,242p.



1a-1c. マツ属複維管束亞属 (No.5, a:500 μm , b:200 μm , c:100 μm)

2a-2c. スギ (No.6, a:500 μm , b:200 μm , c:50 μm)

3a-3c. エノキ属 (No.7, a:500 μm , b:200 μm , c:100 μm)

4a-4c. クマノミズキ (No.2, a:500 μm , b:200 μm , c:100 μm)

第50図 松田掛畠遺跡出土木製品の樹種顕微鏡写真 (a:横断面、b:接線断面、c:放射断面)

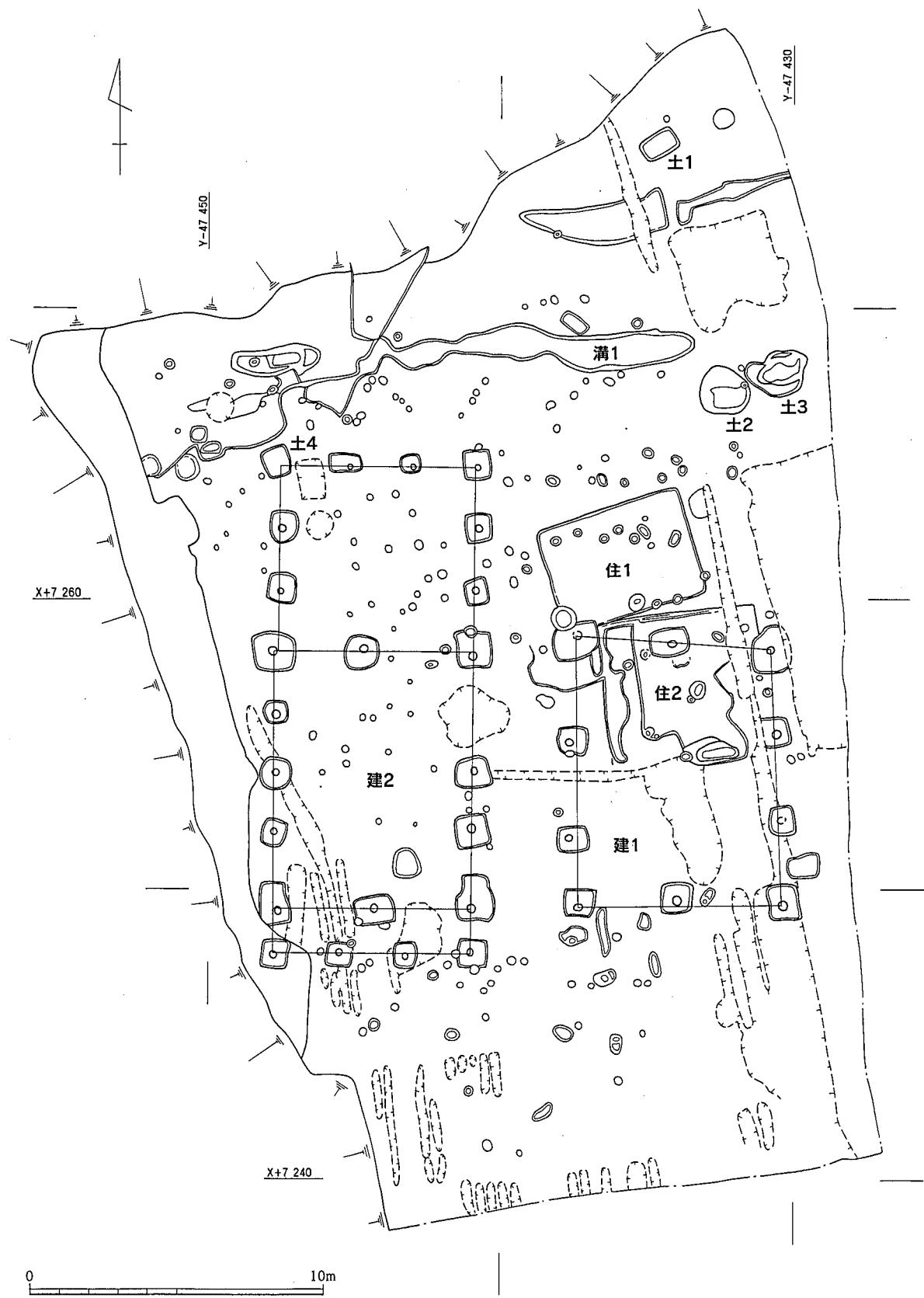
2 岩本下内遺跡

岩本下内遺跡は大牟田市大字岩本1016他に所在する。当該地は大牟田市の北東部に位置し、筑肥山地の西端、大間山(225m)から北側に派生した丘陵の端部に当たり、東西に舌状に延びる幅約100mの低丘陵の北端部に立地する。遺跡の北側眼下には、白銀川と、これによって開析された谷平野を見下ろす。現在、この谷部分には県道南関・手鎌線が通り、大牟田市街地と九州自動車道南関インター、さらには熊本県山鹿・菊池方面とを結ぶ交通の動脈ともいえる箇所で、ここに九州新幹線大牟田駅も建設されている。

九州新幹線建設予定地と工事用道路によって掘削される部分のうち、試掘調査の結果埋蔵文化財の存在が認められた770m²について、発掘調査を実施した。



第51図 岩本下内遺跡周辺地形図 (1/2,500)

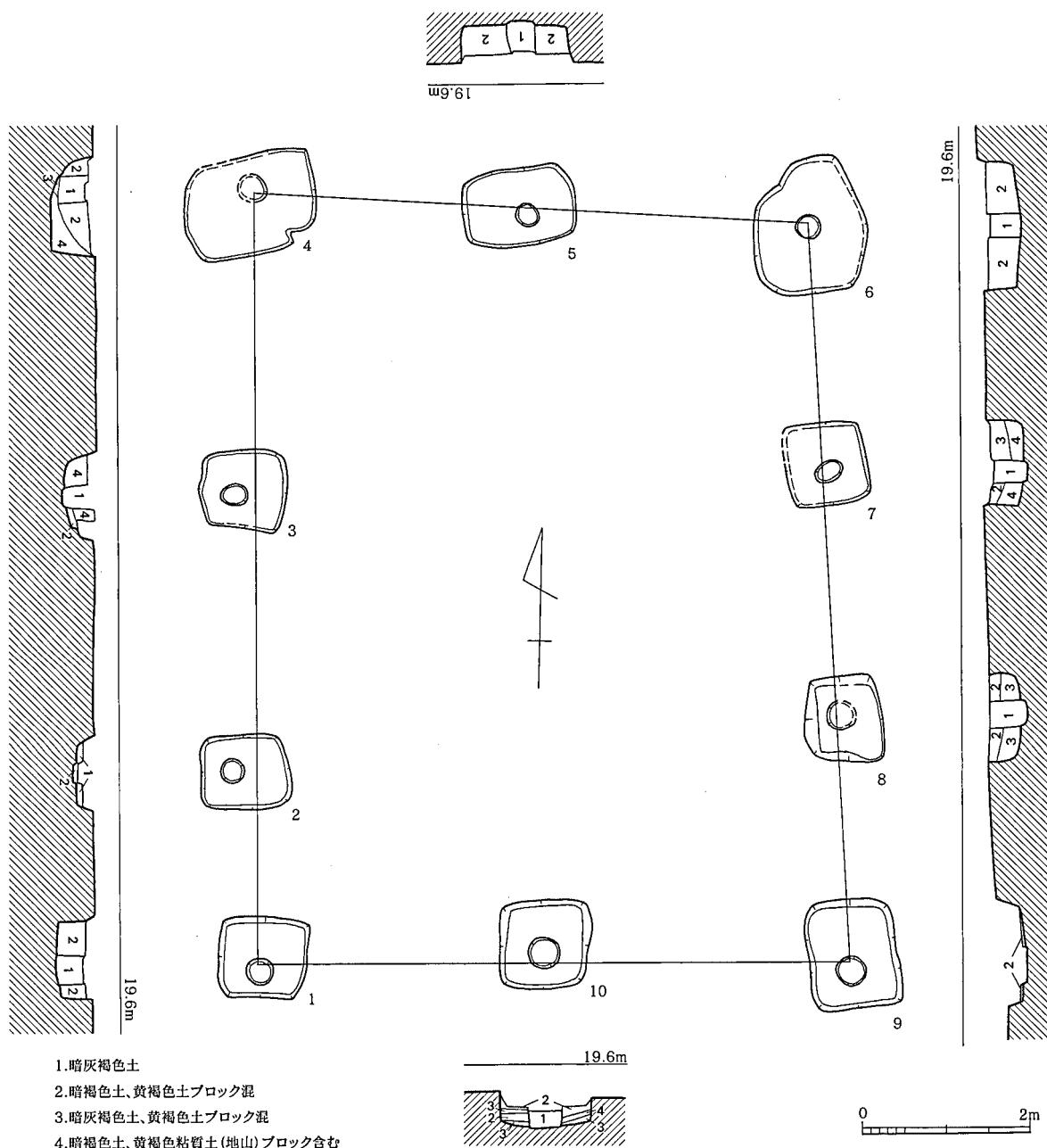


第52図 岩本下内遺跡遺構配置図 (1/200)

1) 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

調査区のほぼ中央で、2棟の南北棟掘立柱建物跡を検出した。2棟の身舎はほぼ同規模で、南北の梁行側柱の柱筋がほぼ通り、東西に並ぶ。2棟の建物の間隔は3.6mで、両建物の梁行1間の長さにはほぼ等しいことから、当時は軒を接するように建ち、一体のものとして利用されていたと考えられる。さらに西側にある2号掘立柱建物跡では、身舎の南北にさらに廂・縁あるいは露台等の施設が付設される。



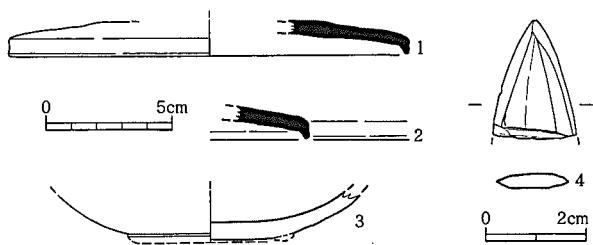
第53図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

1号掘立柱建物跡（図版24・25、第53図）

2棟並んだ南北棟の掘立柱建物跡の東側の1棟。東側柱掘形の一部が攪乱溝によって破壊されている。桁行3間、梁行2間、柱間は一定しておらず、規模は $9.4 \times 7.0\text{m}$ 。柱掘形は、北側の2つの隅柱掘形4・6がやや不整形になるものの、基本的に方形で、一辺 $0.9 \sim 1.6\text{m}$ 、隅柱のものが大きい傾向がある。柱痕跡から柱の径は $30 \sim 35\text{cm}$ と判断できる。柱痕跡部分は暗灰褐色土、埋土部分は暗褐色土に黄褐色土ブロックを含むものがほとんどである。

出土遺物（図版30、第54図）

柱掘形から出土した遺物はわずかで、しかもそのほとんどは細片であるため、図示できるものは少ない。1・2は須恵器杯蓋で、口縁部を下方に折り曲げる。外面は回転ヘラケズリ、周縁



第54図 1号掘立柱建物跡出土土器・
石器実測図（1/3・2/3）

部はその後ヨコナデ調整、内面はヨコナデ・ナデ調整。3は瓦器碗の底部付近の破片で、柱掘形埋土の最上層から出土した。わずかに残存した部分から判断すると、高台は役目を果たさない程極端に低く、復元高台径 6.0cm 。器面調整は磨耗のため不明。外面灰色、内面灰白色を呈する。4は頁岩製の磨製石鏃で、先端から 2.3cm が残存する。

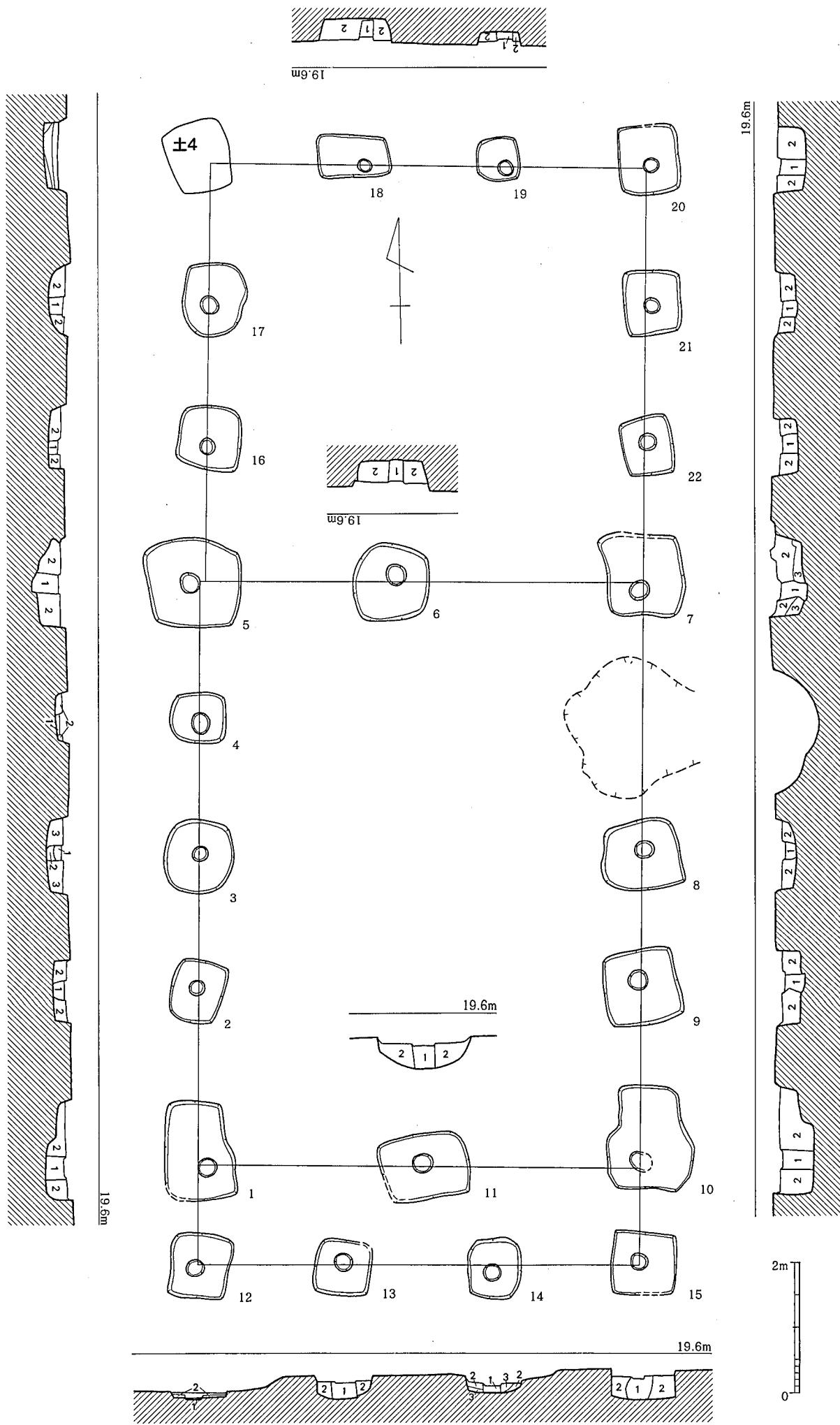
2号掘立柱建物跡（図版25～28、第55図）

2棟のうち西側の建物。身舎部分の東側柱列の北から二つ目の柱掘形は攪乱を受けて失われている。身舎の規模は1号掘立柱建物跡とほぼ等しく $8.9 \times 6.9\text{m}$ だが、桁行は柱が1本多く、桁行4間、梁行2間となる。柱間は、桁行は中央の2間分が 2.0m 、南北両側はやや長く $2.2 \sim 2.7\text{m}$ 。梁行は $3.2 \sim 3.7\text{m}$ 。柱掘形は基本的に方形あるいは長方形であるが、円形に近いものもある。隅柱のものが大きい傾向にあるのは1号掘立柱建物跡と同じで、一辺 $0.8 \sim 1.6\text{m}$ 。柱の径は $25 \sim 30\text{cm}$ 。

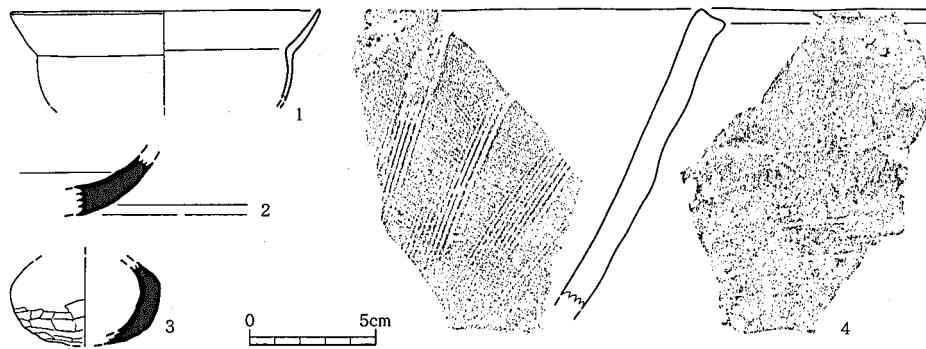
この建物が1号掘立柱建物跡と比較して特殊なのは、身舎の南北に付帯する構造が存在することである。南側には、1間分張り出した廂がある。身舎の梁間が2間であるのに対して、廂は4本の柱を用いて3間としており、柱間は 2.3m 等間。柱掘形は方形で、一辺 $0.8 \sim 1.0\text{m}$ 。柱の径は 28cm 程度。身舎の側柱との間隔は 1.5m とやや短く、あるいは縁になるのかもしれない。

北側には、身舎の北側柱に接続する3間×3間の構造が付設する。北西の隅柱は近世の土坑に切られて失われているが、柱間はほぼ 2.2m 等間。柱掘形は方形あるいは長方形であるが、大きさ・形状に若干のばらつきがあり、一辺 $0.65 \sim 1.1\text{m}$ 。柱の径は $20 \sim 25\text{cm}$ 。柱掘形埋土は、身舎・廂も含めて、1号掘立柱建物跡と同様、基本的に柱痕跡部分が暗灰褐色土、埋土部分が暗褐色土に黄褐色土ブロックを含む。

この $6.5 \times 6.7\text{m}$ のほぼ正方形の空間は、増築部分とも考えられるが、柱掘形埋土の状況では身舎との区別はつかない。身舎と比べると柱間も狭く、柱自体も若干細いことから、より華奢で軽快な構造の印象を受ける。この部分は、身舎から台地の端部に向かって張り出している。



第55図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/80)



第56図 2号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)

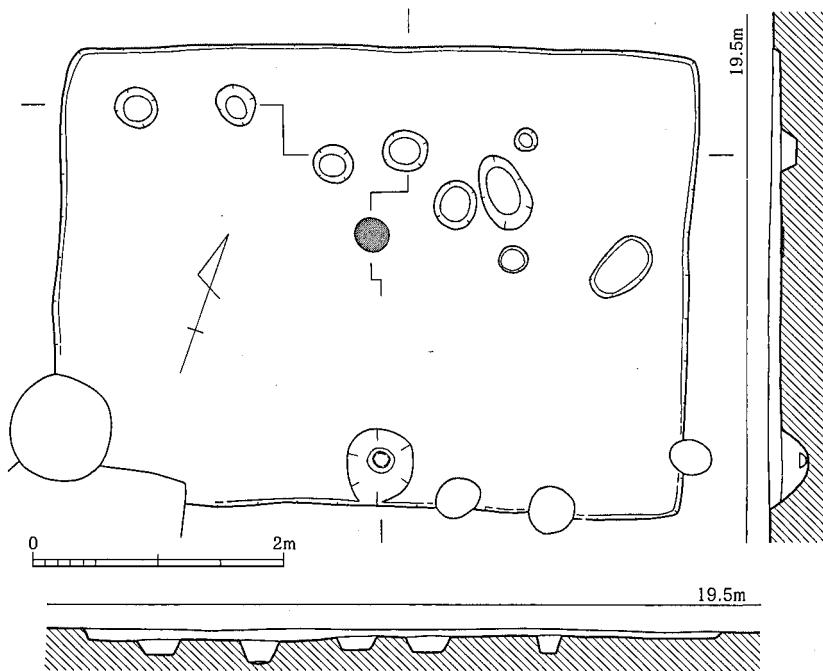
眼下の白銀川によって開析された谷は、この周辺から大きく開けており、正面に稻荷山、左手には甘木山、さらに有明海までも見渡せた可能性もある、見晴らしの良い場所にあたる。あるいは屋根のない露台状の施設か、屋根はあったとしても開放的な空間ではなかったかと想像される。南北の付帯施設を合わせると、2号掘立柱建物跡の規模は $16.7m \times 6.9m$ となる。

出土遺物（図版30、第56図）

1号掘立柱建物跡と同様、図示できる遺物はごくわずかである。1は土師器壺。器壁は薄く胎土は精良。磨耗のため調整は不明。2は須恵器壺類の底部破片であろう。外底部は回転ヘラケズリ、それ以外はヨコナデ・ナデ調整。3は須恵器小型壺。胎土は精良で、内外面ヨコナデの後、外面下半は手持ちヘラケズリ調整。復元体部径6.0cm。4は瓦質土器の摺鉢。外面は粗いナデ調整、内面はハケ目調整の後、櫛状工具による9本単位の筋目を入れる。

(2) 竪穴住居跡

調査区中央東で2軒の竪穴住居跡を検出した。2軒の建物跡は隅部でわずかに接しており、切り合ひ関係から2号竪穴住居跡が新しい。



第57図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

1号竪穴住居跡（図版28、第57図）

2軒のうち北側に位置し、遺構の南西隅部を2号竪穴住居跡、1号掘立柱建物跡柱掘形、土坑によって切られる。平面形は長方形で、長軸長5.1m、短軸長3.75m、深さは削平のため最大で10cm

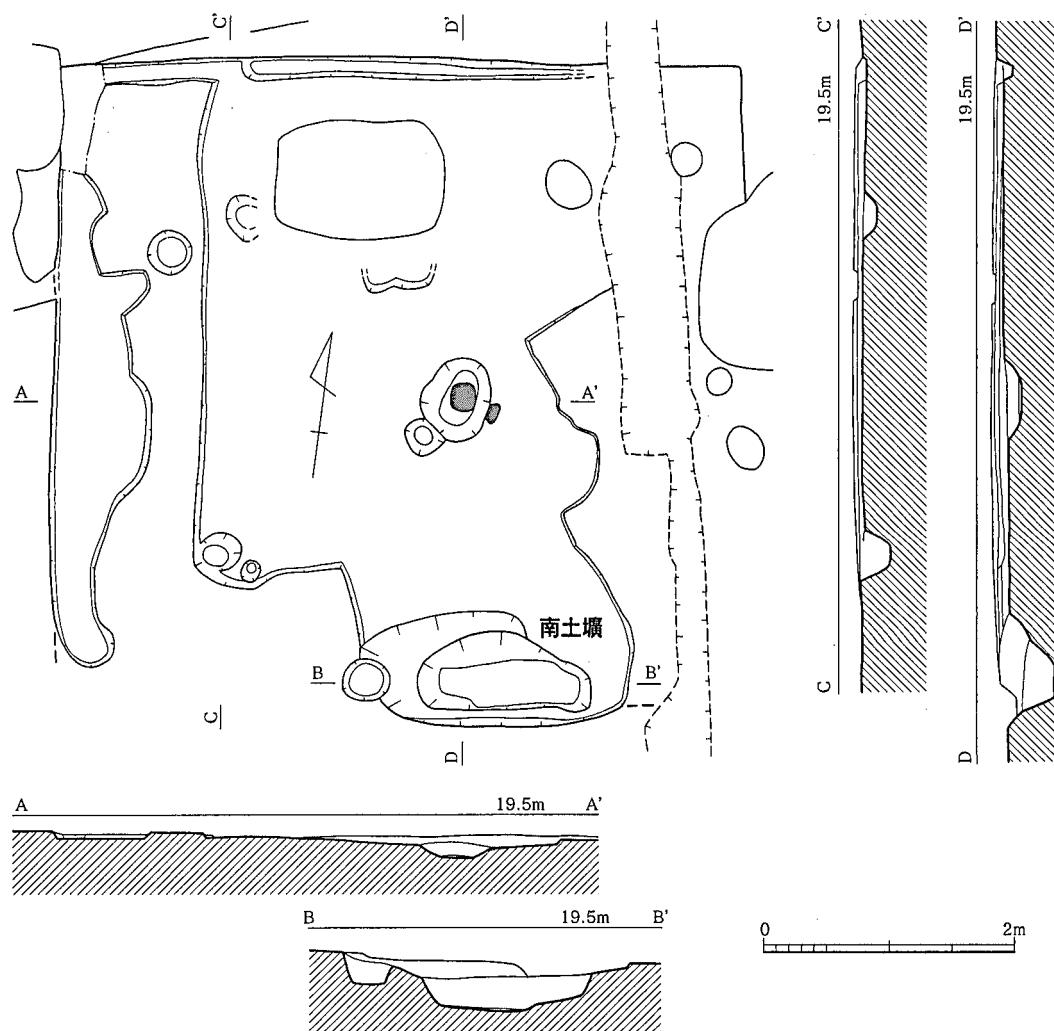
程度しか残存していない。中央やや北側で炉跡と考えられる径30cm程度の焼土を検出したが、掘り込みは確認できていない。南壁中央部に接して径60×50cm、深さ20cmの平面楕円形の土坑があり、底部に置かれた状態で土師器碗が出土している。住居跡床面から9個の小穴を検出したが、主柱穴と考えられるものは見当たらない。

出土遺物（図版30、第59図）

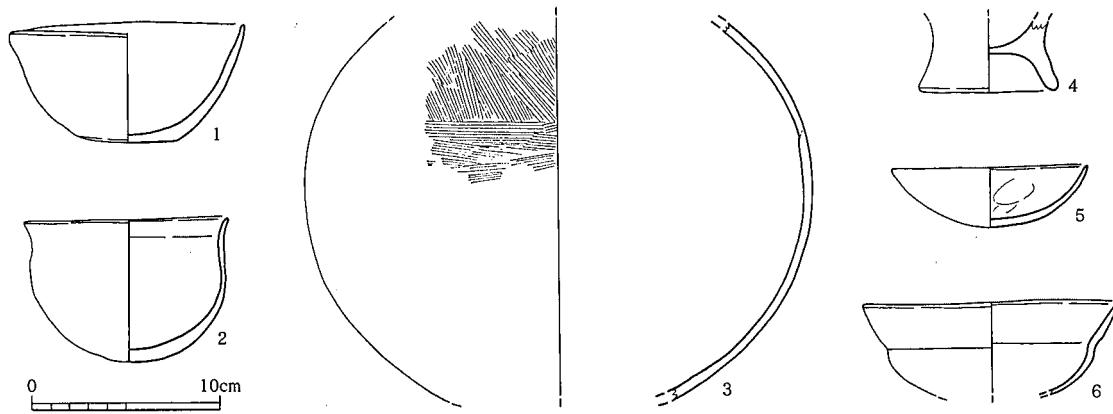
1は屋内土坑の床面に据えられた状態で出土した。土師器鉢で、器壁は薄く、小さな平底の底部をもつ。口径12.2cm、底径5.0cm、器高6.3cm。

2号竪穴住居跡（図版29、第58図）

1号竪穴住居跡の南に接して検出した。わずかに重なった部分での切り合い関係では、2号竪穴住居跡の方が新しい。削平が激しく、遺構の南半部は失われた部分が多いが、平面形はほぼ正方形と考えられ、東西軸長5.45m、南北軸長は屋内土坑から判断して5.3m程度、深さは5cmから最大でも10cm程ほどしか残存していない。住居跡の西壁と南壁の一部に沿ってL字形に



第58図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第59図 1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

ベッド状遺構があり、南壁ではベッド状遺構の途切れた部分から東側に、長軸長170cm、短軸長90cm、深さ40cmの平面不整形の屋内土坑を検出した。また、北壁と西壁に沿って排水溝の痕跡がある。住居跡の中央やや東寄りの部分には、長さ65cm、幅55cm、深さ10cmの炉跡があるが、主柱穴は検出できなかった。

出土遺物 (図版30、第59図)

6以外は屋内土坑から出土した。2は小型丸底壺で、頸部がわずかに締まる。内外面ナデ調整。口径10.7cm、体部径10.3cm、器高7.6cm。3は甕の体部破片。ほぼ球形で、中位以下の器面は熱によって剥離している。上位には煤が付着し、上部は斜め方向の、肩部は横方向のハケ目調整、内面ナデ調整。復元体部径27.0cm。4は甕の脚台部で、直線的に開き、端部は丸く仕上げる。底径7.1cm。5・6は鉢。5は断面円弧状のもので、器壁は薄く、内外面ナデ調整。口径10.4cm。器高2.3cm。6は口縁部と体部の区別のあるタイプの破片で、復元口径13.5cm。

(3) 溝状遺構

溝状遺構は、東西方向および南北方向のものを数条検出したが、いずれも浅く、幅も一定していないもので、自然流路であろう。

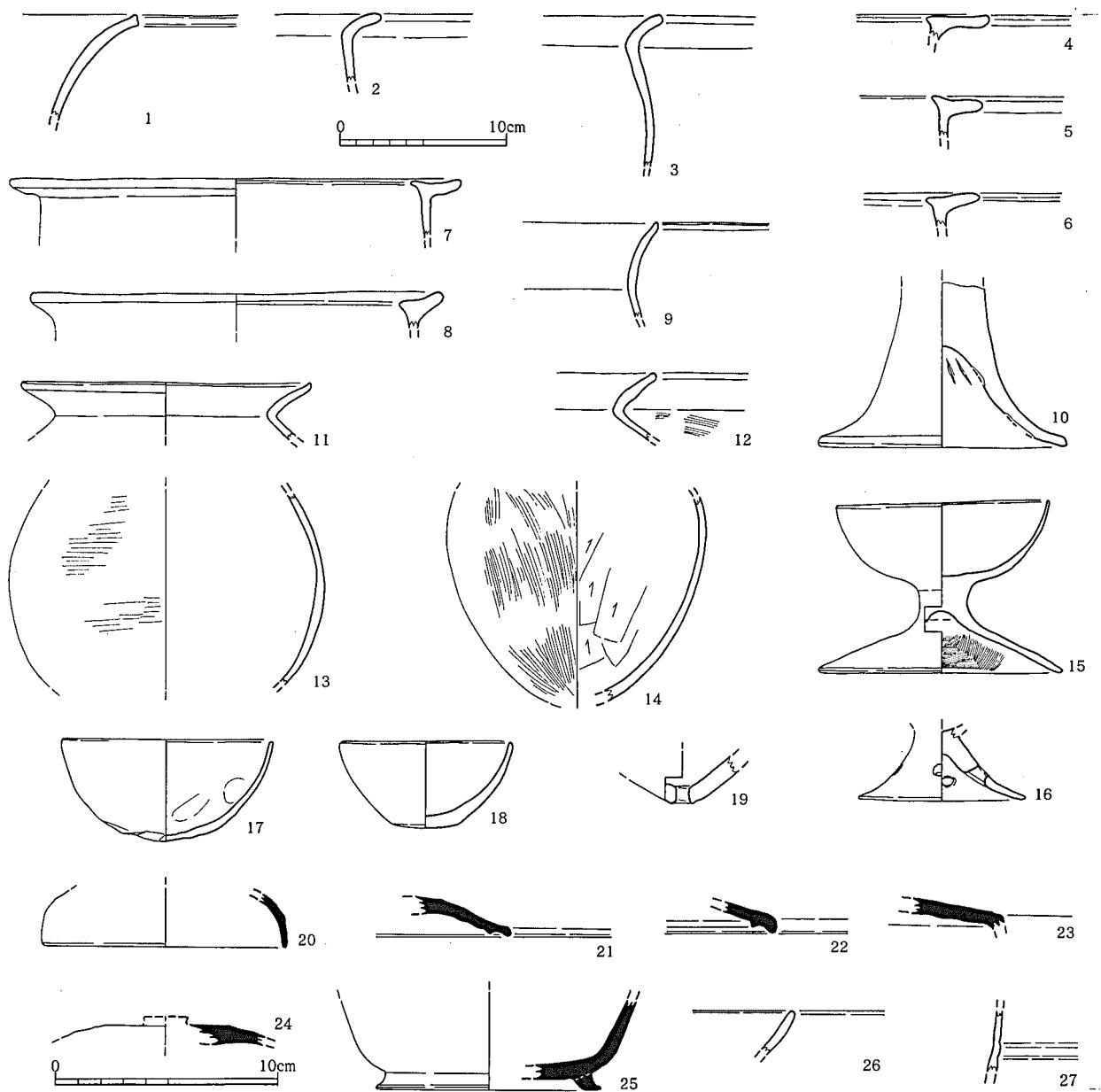
1号溝状遺構 (図版29、第52図)

調査区の北端部付近にある東西溝。東半部が溝状で、西半部は10cm程の段をもって不整形の落ち状となる。東半部の溝状部分は長さ11m程あるが、幅の一定していない不整形で、自然流路と考えられる。

出土遺物 (図版30、第60図)

1～10は弥生土器。1は広口壺の口縁部破片。胎土は精良だが、砂粒を多く含む。風化のため調整は不明。2・3は「く」字形に屈曲する、4～8は鋤形の、9は長く外反して立ち上がる、いずれも甕の口縁部破片。なんとか復元できる7・8の口径は27.0cm、24.6cm。10は高壊脚部。比較的短く、脚柱部は中実となる。

11～16は土師器。11・12の甕口縁部は、器壁が薄く、頸部で強く屈曲して、端部をわずかに摘み上げる。13・14は甕の体部破片で、13は二次焼成で黒変して表面の一部は剥離している。14は外面縦方向のハケ目調整、内面ケズリ調整。17・18は鉢。17は器壁を薄く半球形につくり、

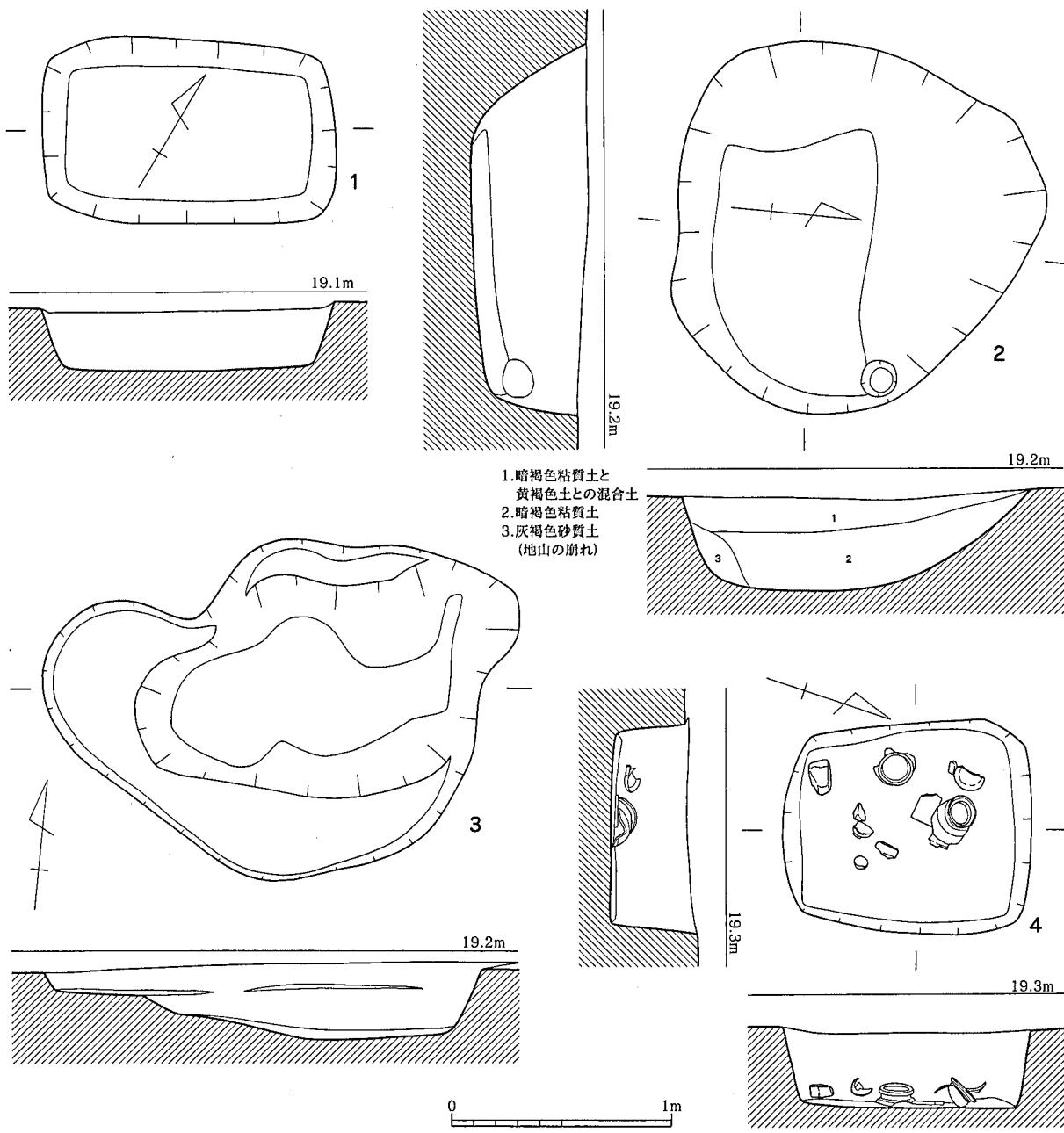


第60図 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

ナデ調整、外面下部はヘラケズリ調整。口径12.4cm、器高6.2cm。18は稜をもつて底部をつくるが完全な平底ではない。19は底部に穿孔をもつ鉢形の瓶。器壁は厚く、風化のため調整は不明。15・16は高坏。15は杯部が半球の椀形で、脚柱部が短く裾が大きく開く。内外面ナデ調整、脚部底面はケズリ後ハケ目調整。復元杯部径12.5cm、脚部径14.8cm、器高10.3cm。16は短脚の高坏脚部で、4方向に穿孔をもつ。内外面ナデ調整。

20～24は須恵器蓋。20は端部を丸く仕上げる。21・22は口縁部内面にかえりを有し、23は端部を下方に折り曲げる。24は蓋天井部とみられ、摘みの接合部がわずかながら確認できる。外面回転ヘラケズリ調整、内面ナデ調整。25は須恵器杯で、高台が外に張り出す。

26は瓦器椀の口縁部破片で、内外面黒灰色、調整は内外面とも横方向のミガキと考えられるが不明瞭である。



第61図 1～4号土坑実測図 (1/30)

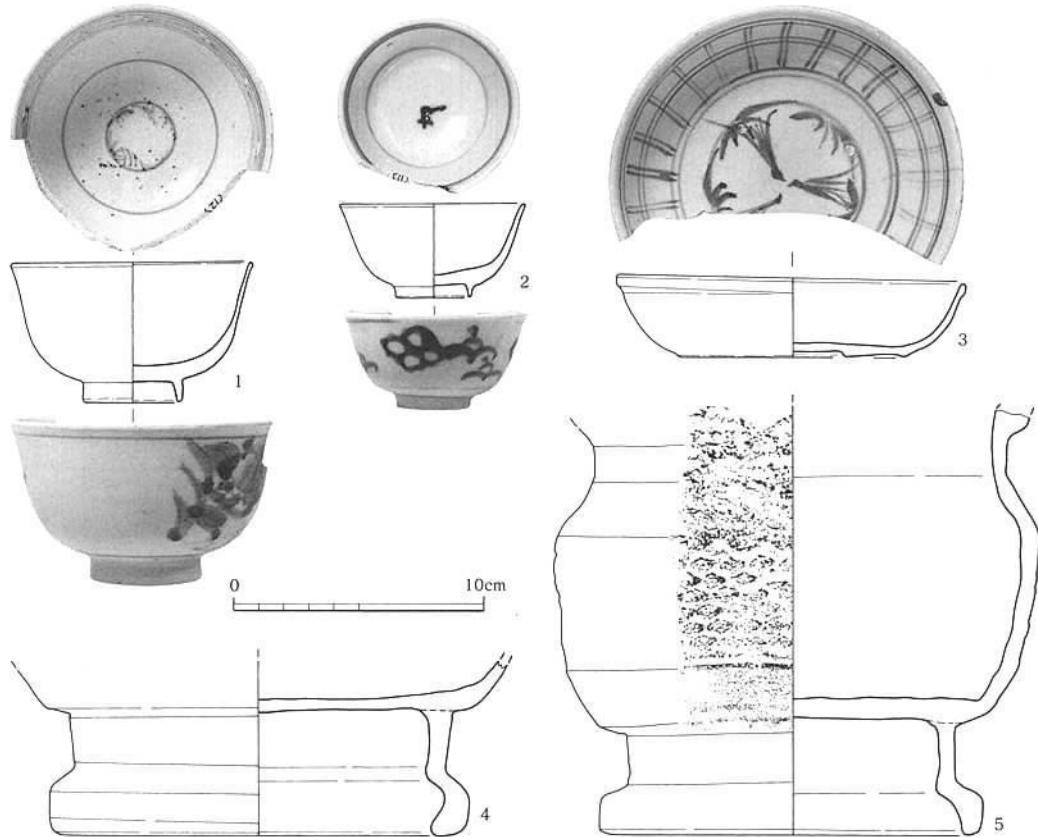
27は黄釉陶器破片だが機種は不明。外面に2条の沈線を巡らし、内外面に釉をかける。

(4) 土坑

1号土坑（第61図）

調査区北東端部にある。平面隅丸長方形で、長さ132cm、幅85cm、深さ28cm。遺物の出土はない。

2号土坑（第61図）



第62図 4号土坑出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

1号溝状遺構の東端部付近にあり、3号土坑と隣り合う。平面形は円形に近い不整形で、 $165 \times 170\text{cm}$ 、深さ53cm。遺物の出土はない。

3号土坑（第61図）

1号土坑の東側に接するようにしてある。不整形の土坑で、 $218 \times 153\text{cm}$ 、深さは最大部で35cm。遺物の出土はなく、2号土坑も含めて人為的なものではない可能性もある。

4号土坑（図版29、第61図）

2号掘立柱建物跡の北西隅の柱掘形を切って掘られている。形状や位置からは、一見したところ2号掘立柱建物跡の柱掘形に見えるが、埋土や出土遺物から別時代の土坑と判明した。平面形は隅丸長方形で、 $112 \times 97\text{cm}$ 、深さ35cm。遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（図版30、第62図）

1～3は肥前系の染付。1は椀で、内面口縁部付近に雷文、見込は退化した松竹梅文か、外面は椿文。口径9.5cm、高台径3.7cm、器高5.7cm。2は小椀で、外面に折枝花文。1・3と比べて吳須の発色が鮮やかで、釉にも光沢がある。口径7.3cm、高台径2.8cm、器高3.8cm。3は蛇目回形高台をもつ皿。見込は周囲に格子文、中央には笹文。また、見込にハマ支え痕が残る。口径13.8cm、高台径9.0cm、器高3.2cm。4・5は同じタイプの土師質の火鉢だが、4の方が胎土等がより精製である。4・5とも脚部は床が熱を受けないように高く作り、中位から下部が屈曲し

て開いて安定を図る。5は最大径が上位にあり、頸部で一旦すぼまり、口縁部が再度開く。4・5とも内外面ヨコナデ・ナデ調整。5の体部外面は型押しによる入子菱文で装飾する。

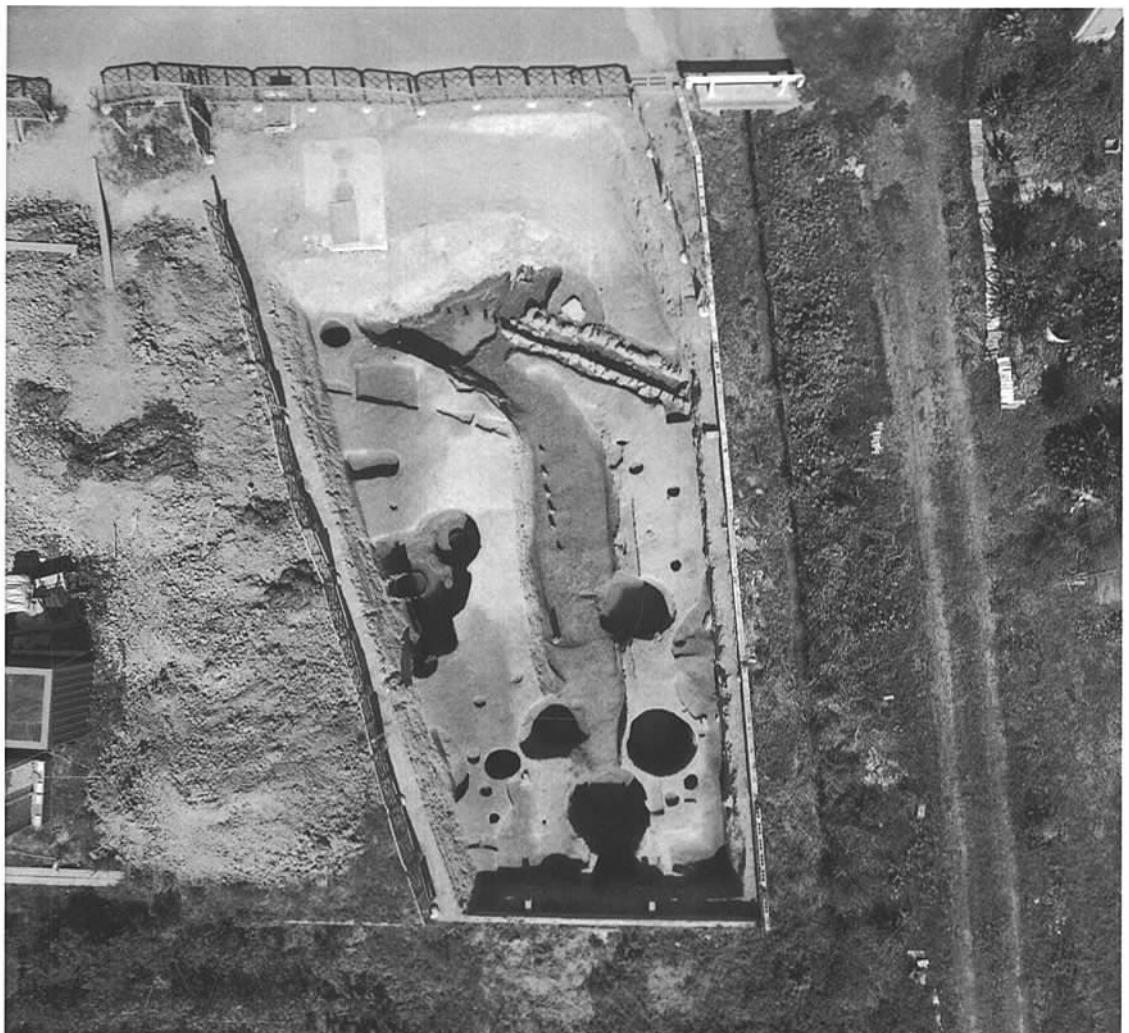
2) まとめ

岩本下内遺跡で検出した主な遺構は、古墳時代初頭の住居跡2軒と、歴史時代の掘立柱建物跡2棟である。このうち2棟並んだ状況で検出した掘立柱建物跡については、一辺1m以上の平面方形の柱掘形で、2×3間ないし2×4間の規模の身舎をもつ堂々たる建物であるが、先述のとおり出土遺物がわずかで時期を比定することが困難である。第54図1の磨製石鏃や第56図1の土師器壺などの弥生・古墳時代のものは当然混じり込みとしても、第54図3の瓦器椀と第56図4の瓦質土器鉢は、遺構の状況を考えると逆に新し過ぎると思われる。この2点の土器はともに柱掘形埋土の最上層から出土している。わずかな遺物のなかから都合の悪いものを省くよう戸惑いを感じるもの、後世の攪乱の多い当遺跡の性格を考え合わせても、ここでは混入品と考えたい。先述の通り2棟の掘立柱建物跡は、その規模と配置状況から同時期のものと判断することが可能で、出土した須恵器の年代から、8世紀初頭から前半頃を上限とする時期に建造されたものと考えられる。

今回の調査は、新幹線建設予定地に工事用道路を加えた最大27m幅の範囲に限られるため、検出した掘立柱建物跡は2棟であったが、計画的に配置された建物の状況や、区画する施設等が未検出であることなどを考えると、さらに周囲へ遺構が広がる可能性がある。今回の調査区の南側については、試掘調査の結果では南側に低く傾斜する湿地の状況を呈しており、遺構が存在した可能性は低い。当該地は東西に舌状に延びる比高5m程の低丘陵上にある。現在の地形から判断すると、調査区の東西の丘陵北縁部に沿って遺構の拡がりが期待できそうである。

建物の性格は、官衙的なものの一部分とも居宅とも言えそうで、この並び建つ2棟の掘立柱建物跡だけでは判断が困難である。ヒントとなり得る遺物の出土もなかった。2号掘立柱建物跡の北側に張り出した部分は、丘陵上から白銀川とこれによって開析された平地を見下ろす露台あるいは開放的な構造物を先に想定した。現在、この平地には県道南関・手鎌線が通り、大牟田市街地と九州自動車道南関インター、さらには山鹿・菊池方面とを結んでいるが、ここに古くから肥後へと通じる道路があったことは確実であろう。地形はここから西側が大きく開けて沖積地を形成しており、現在の大牟田市街地へとつながっている。その意味で遺跡の所在する付近は扇の要、谷の出口にあたり、要衝の地とも言える。遺跡の全体像と性格の把握は、今後の課題であろう。

図 版



上. 1区北側
空中写真
(上が北)



下. 2区空中写真
(上が北)



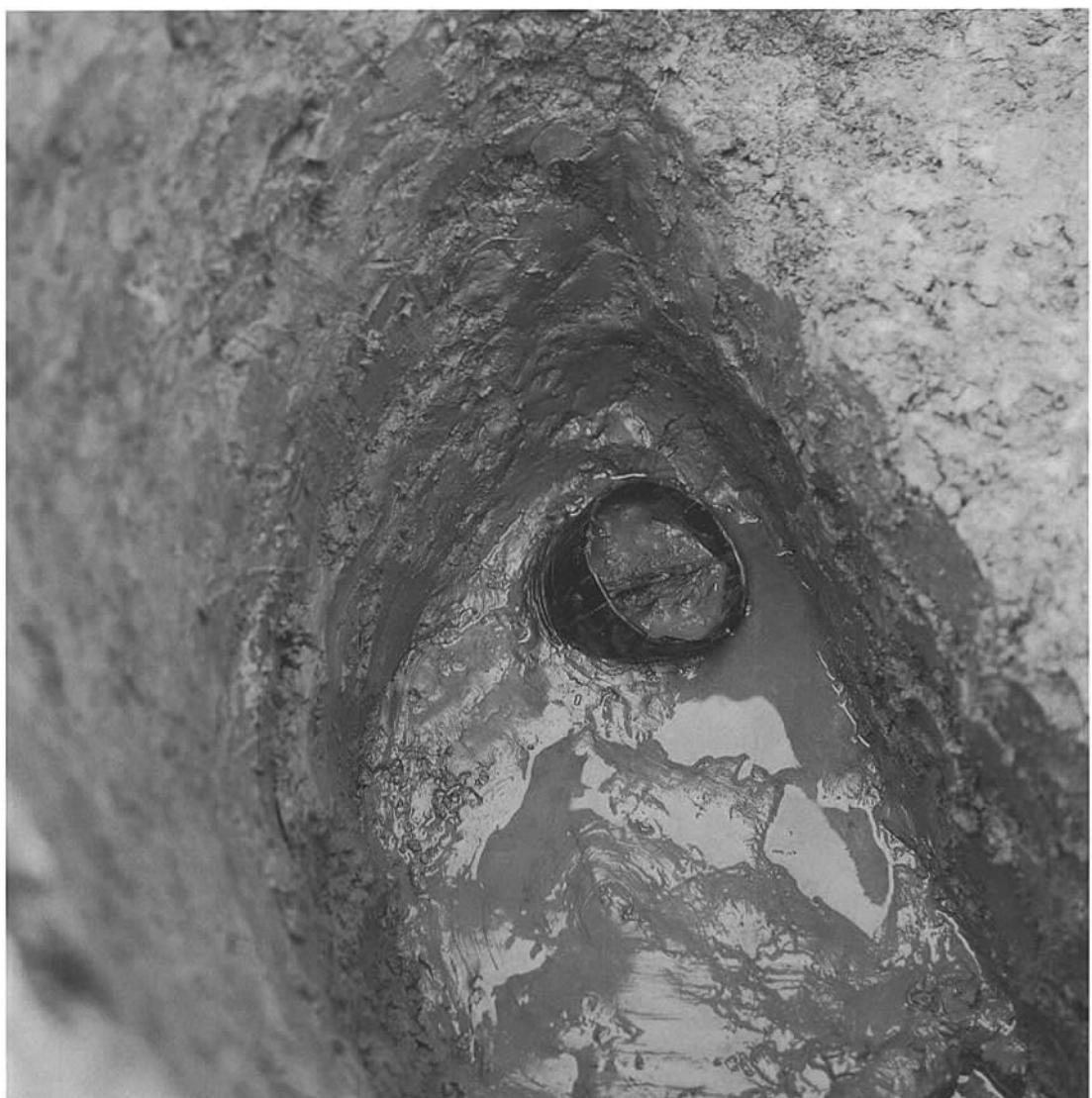
上. 3区全景
(南から)



下. 1区南側全景
(北から)



上. 1区1号井戸跡
(南から)



下. 1号井戸跡木製品
出土状況
(東から)

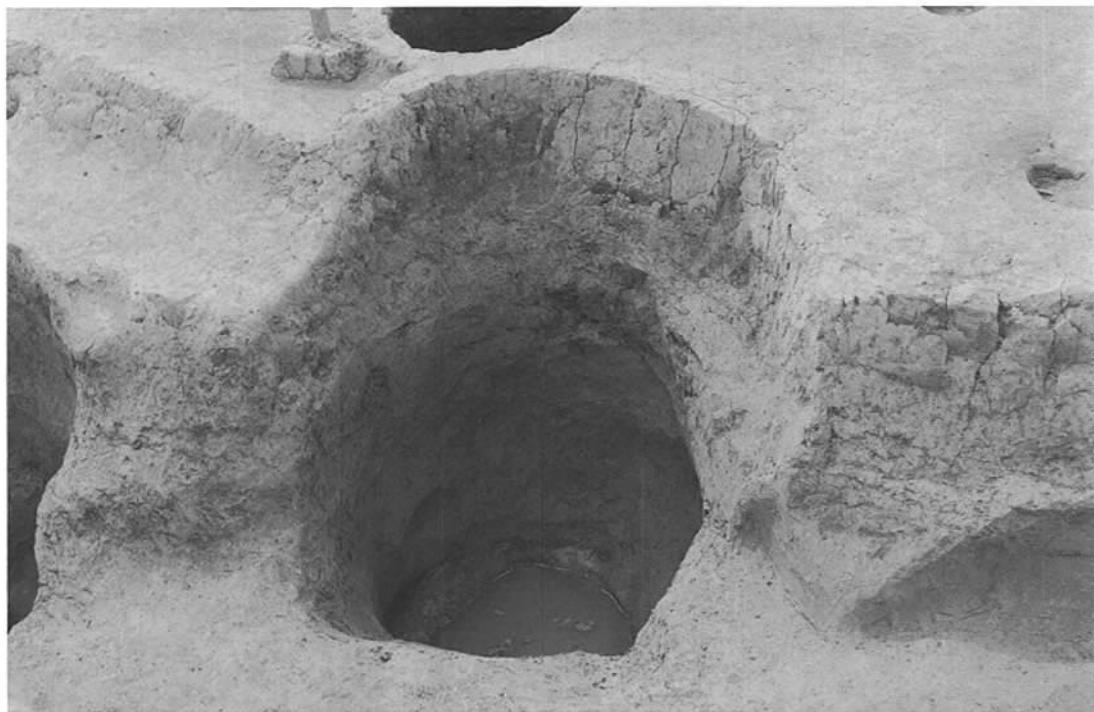


上. 1区2号井戸跡
(西から)

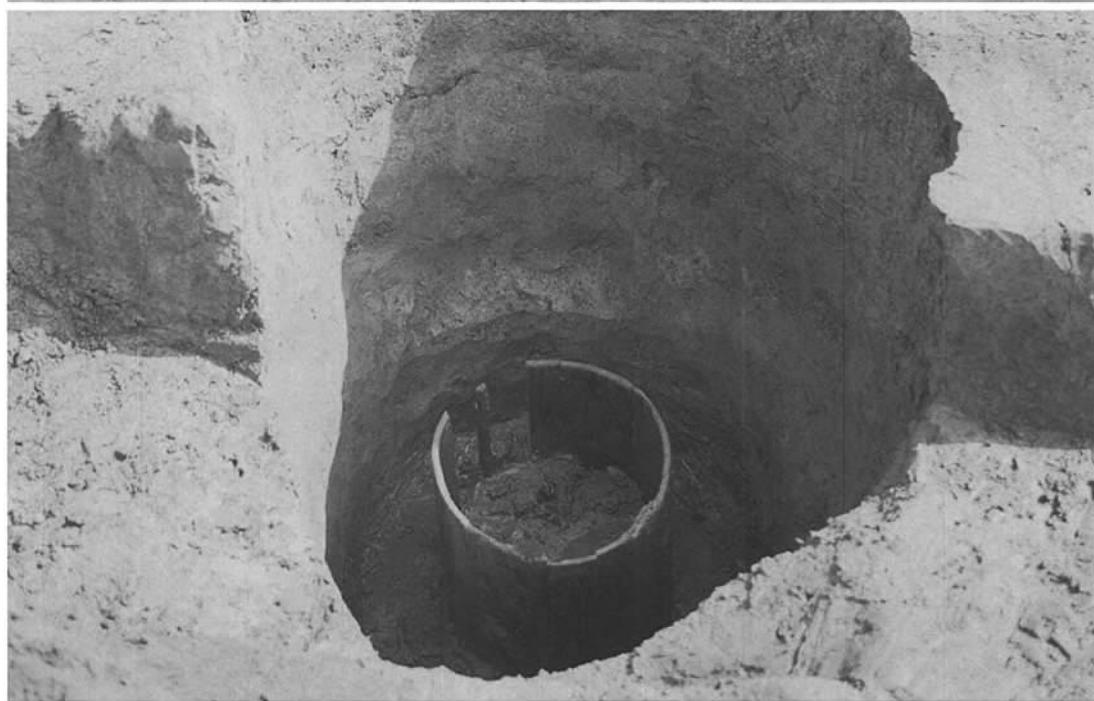


下. 1区3号井戸跡
(東から)





上. 1区6号井戸跡
(北東から)



中. 1区7号井戸跡
(南西から)



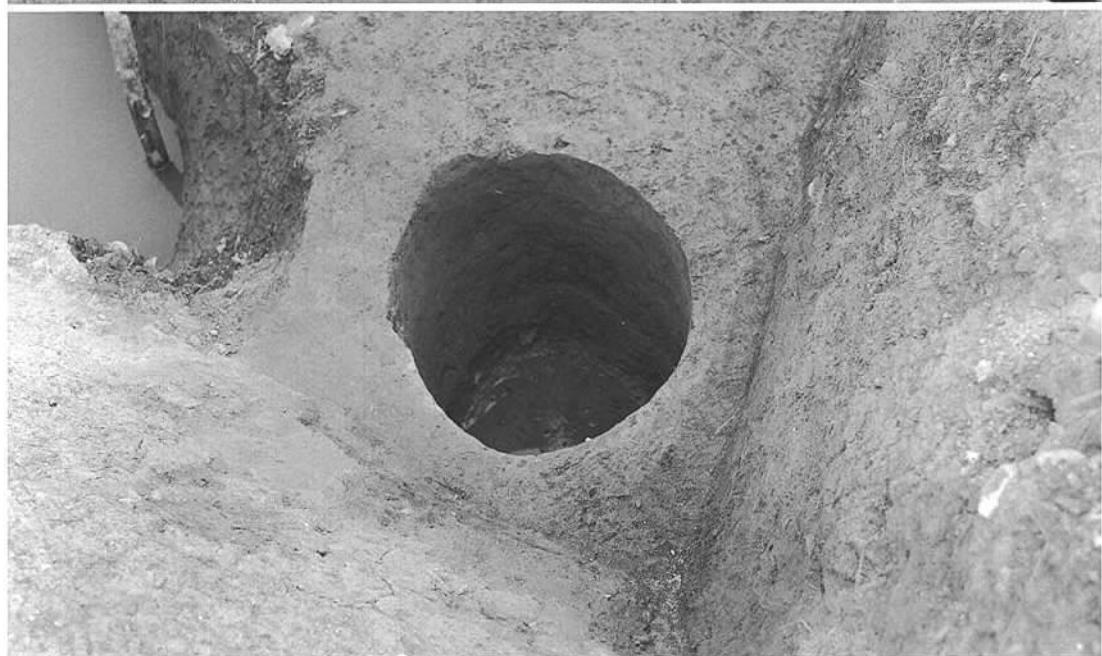
下. 1区8号井戸跡
(南西から)



上. 1区2・3号土坑
(北から)



中. 1区5-1・5-2号土坑
(南東から)



下. 1区10号土坑
(北西から)



上. 1区2号溝
(北から)



下. 5号溝 (北から)



上. 1区10号溝
(東から)



下. 2区11号井戸跡
(南西から)



上. 2区14・15号土坑
(西から)



下. 2区16号土坑、14号溝
(南から)



上. 2区8号溝
(西から)



下. 2区9号溝
(南から)



上. 2区13号溝
(北から)



下. 3区1号掘立柱建物跡
(南から)



上. 3区13号井戸跡
(南から)



下. 3区14号井戸跡
(北西から)



上. 3区20号土坑
(南から)



下. 3区22・23号土坑
(西から)



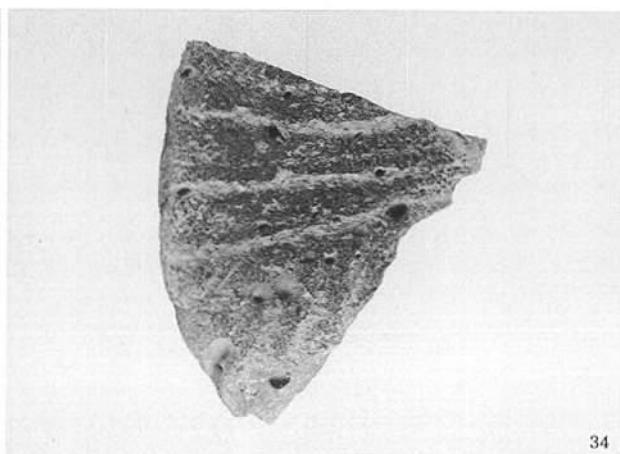
上. 3区15-1・15-2・
16号溝
(北から)



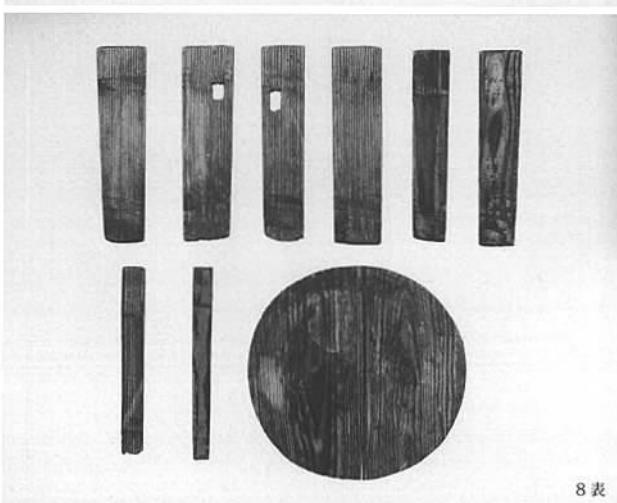
下. 3区30号土坑
(南西から)



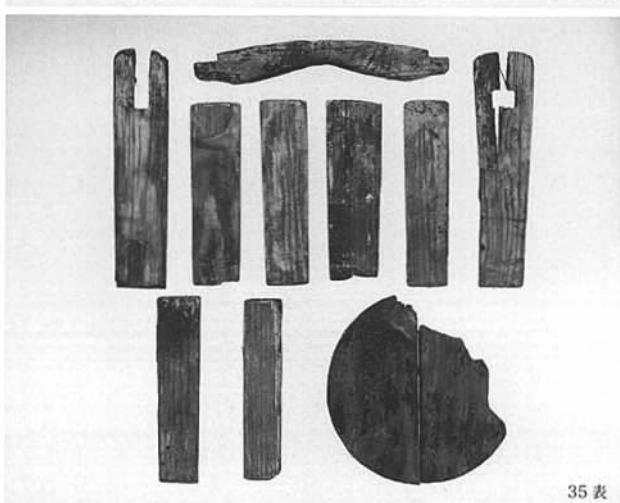
5



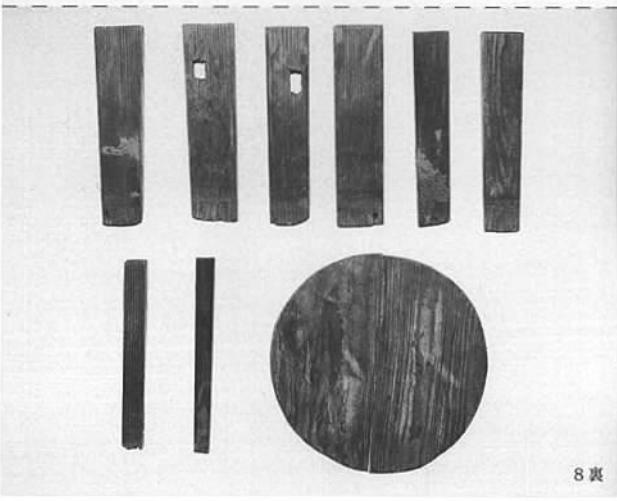
34



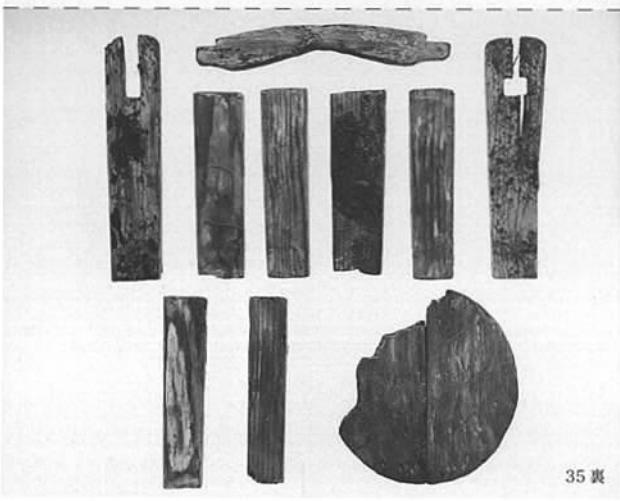
8 表



35 表



8 裏

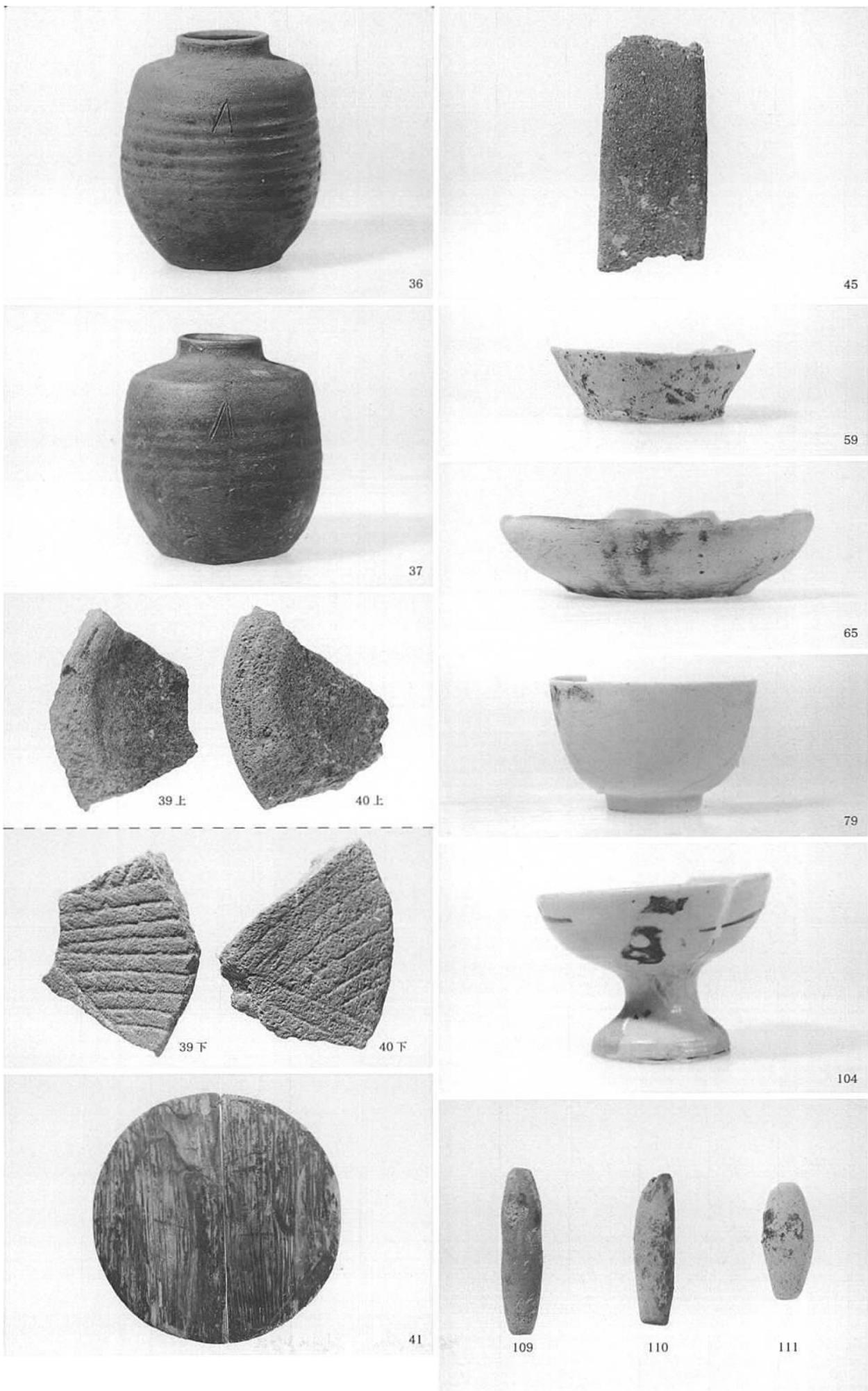


35 裏

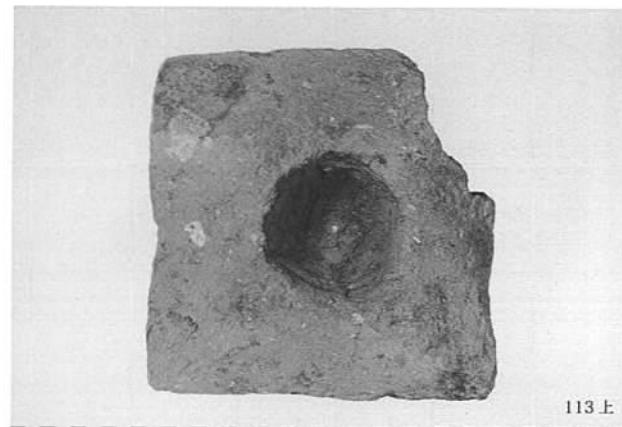


17

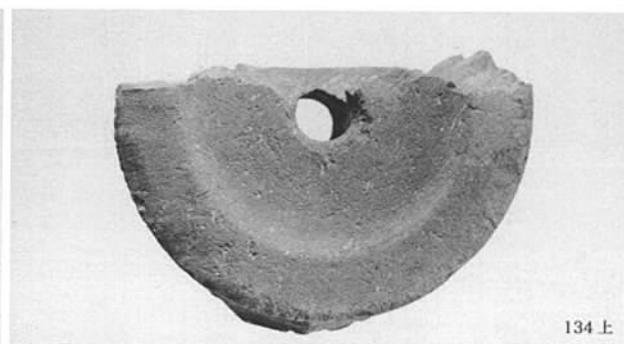
1区出土遺物



1区出土遺物



113 上



134 上



113 横



134 横



113 斜



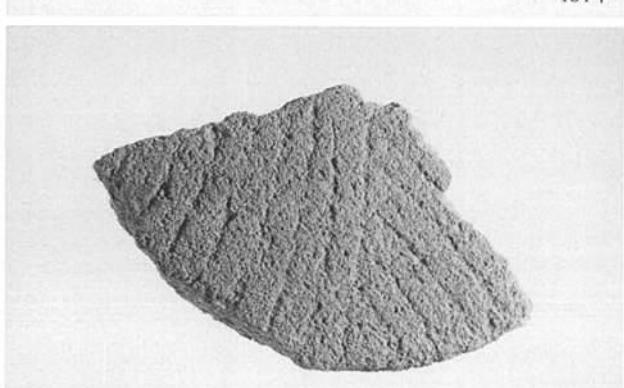
134 下



123



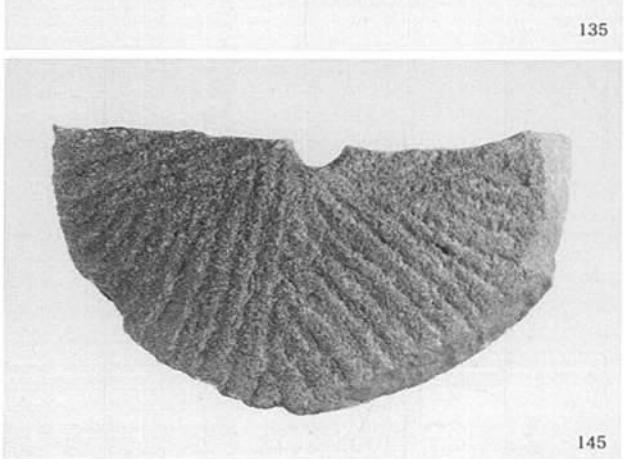
125



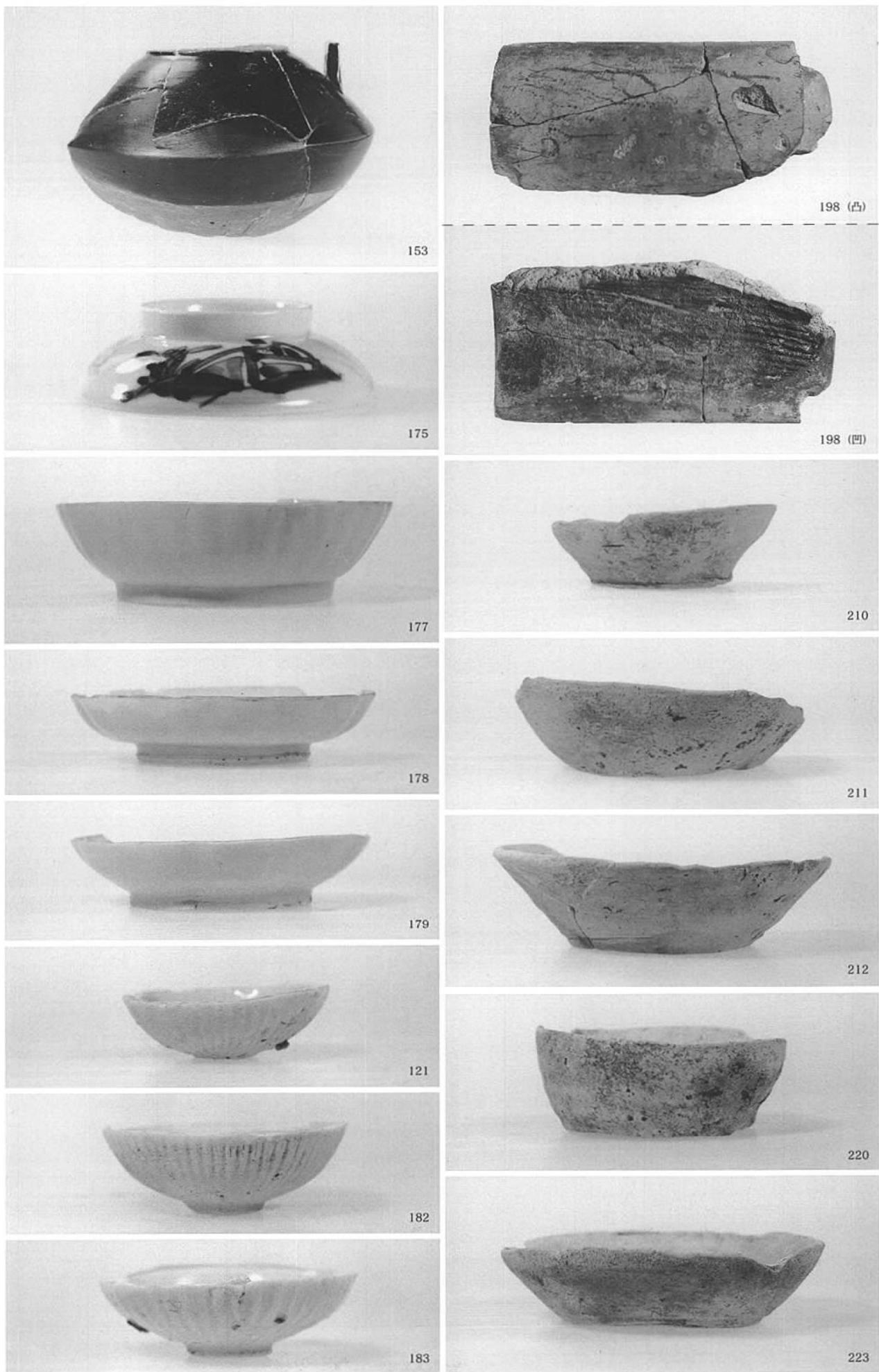
135



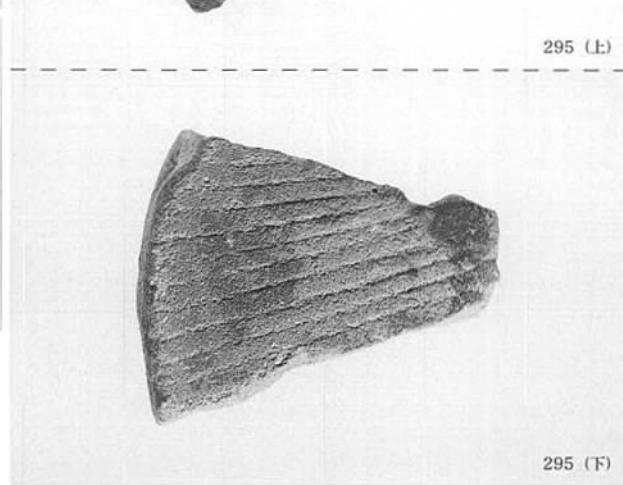
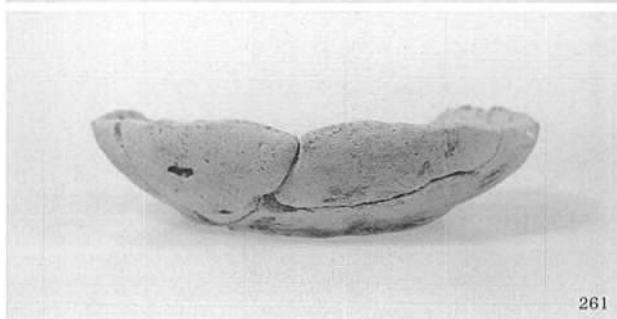
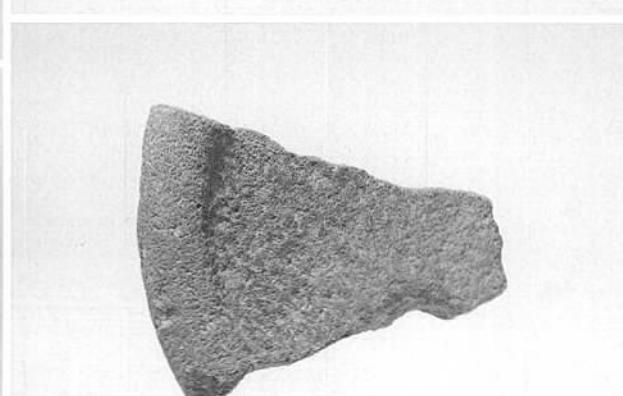
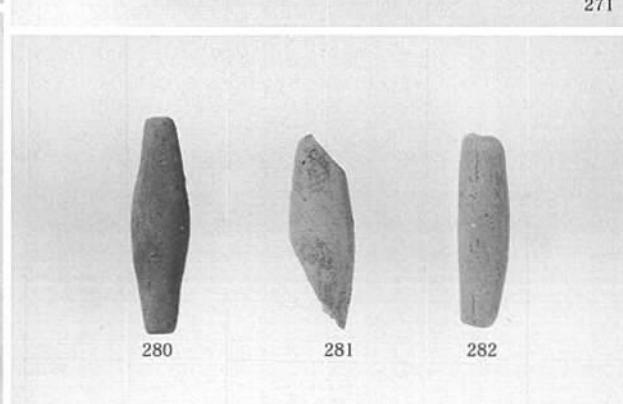
126



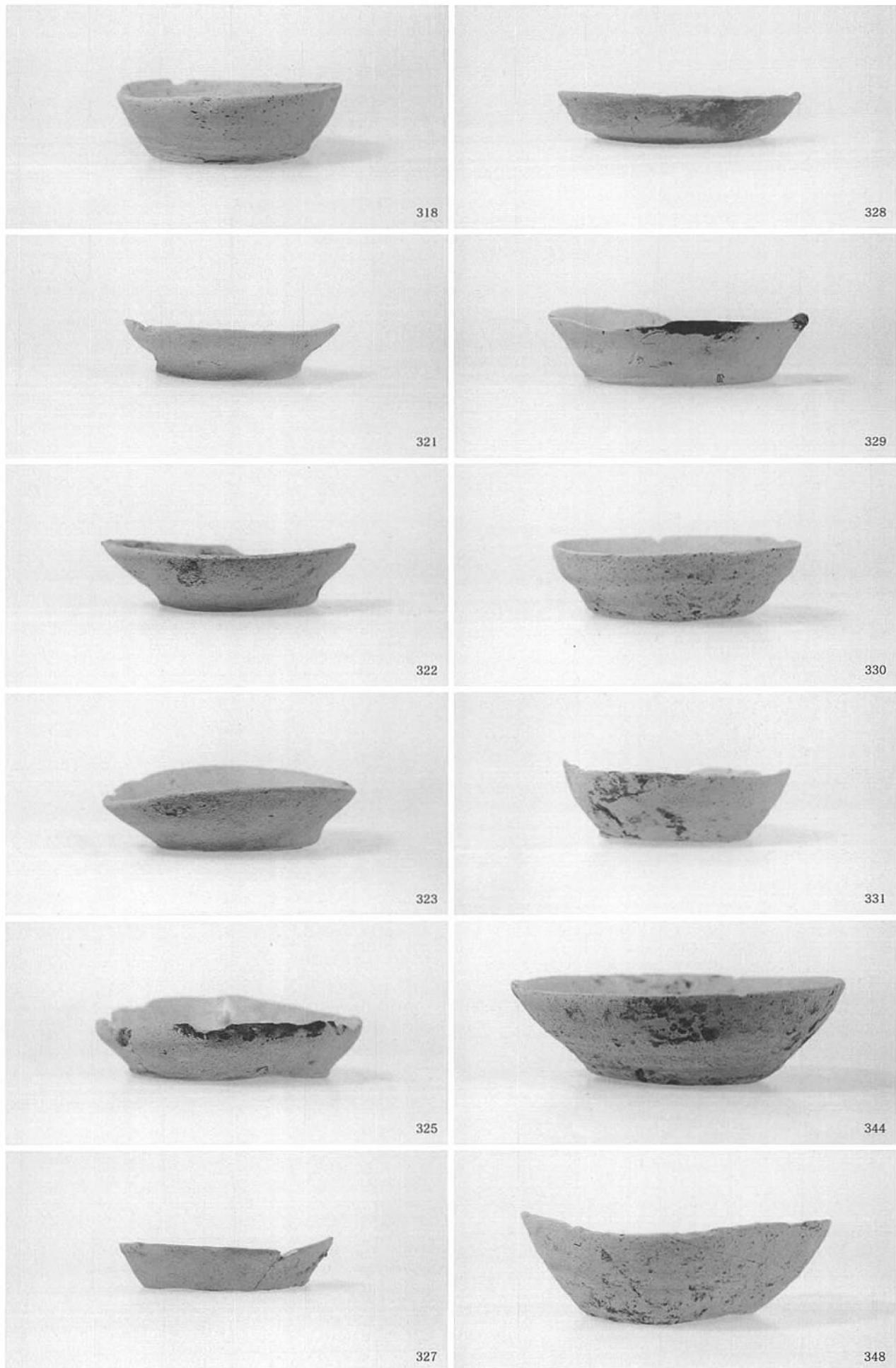
145



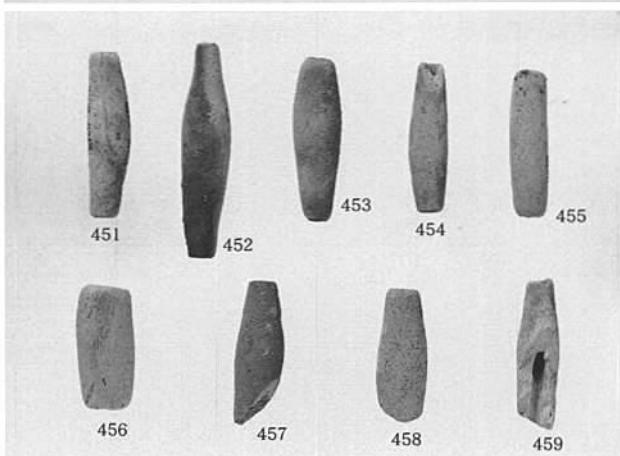
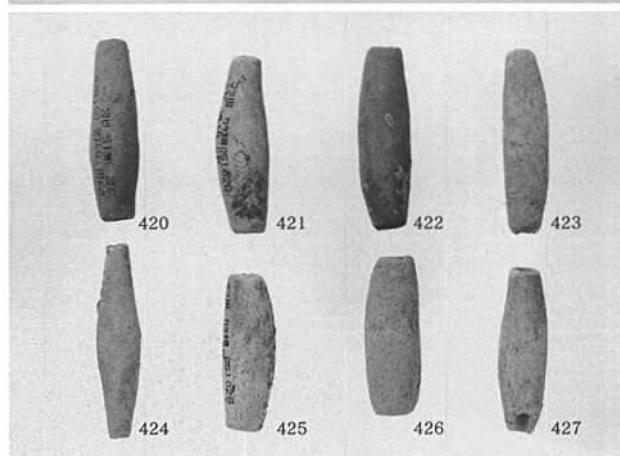
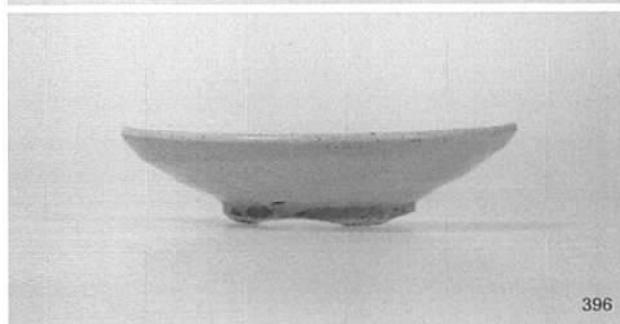
2区出土遺物



2・3区出土遺物



3区出土遺物



3区出土遺物



上. 岩本下内遺跡遠景
空中写真（南西から）



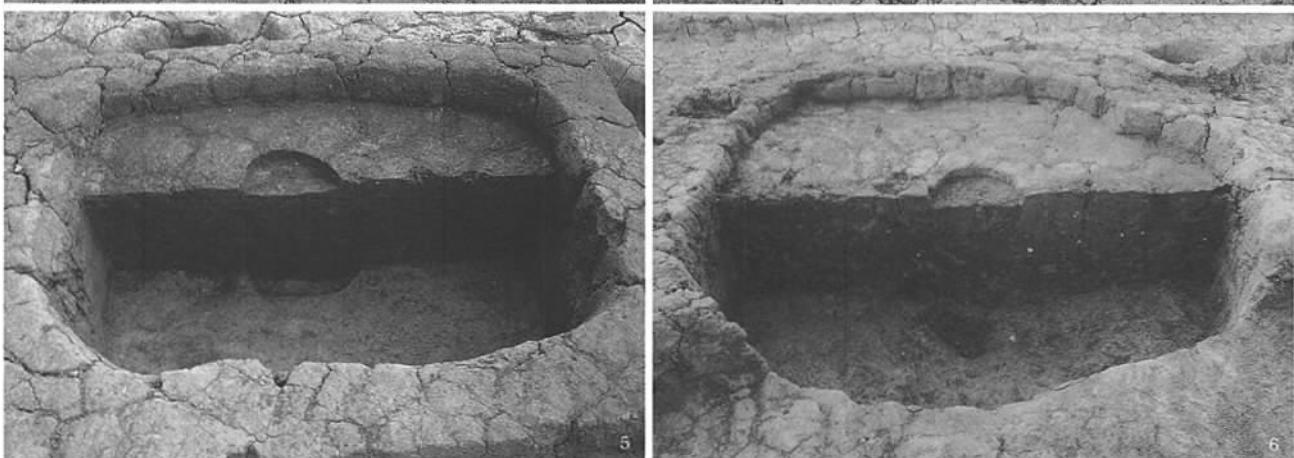
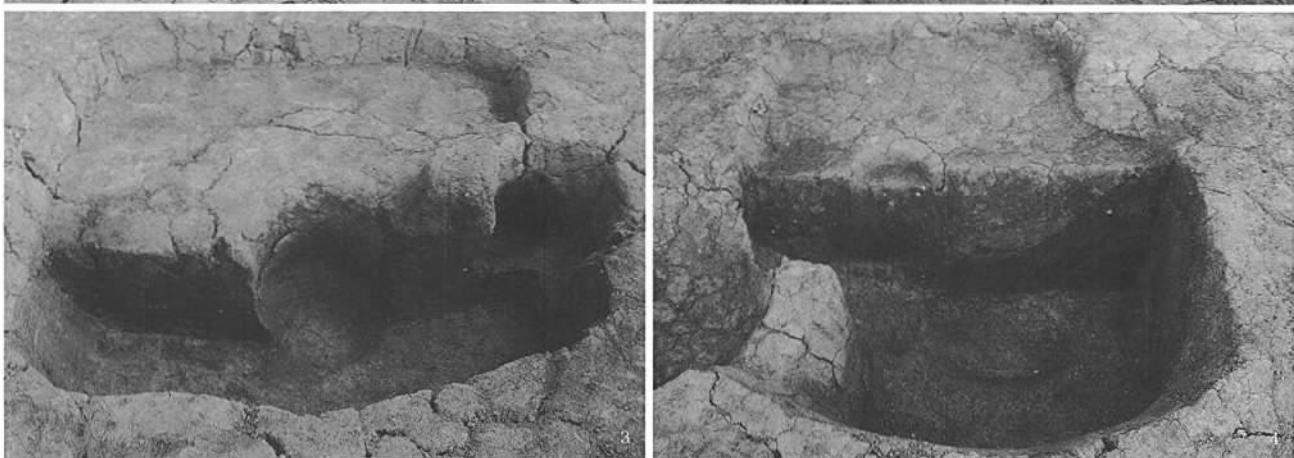
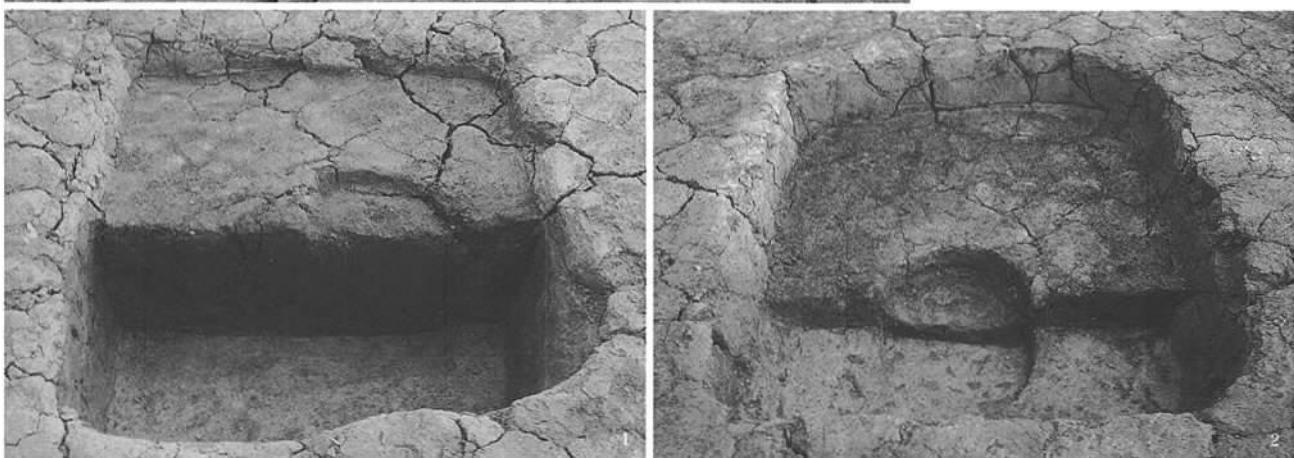
下. 調査区全景 空中写真

図版 24



上. 1号掘立柱建物跡
(南から)

下. 1号掘立柱建物跡
柱掘形断面土層



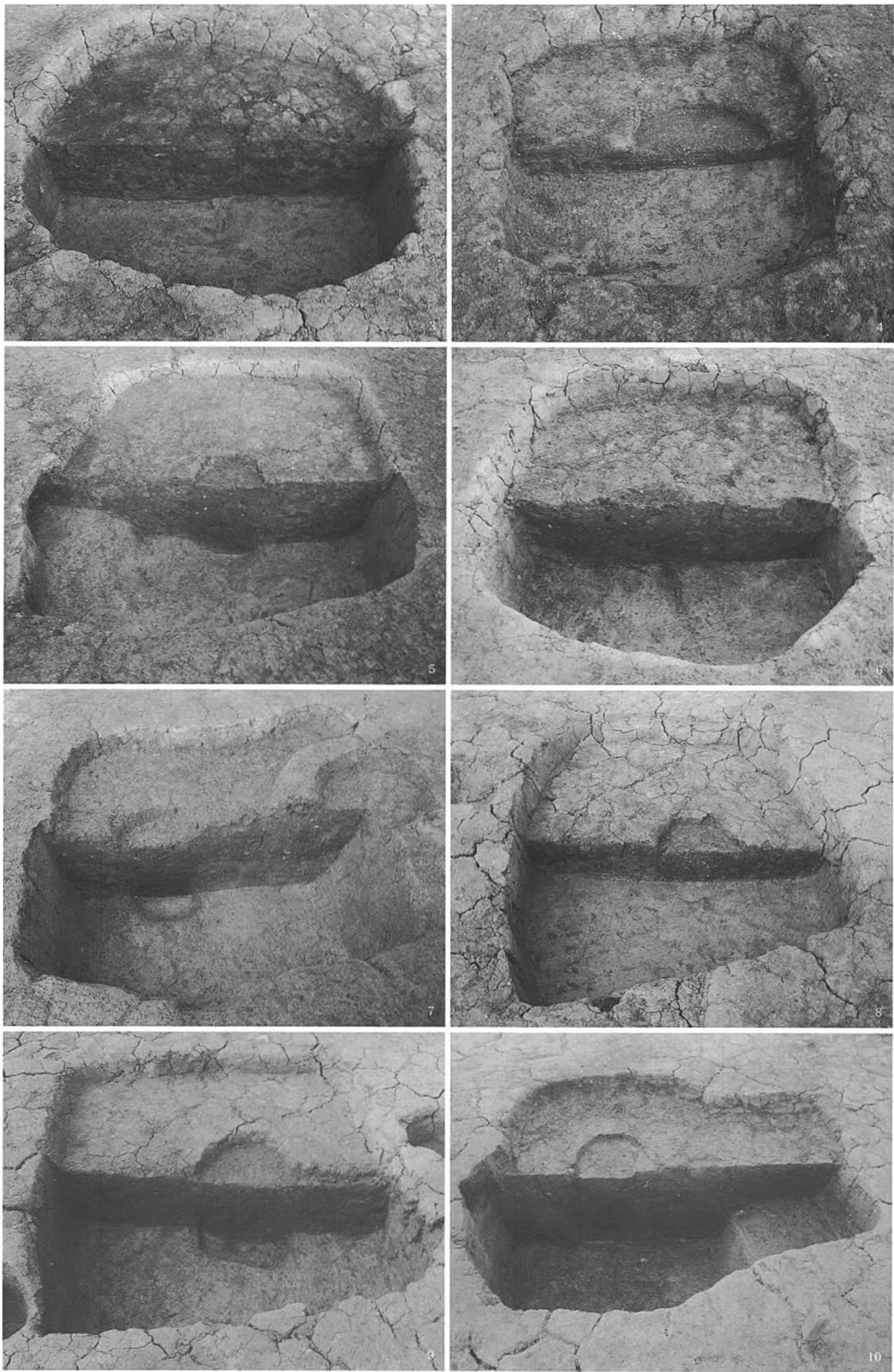


上. 1号掘立柱建物跡
柱掘形断面土層

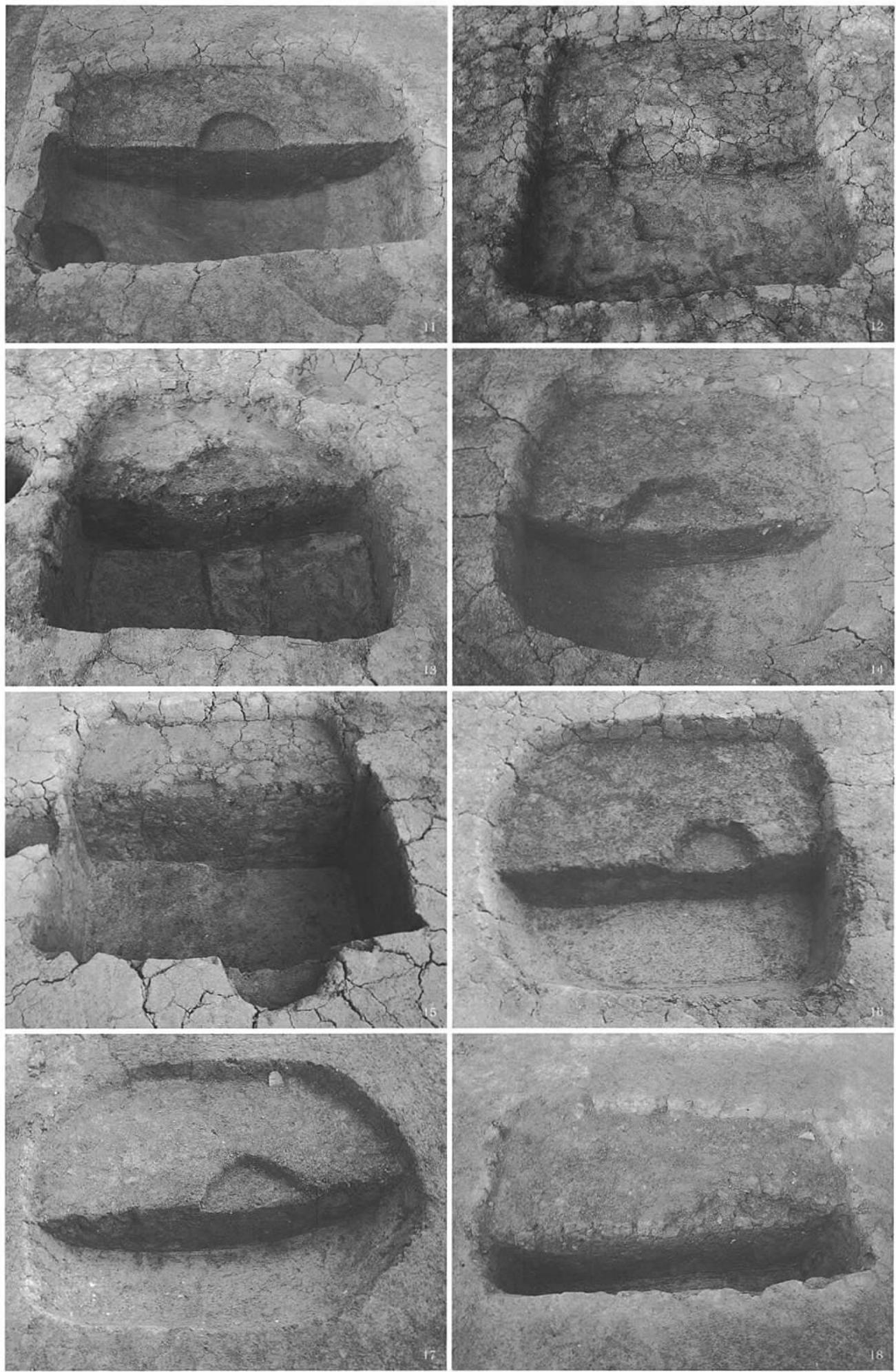


中. 2号掘立柱建物跡
(南から)





2号掘立柱建物跡 柱掘形断面土層



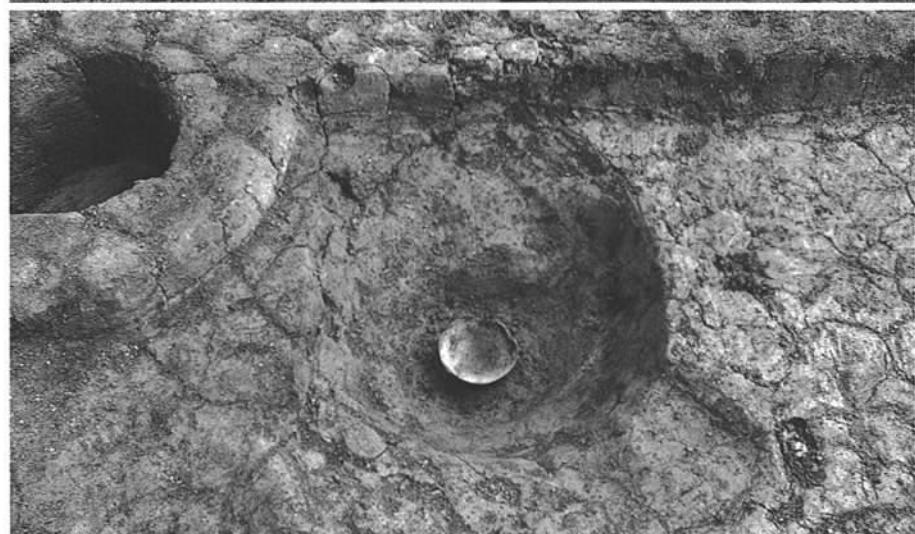
2号掘立柱建物跡 柱掘形断面土層



上. 2号掘立柱建物跡
柱掘形断面土層



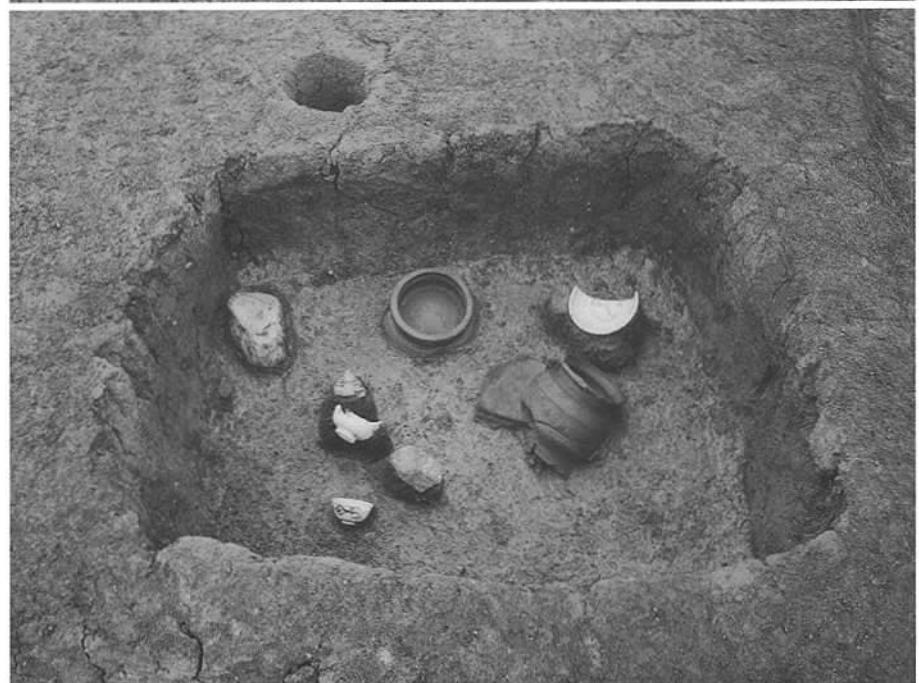
中. 1号竪穴住居跡 (南から)



下. 1号竪穴住居跡
土器出土状況 (北から)



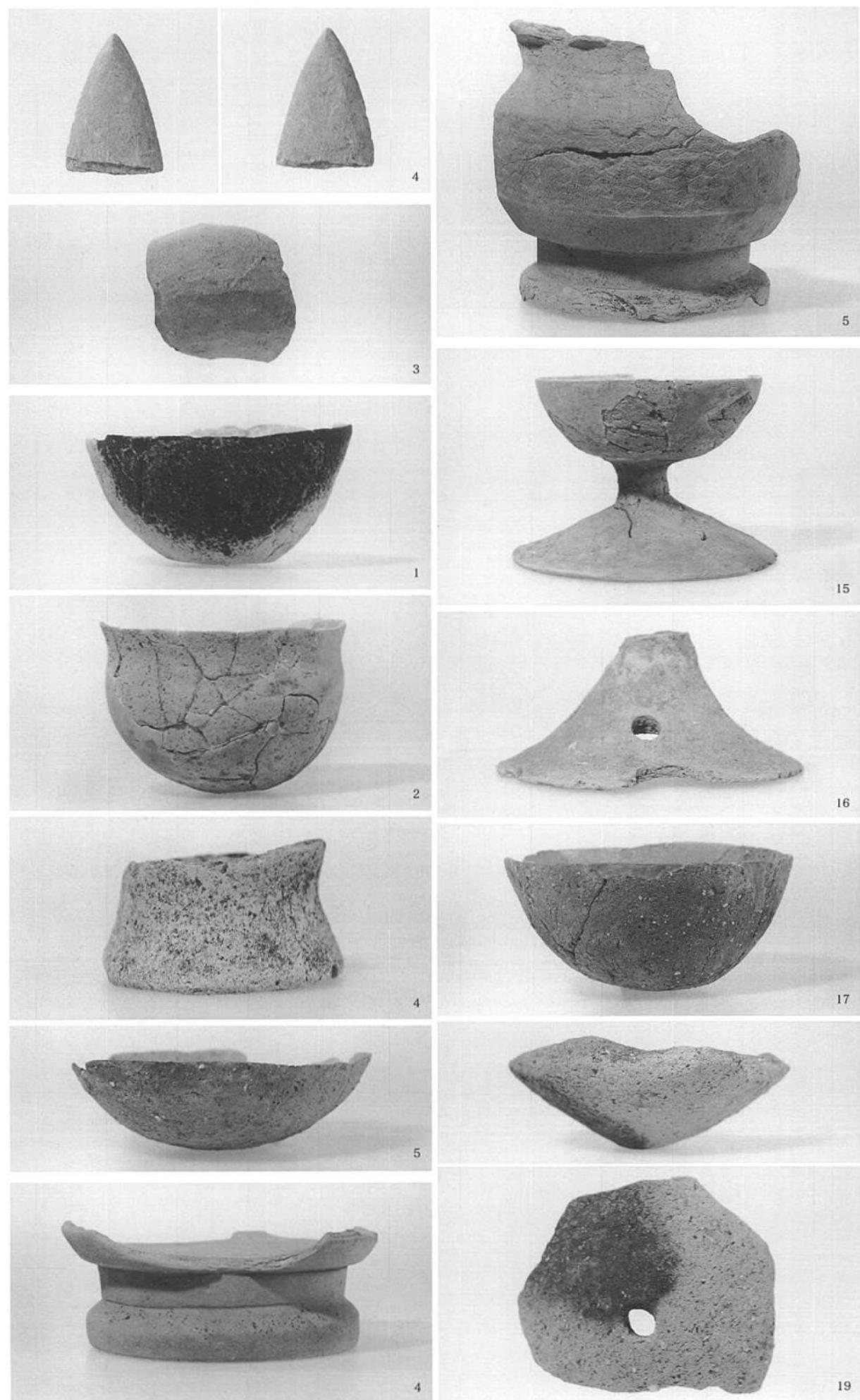
上. 2号堅穴住居跡（南から）



中. 4号土坑（東から）



下. 1号溝状遺構（西から）



各遺構出土石器・土器

報告書抄録

ふりがな	まつだかけはたいせき いわもとしもうちいせき						
書名	松田掛畠遺跡 岩本下内遺跡						
副書名	福岡県みやま市・大牟田市所在遺跡の調査						
巻次							
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第10集						
編著者名	小川泰樹・一瀬智						
編集機関	福岡県教育委員会（総務部文化財保護課）						
所在地	〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL092-651-1111 FAX092-643-3878 E-mail kbunkazai@pref.fukuoka.lg.jp						
発行年月日	西暦2008年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経		調査面積	調査原因
まつだかけはたいせき 松田掛畠遺跡	ふくおかけん 福岡県みやま市瀬 たかまちまつだ 高町松田	40229		30° 8' 50"	130° 29' 39"	2005.8.25 2005.11.18	800m ² 九州新幹線 鹿児島ルート建設
いわもとしもうちいせき 岩本下内遺跡	ふくおかけんおおむなし 福岡県大牟田市 おおあざいわもと 大字岩本	40202		33° 4' 4"	130° 29' 24"	2006.7.13 2006.10.31	770m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
松田掛畠遺跡	集落	戦国時代 江戸時代	掘立柱建物跡 井戸跡・土坑・溝	陶磁器 土師質土器 瓦質土器			
岩本下内遺跡	集落・ 居宅または官衙	古墳時代 飛鳥・ 奈良時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	弥生土器 土師器 須恵器			

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 19	登録番号 3

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第10集

松田掛畠遺跡 岩本下内遺跡

平成20年3月31日

発 行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7-7

印 刷 株式会社のぞみ印刷
福岡市東区社領2-21-15